



# 語りが生まれるとき

清教学園中学校 76期2年「魅力的な人に取材する」作品集

山崎勇氣・南百合絵 編



清教学園中学校 76 期 2 年 「魅力的な人に取材する」 作品集

# 語りが生まれるとき

公開に際し、本校生徒と取材相手の氏名・所属は、生徒が希望した架空のものに置き換えました。  
本文中の表現は、指導方針及び著者である生徒の意思を尊重し、原稿提出時のままにしています。

## 課題

- ① あなたが「魅力的だ」と感じる人に取材すること
- ② なぜその人に魅力を感じるのかをよく考えること
- ③ どんな取材で相手の魅力を引き出すか考えること

これらを踏まえて、あなたにしか書けないレポートを書くこと

語りが生まれるとき 目次

|                       |     |       |     |
|-----------------------|-----|-------|-----|
| 私の恩師                  | 聞き手 | 井村とも  | 8   |
| 山本さんの夏                | 聞き手 | 白井宏騎  | 20  |
| 好きなことを楽しむ             | 聞き手 | 紙谷奈々子 | 26  |
| 部活が明るくなる魔法使い          | 聞き手 | 相沢陽葵  | 34  |
| 尊敬する人                 | 聞き手 | 竹中幸太郎 | 48  |
| 挑戦することの大切さ            | 聞き手 | 泉谷遼介  | 54  |
| 私の魅力的な先生              | 聞き手 | 本田未来  | 68  |
| スーパ―元気な祖父             | 聞き手 | 野中真一  | 78  |
| 自分のやりたいことを全力で楽しむということ | 聞き手 | 蒼井風香  | 88  |
| 父と母と僕と動物              | 聞き手 | 大松和毅  | 98  |
| たけさんってやっぱすごい          | 聞き手 | 吉宮琴葉  | 106 |
| 笑顔の裏の責任感              | 聞き手 | 谷口いのり | 114 |
| 一步、大人に近づくために          | 聞き手 | 辻村優   | 128 |
| 姉の魅力と優しさ              | 聞き手 | 寺師明夏  | 142 |
| 私の嫌いな努力家              | 聞き手 | 渡部健一  | 152 |

元清教生のやばかった兄

ジャンパーを着る

まだ隠れた魅力

明るい祖母

あったかい心の持ち主

個性的な人の裏には

憧れの人への取材

私と高校2年生の兄

ポジティブは人にわけられる

僕と先生の思い出

憧れの先輩

大好きなおじいちゃん

私のお母さん

あとがき 語りが生まれるとき

あとがき はみだす・はみだされる経験

聞き手 || 亜野日里 160

聞き手 || 大山門左工門 166

聞き手 || 長理愛 180

聞き手 || 宮北莉華 212

聞き手 || 野田心 220

聞き手 || 長尾寧々 234

聞き手 || 田中陽翔 242

聞き手 || 河中優莉 260

聞き手 || 原希空 268

聞き手 || 金田勇氣 282

聞き手 || 遠藤はな 294

聞き手 || 香月漢琴 302

聞き手 || 平山由美 312

授業担当 山崎勇氣 326

授業担当 南百合絵 332

## 私の恩師

聞き手 井村とも

### 通級の先生

私が魅力を感じる人は藤井先生だ。藤井先生は私が通っていた小学校の通級の先生で、私が通級に通っていた時にお世話になった。

通級とは、何か苦手なことがある子が週に一回国語の授業に通級専用の教室に行って、通級オリジナルの授業を受けるところだ。ちなみに支援学級とは別のものである。ここでは所属しているクラスでやりなさいと言われた課題などと、通級オリジナルの授業を受ける。授業といってもカードゲーム（『はあっというゲーム』や『怪盗ルパンヤン』など）をしたり、SST（ソーシャルスキルトレーニング）と呼ばれる、クラスではしないような授業をしたりする。私は小学4年生の時に担任の先生に勧められて通級に入った。

藤井先生には、私は友達をつくるのが苦手なのだが、そのことについてアドバイスをもらった。私を感じる藤井先生の魅力とはなんだか安心できるところだと思う。

藤井先生が働いているN市立N小学校に、7月18日に電話をした。そこで「取材をしたい」という旨を伝えると「いついける？」と言われたので「22日の午後以降かそれ以降の日だったら基本大

丈夫です」と答えた。すると「じゃあ22日の午後3時からはどう？」とおっしゃったので「その時間でお願ひします」と言い日程が決定した。

#### 取材概要

日時…2025年7月22日 3時〜4時

場所…N市立N小学校 通級教室1

取材した方…藤井先生

自分との関係…小学校時代の先生

#### 取材するまで

その日は午前特別授業最終日だったので、学校が終わるとすぐ家に帰りご飯を食べたあと少しゆっくりして準備を始めたそして午後2時半ごろに家を出た小学校の時の通学路を通ってN小学校に行ったのだが、約一年半前までは毎日通っていたのにすごく懐かしく思った。

藤井先生に取材しにN小学校の通級教室にいくと、先生は通級教室のなかで何かを読んでいた。

「こんにちは」と声をかけると、「どうぞ座って座って」と言ってくれた。そして「飲み物持ってる？」と聞いてくれて「持ってます」というと「飲み飲み」言ってくれた。その後10分ほど、通級学級で一緒だった元クラスメイトの話や、私の学校の行事などの話をした。その後藤井先生に「魅力

的な人に取材する」の動機レポートと、授業を担当している総合学習の先生から渡すように言われた添え状を渡した。それを藤井先生に読んでもらった後で、取材を開始した。

先生になった理由

私「まずなんで小学校の先生になろうと思ったのですか？」

藤井先生「学校の先生になった理由？」

私「はい」

藤井先生「5年生、6年生の担任の先生が今思えば魅力的だったのかなと思います。どんなところかというと、朝に必ず先生が前日にあったこととか、朝のうちにあったエピソードをなんとなく雑談のように話してくれるんだけど、実はその奥には人としてどう思う？っていうことが隠れているんじゃないかなというのを、6年生でもわかるような言い方で話してくれる。

例えば『電車乗ってただよ、満員電車だったんだけどね、そこにちょっと隙間があつてその人がそこに一生懸命詰めたんだけどつまらなかつたから、パツと立ってどうぞって言つてはつたのを見たんだけどね』で止まる。だからその後を考えさせはる先生で、すぐく自分も真剣にそこを考えてたので、ああいう時間っていいなっていうのもあつたのと、中学校の数学の先生がとってもわかりやすい説明の仕方をする先生で勉強嫌いな子も『数学は好きやねん』って言わせているこの先生ってすごいなっていうのがあつて、小学校の先生になろうか中学校の先生になろうか迷つただけ小学校は体

育も音楽も図工も全部できるのよね。どっちかっていうとこうその子達とずっと長い時間関わりたくなってるので小学校の先生を選びました」

私「はい」

通級の先生になった理由

私「なんで通級の先生になろうと思ったんですか。」

藤井先生「正確に言えば校長先生からの命なんだけど、ほんととはね」

私「はい」

藤井先生「校長先生が通級教室の指導をしてほしいってことだったんだけど、その前に藤井先生がする前の先生がたまたま藤井先生に声をかけてくれて、こういう教室なんだけどって説明してくれはったことと、たまたま藤井先生が担任してたクラスに通級の子が二人いてその子とどうやってその子を良くしていったらいいんやろねっていう話し合いをする中で、先生の考え方がその前の先生にすごく近かったみたいで。で、通級の先生してくれないってお願いされたのが半分と、自分も一生懸命やりたい、でも上手くないかどうしたらいいんやろって思っている子達の応援はしてあげたいなって。

子供は基本できるようになりたいってみんな思ってるんだよねなんでもね、でもそれがうまくいかない、なんでやる、もういいやって投げってしまうんじゃないかって、ここをこうやれば上手くできるよっ

ていわれてほんまやーっていて乗り越えてくれるとまたやる気になつて、ほかのこともやろうってなつてそういうサポートができるのであればぜひやりたいなつて。通級にきました」

### 先生の先生の魅力

私「またQ&Aみたいになつてしまふんですけど、いつごろ先生になりたいと思つたんですか？」

藤井先生「小学校6年生の時」

私「あー、じゃあ5年生の時の先生がすごい」

藤井先生「よかつたなーっていう」

私「ちよつとその先生の魅力をもうちよつと」

藤井先生「その先生はその、ああしなさい、こうしなさいっていう指示ではなく、考えさせようとしてくれたのが一番大きかつたかな。どちちかかっていうと先生やたらああしなさいこうしなさいこうした方がいいよってアドバイスのになつちゃうんだけど、そうじゃなくていつも話の最後にこんなこんながあつたんだけど、笑顔で終わつて。はい、じゃあここははじめよかつてくるから、ん？つてなつてちよつと考えるつてのがあつたんで、あれがその『考えてごらん』つて言わなくても考えさせるような話の仕方をしはつたのが自分にはよかつたのかなつて」

藤井先生「逆にともちやんに聞きたいんだけど、ともちやんがさ、最初の頃に来た時と、もうすぐ

卒業だよっていうときと、ここに来ておんなじ気持ちでここに来てた？ それともどっかで変化してた？」

私「なんか楽しい時間やーみたいなの」

藤井先生「それは最初から？」

私「まあまあ。なんか数回きたら楽しいなーみたいな感じで」

藤井先生「その面白いなーっていう温度は、6年生までずーっとおんなじ感じ？」

私「ちょっと高くなってると思います」

藤井先生「高くなってるっていったん」

私「なんか色々なかよくなってる」

藤井先生「そうやね、そうやね。なんかそういうのを見てるのが楽しい、先生としては。たとえばともちゃんだけの例でいえば、最初に来た時ももちろん楽しんでくれたと思うんだけど、まあさっきの先生の担任の先生じゃないけど、こうしなさいあしなさいじゃなくてこれをどう感じる？ これをどう考える？ ってことをたぶんずっと投げかけていったと思うねん。それをずっと、ともちゃんなりに自分で吸収したりこれなんでもって聞いたたり、疑問に思ったり、こうした中で6年生くらいになってきた時なんか友達と楽しく過ごせるようになってきてたやん。それはきつと自分の中でこれはいいなーとか、これは良くないなーとかに気づき始めてくれたからとおもうんやんか。そういうきっかけをつくっていかなあかんかって先生は思ってるし、それにこう上手いことのとってかれて、で上手にこ

う思ってたことを達成してくれたりするとああよかった、また次の子そんななってくれたらいいな  
って思ってた仕事してる。イメージわく？ 自分に例えるとわかりやすい？」

私「そうですね」

私「先生が子供と話すときに気を付けていることはありますか？」

藤井先生「子供も1人の人間やから色々考えてるよね。これがええやろうと思ってるとおもうねん。悪意があってやる子なんてほとんどいなくて子供は。大人はあるけど。子供って良かれと思  
ってやったらペケだったとか、勘違いしてたとか、そういうことしかないよね。だからまず、どう  
したかったのかを聞きたいかな。でそこに、あ、こんな思いがあつたんかってわかったら、それが上  
手くいく手伝いにもなるから、だから絶対否定もしないし、だってこうしたかつたもんって怒って言  
ってたとしてもそうなんって一回その子の気持ちを受け止めてあげたいな。ただその出し方が間違っ  
てて自分が損するのであれば、その出し方では相手に伝わらないからっていう方法を教えてあげよう  
ってそのためにさき話を聞いてあげたいし、否定する気がない」

私「えっと、子供と接するとき一番気を付けてることはなんですか。」

藤井先生「話を最後まで聞く。よくほら、うんわかったわかったってよく先生たち途中で切っちゃ  
うやん。それって自分が担任したときしたことあると思うねん。忙しくて運動会の練習中やから、

ああもうわかった、はいはいって、言っちゃうときあんねんけど。やっぱりこの立場通級の立場だったらそれはしたらあかんかなってもう言いたいことない？っていうのは必ず聞く。で、上手く言えない子も多いんよね、やっぱりね、言葉でこう自分の気持ちが表示できなくなっちゃうまじいかなんかいことが多い子達が多いからそのときに言い換えてあげる。こういうこと？って聞いて。

で、かならずこう、字におこすんよね。一年生やったら一年生にわかる字におこしたり。高学年やったら高学年の字におこして。で、これであってる？て聞く。もつとちゃんと色々したらね。それで見たらだいたい子供らは、『うんあってるあってる』って。例えば困ったらもうそのことだけ見て『こうしていいこうね』で終われるんだけど。例えば友達と揉めました、お母さんと揉めました、色々ちよつとトラブルがあったときは、じゃあこれどうやって解決するか一緒に考えよって、方法も相談する。それは先生の勝手なやり方ではなくって、こんなやり方もあるよ、あんなやり方もあるよって二つ三つ言ってそのうちのどれか取らない？って相談をする。そういうことは気をつけてます。」

私「ありがとうございます」

藤井先生「あとは明るくする。あの先生は無意識だったんだけど、I先生に言われた。『藤井先生いつも楽しそう』って言われたんだけど」

私「確かに」

藤井先生「あ、そう？」

私「確かに、なんかずっと明るくて」

藤井先生「あ、そっかそっか。なんかせっかく、例えば今みたいにもちゃんが出来てくれたらやっぱ先生も嬉しいし、子供らも週に一回しか来られへんやん。で、そのときに元気な顔できてくれたら嬉しいし、さあこの一時間もしくは45分この場で一生懸命やろうっていう気持ちがあるからちょっとでも子供らに楽しく勉強してほしいし。先生も楽しい気持ちで勉強したいから。だって一週間に一回の授業ね、貴重な時間なんで楽しい気持ちで過ごしたいかなっていうのは気をつけてます。」

私「ありがとうございます」

ソーシャルスキルトレーニング

私「ソーシャルスキルトレーニング、結構あれじゃないですか、ちよくちよく」

藤井先生「ありました」

私「あれで一番伝えたいことってなんですか？」

藤井先生「あのねあれはね、実は普段子供達から入ってくる情報で、例えばスマホでちよつとトラブルあったとか、授業中先生に注意されたとか、持ち物持つてこなくて自分が困ったとかかあってあの自分が困ったことがあるとか。エピソード絶対子供らあるねんね。それが時期によつたら何故か6年生も5年生も、4年生もそんなこと言うてるっておこるねん。で、それを必ずもとにソーシャルスキルトレーニングの劇は作ってます。だから毎学期違うはず。日頃の子供らの情報とか、担任の先

生からの情報で、ここをちよつと頑張つてほしいなつていうことをトレーニングします。そんなこと考えてなきそうに見えた？」

私「いやいやいや。なんだろなーつて」

藤井先生「そうやつてつくつてんかなつて感じやな」

私「ちよつと気になつて」

#### カードゲームの基準

私「めちゃくちゃ話変わるんですけどこういうカードゲームって何を基準に選んでるんですか？」

藤井先生「んつと、まずはちよつと考えてほしいので、んーそうやね。カードゲームって色々あるんやけど、記憶させるためのものとか、見る力つけるためのものとか、ちよつと考えないとわからなとか。あの遊びなんだけど、やっぱり思考するものを必ず取り入れてるのと、あんまり難しすぎても今度楽しくないからちよつと考えると乗り越えれそうでみんなでこうわきあいあいと楽しめる。友達と楽しい時間をこうすれば過ごせるねんなつていうことも知つてほしいので。低学年だと喧嘩になるよね。『僕は十枚取つた』『私は三枚しかなくつた』みたいなかんじで」

私「あー」

藤井先生「こんなんしない！ つていう子もまだ一年つているんよね。その時間を楽しむつてことも教えた。だから二つ考えてるかな。このゲームで何を鍛えられるかと、ゲームをわいわい楽しめ

るかの。」

私「ありがとうございます」

取材を終えて

取材が終わったあと私の学校の話をしたり、先生が学校の引率で行った万博のパビリオンの話を10分程度したあと、そろそろ帰りますと言って帰った。その階段まで一緒に歩いたら行きは気づかなかったけど私が学校にいた時はなかった通級教室2があつてびっくりした。取材で通級のときにやったことが、どうやって選ばれたりしてるのか知れて嬉しかった。それにひさしぶりに藤井先生に会えて嬉しかった。



## 山本さんの夏

聞き手 白井宏騎

自分が取材をしようと思っっているのは年が二つ離れた部活の先輩の山本さんだ。山本さんは普段の何気ない練習でもピリピリしている試合でも、誰よりも大きな声で、聞いているみんなが納得するよくな声を出していた。そんな先輩に憧れていた。

その先輩たちと野球ができたのも約三ヶ月と一瞬だった。もっと先輩と野球がしたかった。そんな山本さんとは、今でもたまに学校内で会うことがある。

やっと三年生とも仲良くなってきた頃について夏の大会が近づいてきた。練習試合ではもちろん普段の練習の雰囲気も一気に変わったような気がした。普段は優しい山本先輩も、練習中はそのプレーに対してガミガミ言ってくるような、ちよつとうざい系の怖い先輩に変わっていた。でも、練習が終わった後は優しい先輩に戻るのであまり嫌な気はしなかった。

その山本先輩と一度だけ公園で自主練をしたことがある。普段の練習の時の先輩とは違って優しい先輩だった。いっぱい野球のことも教わったし、先輩と自主練できたことが何よりも嬉しかった。でも先輩も忙しいとのことと一回きりの先輩との自主練だった。

その夏の初戦。先輩は一番サードでスタメンだった。忘れもしないその初球、セフティーバント

(相手の意表を突くような難しいプレーのこと)をし、セーフだった。一気にベンチも盛り上がった。その回、他の選手のタイムリーでホームに帰ってきた。その裏の守備で山本先輩はファインプレーをした。憧れるような選手だった。その試合でセフティーバントを含め、4打数2安打だった。その試合は難なく勝利できた。

そしてついに先輩が引退してしまう試合が来てしまった。その試合は山本さんが先発(最初に投げるピッチャーのこと)だった。八回まで好投を続けていたが、八回に捕まってしまい、一気に四点を取られてしまった。結局九回に得点できず、4対2で先輩たちの夏が終わった。その時どんな心境だったのか聞いてみたいのでインタビュースることにした。

## 取材概要

取材場所…双方の家

時間…20時～20時半

インタビューを始めた。まずは山本さんにとって夏について聞くことにした。

自分「山本さんにとって夏の大会とはどういうものでしたか？」

山本さん「うーん、具体的にこういうものっていうのはなかったけど、すごいはじまるのが楽しみ

でした。」

自分「なんでなんですか？」

山本さん「今までやってきたことを思いっきりぶつけたら楽しかったです。」

自分「えーっとじゃあ、夏の大会の一番の思い出はなんですか。」

山本さん「えーなーなんやろー」

一分後：「やっぱり最後負けたことですかね。最後サヨナラ負けやったやん？ でもあんまり悔しいとは思わなかったし、何にも考えてなかったと思う。」

そう、山本さんの最後の夏はサヨナラ負けで終わってしまったのだ。その時サヨナラ負けというのもあつてその場の雰囲気はとても重苦しかった。今すぐにでも帰りたくなるような場だった。

自分「へーそういう気持ちになるんですね。」

山本さん「自分だけかもやけど」

### 普段の練習

自分「じゃあ、大会前とか、やっぱり練習への意識とかは違いましたか？」

山本さん「うーん、そやなK（当時のキャプテン）とかは変わってたかもしれないけど、自分は変わ

らなかつたですね。今更変えてもっていう感じでした。それより一日一日の練習を大事にしてました。練習前のアップ、キャッチボール、ノック、バッティング練習とか。これがもう最後の練習になるかもしれないという事は常に思っていたと思います。多分」

自分「自分もそういう局面になったらそんなこと思うんですかね」

山本さん「思うと思うよ、多分みんな思ってる」

自分「それだけ大会前は普段の練習を大切にしていたんですね」

山本さん「そうやな」

そして、今自分が一番聞きたいことを聞いてみた。

自分「実は自分一年生の秋ごろに一回やめようかと思ってたんですね。親にも一回話して、友達とも相談して」

山本さん「そうやったんや、理由とかあるん？」

自分「自分成績悪いんですよ、だから追試とか補講とか、いっぱい受けてて。それを先生に言いに行くたびに怒られて、もう嫌になつたんですよ、そういう時になつたら山本さんはどうしますか？」

山本さん「うーん、自分やったらまず初心かえって考えてみるかなー。なんで入試までわざわざ受けてこの学校に入って、なんで野球をやりたかったのかっていうのをまず考えます」と

自分「なるほど。自分は親に説得されて、今辞めたら一生後悔するでって言われました」

山本さん「昭和みたいやな」

自分「そうっすね。笑 あっそろそろ時間ですね。長い時間ありがとうございました！ 出来上がったら見せます！」

山本さん「楽しみにしてるわ」

自分「あ、最後ツーショット取らせてもらってもいいですか？」

山本さん「いいよ」

そして長いようで短かった30分のインタビューが終わった。30分話した割には文章が少ないが、それは関係のないこと、つまり雑談で時間を潰してしまったからだ。でも、聞きたい事は全て惜しみなく聞けたのでいいインタビューだったと思っている。



## 好きなことを楽しむ

聞き手 紙谷奈々子

### 取材の動機

私が取材相手に選んだのは祖母だ。祖母は様々な趣味を持っている。一方私にはこれといった趣味がなく、いろいろな事を楽しんでいる祖母にはとても魅力を感じる。家庭菜園をしていて、夏になるとたくさん野菜をくれたり、羊毛でキャラクターを作ったり。オカリナは、吹くどころか自分で作ろうとしていた。私も羊毛で何か作ろうと試みたが、とても難しく、祖母のようにうまくいかなかった。あれほどうまくなるのにどれだけ時間をかけたのかわからない。祖母は、一度やり始めると、深夜までずっと何かを作っていたりするらしい。そんな集中力や根気には、度々驚かされる。

今年の春休みも祖母の家に行った。祖母は絵が上手で私は祖母と絵を描くのが好きだ。その時は一緒に玉ねぎを描いた。最初、とても難しく諦めそうになっていた。しかし、祖母に完成を10とするとまだ0・1だと言われ、びっくりすると共に最後まで描こうと思った。

祖母とお喋りしたり、アドバイスを貰ったりしながら進めていくとどんどん楽しくなってきた。祖母と喋っていると、新しいエピソードを聞け、知らないことをたくさん知れるのだ。祖母の経験の豊富さがよく分かる。朝から絵を描いていたのだが、夕方、母が迎えにくるまでずっと絵を描いていた。そんな感じで祖母の家には1年に数回遊びに行く。祖母はとても優しく、明るくて、人を楽し

ませることのできる人だと思う。

### 取材概要

日時…2025年8月17日

場所…取材相手の家

取材した方…紙谷かすみさん

自分との関係…祖母

### 取材が始まるまで

祖母の家には朝、到着した。午前中は二人で教会に行っていたので、お昼から取材を始めることにした。いざ取材を始めるとなると、とても緊張する。大きな机の角で向かい合って座った。そわそわしていて祖母が入れてくれたお茶にすぐ手を伸ばした。祖母も自分も見ると同時に緊張していて、背もたれのある椅子に二人揃って背筋を伸ばして座っていた。いつも遊んでもらっている祖母に、敬語で話すのは思っていたより恥ずかしかった。

### 祖母の趣味

私「今まで一緒に遊んだり話したりする中で、オカリナを作ってみたり鉛筆で動物とかを書いたり

キャラクター作ったりとてもすごいなって思ったんですけど、なんでそんなたぐさんの趣味を持つとう  
と思っただんですか。」

祖母「今までたぐさんの趣味をしてみましたけど今も続いているのがこれらのことになったと思いま  
す。」

私「鉛筆とか羊毛の作品がとてもクオリティが高いものが多かったり、夜中まで何かやってたりし  
たっていう話を聞きました。とてもそういうのにこだわりが感じられて凄いなって思います。そのい  
ろんなことに向上心を持ってそのやるのは何ですか。」

祖母「えっとこだわるのは私の性質やからです。なんでもこだわってしまいます。」

私「一緒に色鉛筆や羊毛していたり、それを教えてもらってる時にとっても楽しそうだなと感じま  
す。えっと、何かを向上心を持って細かくやっていると難しいこととかたぐさんあると思うんです  
どうして楽しくそれらをできていますか。」

祖母「まず本当に楽しく好きでやってることだから、それがそんな風に見えているかと思いま  
す。それで今はもう歳をとって仕事をしていないので、自分のために時間をすっごいたぐさん使えて、え  
え、しかもそれに熱中しても全然支障がないっていうのがとても幸せな時間だと思います。」

好きなことと仕事

私「一緒に遊んでいる時に絵を書くことが多いですけど、絵を書くことはいつごろから好きなんで

すか。」

祖母「中学校のときから絵を書くのって楽しいなと思っていました。」

私「なんで絵を描くのが好きなんですか。」

祖母「まあ好きにあんまり理由はないかもしれないけど、まあその時間が一番自分にとって嬉しい時間っていうことかな。」

私「絵を書くことを仕事にしていたと聞いています。何の仕事をしていましたか。」

祖母「テキスタイルデザインの仕事していました。」

私「テキスタイルデザインという言葉は初めて聞いたんですけど、どういうことをする仕事なんですか。」

祖母「簡単に言うと服地の柄を書くという仕事です。あの頃はねえ、パソコンがなくて紳士のカタリーシャツのストライプなんかも全部、筆とポスターカラーで手書きやったんです。婦人服も全部手書きでとても繊維産業が盛んな時代でした。」

私「そのテキスタイルデザインの仕事をしていてよかったことや今に生きていることはなんですか。」

祖母「よかったことは、その次の仕事も、その次の次の仕事も、デザイン関係の仕事ができたことです。今している羊毛フェルトも色鉛筆のこともあの頃培った知識が生きているかなと思います。今色鉛筆をみんなで楽しんでいますけれども、何枚も自分の納得できるまで作品を書き直すっていうのは

その時培ったことと思います。でもみんなは一枚描いたらもうそれで十分と思ってしまうので、もつと何枚も描きましようって言うんですけども、なかなかあのそれはできないことみたいですよ。」

私「反対にその時大変だったことはなんですか。」

祖母「仕事で大変だったことっていうのはもう全て仕事って、どんな仕事も大変と思いますが、何もない白い画用紙に一から図案を書いていくっていうのはものすごくエネルギーが要りました。」

私「好きなことを仕事にすることについていろんな意見がありますがどう思いますか。」

祖母「好きでやりたいと思ってることと、実際に仕事としてやることはほとんどないかなと思います。」  
「自分がやりたいと思ってることを仕事でやるってことはほとんどないかなと思います。」

祖母「それで描いた図案はバイヤーに買ってもらうかわらないと仕事にならないので、決まらないうちから本当にめげました。でもそれを買ってあげてもらおうともう本当に嬉しかったです。自分の描いた柄のワンピースを着て歩いている人を見かけると、思わずつい行ってしまったほどです。」

私「テキストイルデザイナーになるためにどんな努力をしましたか。」

祖母「努力といっても、学校で学んだことはほとんど役に立っていません。仕事をしながら勉強することが本当の勉強かなと思います。」

私「では話は変わりますが、今までたくさんの趣味をしてきたと思うんですけど一番やってよかったなと思う趣味は何ですか。」

祖母「どの趣味もやってよかったなと思います。卓上で折り機を使ってマフラーやタペストリ

「なんかを織りました。たくさんのマフラーをみんなにもらってももらってとても喜んでもらった事は嬉しかったことでした。」

サークル活動のきっかけ

私「今一番力を入れている趣味は何ですか。」

祖母「教会で羊毛フェルトと色鉛筆の講座をしていることです。色鉛筆は私が書いた下絵にみんなが好きなる色を入れて行くことからはじめましたが、そのうち絵を描きたいという人も出てきましたので、まず玉ねぎの絵を描くことから始めてみました。絵を描くことはみんな初めてという人ばかりでしたが、本当に楽しんで一生懸命やってくれました。」

祖母「小学校一年生のときに先生から下手と言われて、もう一生絵を描かないと思っていた人がこの玉ねぎの絵をとて楽しいって言うてくれて。本当に色鉛筆をやって良かったなと思いました。」

私「そのサークル活動で色鉛筆をやるうと思っただきっかけを教えてください。」

祖母「ある日の夕刊に色鉛筆で描いた猫の絵が一面に載っていました。その絵を見て私は自分も描いてみたいと思いました。それでその人が使っていた色鉛筆というのが紹介されていましたので私はすぐにその120色の色鉛筆を衝動買いました。その色鉛筆を使って教会で講座をしてみようかなと思います。みんなに声をかけたらすぐ人が集まってくれたので色鉛筆講座に発展して今も続いています。」

私「その色鉛筆と、仕事の時使っていたポスターカラーでは、絵を書く道具としてどんな違いがありますか。」

祖母「ポスターカラーは色をいくらでも混ぜていくことができ、際限なく色を作り出すことができます。でも色鉛筆はその120色しか出せない。まあ重ねてもできますけれどもやっぱりその際限なく色を作り出すっていうことは無理なので、出来上がりに物足りなさを感じてしまう時もあります。でも色鉛筆は初めての人でもすごい簡単に描くことができます。そして出来上がりがとっても綺麗です。それから誰にでも楽しんでもらえて、年をとっていても初めての人でも絵を書くことを楽しめるっていうと、とてもいいアイテムかなと思います。」

私「その色鉛筆や羊毛のサークル活動を始めようと思ったきっかけは何ですか。」

祖母「それは私が教会にたくさんの方が来てほしいなあと思っていましたからです。新しい教会になったらそういう講座をしたいなと思うていました。長年の願いが叶いました。」

取材を終えて

取材の過程で感じたことは、祖母についてあまり知らなかったんだなということだ。いつも明るくて、とてもすごい人だと感じていた祖母にも苦労したことがたくさんあったんだなあとしど驚いた。同時に、やっぱり、ユニークで行動力のある祖母はたくさんさんの魅力を持っているなと思った。私も祖母のように好きなことをたくさん楽しめて、その時間を大事にできるような人になりたい。



## 部活が明るくなる魔法使い

聞き手 相沢陽葵

### 憧れの先輩

私には中学3年生にとっても魅力的な先輩がいる。吹奏楽部に入っていて、私と同じホルンという楽器を担当しているパートの先輩、関口なつ先輩だ。先輩は、中学2年生から吹奏楽部に入部したので学年は違うけれど、同期として関わってきた。だから、なつ先輩は唯一私のことを「陽葵ちゃん」ではなく「陽葵」と呼び捨てて呼ぶ先輩だ。特別感があつてすごく嬉しい。また、私はピアノを習っていたので、その知識を使って一緒に基礎練習をしたり、難しい楽譜を「ここはこうなんじゃない?」とか、「こっちの方がいいんじゃない?」と、互いに知つてることを教え合いながら練習していた。なつ先輩は高校一年生が卒部をするときの卒部式でホルンパートの先輩に涙しながら手紙を読んでいたところや、毎回のように自主練習に行つているところを見ると、本当に吹奏楽部が好きなんだなと心から思った。またそれと同時に、何事にも一生懸命で努力家だなとも思った。

### なつ先輩の魅力

なつ先輩の1番の魅力だと私が感じるのは、太陽のような明るさだと思った。去年、私となつ先輩が吹奏楽部に入部してホルンパートと決まった時にすでにいた先輩は2人。高校1年生の先輩と、中

学3年生の先輩だ。マンツーマンでお互い教えてもらっていたのだが、正直なところいつなつ先輩とあそこまで仲良くなったかは覚えていない。でも、初めの頃はお互い電車が近鉄方面なこともあってよく一緒に帰っていた。その時に最初からなかなかプライベートな話をしていなかったと思う。

でもやっぱり、ここまで私となつ先輩が仲良くなれたのは、なつ先輩のコミュニケーション能力や、明るさだと思う。同じタイミングに入部したからという理由だけでなく、なつ先輩の太陽のような明るさや、面白いところ。何より私に対する優しさに、どこか他の先輩よりも親しみやすさを感じ、いつの間にか「ただの先輩」ではなく「一緒にいると笑顔にしてくれて、魅力がたくさんある憧れる先輩」になっていた。

先ほど紹介したなつ先輩と、もう1人の中学3年生の先輩は男の先輩で、F先輩だ。最初は男の先輩というのもあったてなかなか話せず、来年もこのままだと気まづいなど思っていたが、なつ先輩が「ふじふじ」とF先輩のことを呼んでいるので、私もふじふじ先輩と呼ぶようになった。このふじふじは、清教吹奏楽部でお決まりの、パートの先輩が決めてくれるあだ名だ。人数が多いこともあって名前がかぶることが多いので、あだ名をつけることに決まったそうだ。最近はずごく話しやすくなったが、去年、私とふじふじ先輩が気まずくて話せないときは、いつもなつ先輩が間に入って3人で話そうとしてくれる。やっぱりなつ先輩は周りが見えていつも支えてくれる先輩だ。

そんななつ先輩に今回は、なつ先輩が吹奏楽部に入ったきっかけ、なつ先輩が考える吹奏楽部について、来年の76期吹奏楽部の運営（部長や副部長セクションリーダーのこと）の話など、いつも聞けないたくさんのことを聞いてみたい。

取材を依頼して日程が決まるまで

なつ先輩と2人で勉強をしていた時、私が「実は総合学習の『身近な魅力的な人に取材をする』つてあるじゃないですか？ それ、私なつ先輩にしたんです！ だから夏休みのどこかの日取材させてもらえませんか？」というと、なつ先輩は「え！ なつ？ ほんまに！？ めっちゃ嬉しいんやけど！」と、とても喜んでくださった。そんなに喜んでもらえると思っていなかったもので、びっくりしたのと同時にかわいいなと思った。そして、早くなつ先輩に取材してたくさん話したいなと思った。夏休みに入るとなつ先輩が「取材いつにするー？」と聞いてくださったので夏休み中の部活の日に決めて取材することになった。

### 取材概要

日時…2025年8月2日

場所…ワーキングコモンズB

取材した方…関口なつさん

## 自分との関係・部活の同じパートの先輩

取材が始まるまで

吹奏楽部は夏休み期間中、午前中に宿題をやる時間が3時間ほどある。その時間を使って取材をした。顧問の先生がワーキングコモンズを開けてくださったので、そこで取材をすることになった。最初の30分ほどは関係ない話をしてしまった。いつもなつ先輩と話していると知らない間に何十分も経っているので、今日は取材を終わらせるために30分で我慢した。でも結局、取材中や取材が終わってからも話が脱線してしまっただけで、まるまる3時間もなつ先輩と話していた。なつ先輩と真面目な話をするには少ないので緊張していたのだが、なつ先輩がいつも通りの感じで話してくださったので少しは緊張がほぐれた気がする。

なつ先輩の考える部活

私「今日はよろしくお願いします。じゃあ取材させてもらいます。まず、なつ先輩が考える理想の部活って何ですか？」

なつ先輩「理想の部活か。聞かれると思ってなかった。その、たぶん関西行くとか、大会で目標に向かってみんなでなんか熱中するのも大事やと思うけど、なんかそれよりも部活に行くのが楽しみ

でなんかやってみて楽しいなみたい。パートが好きやなってみんなが思えるような部活が一番いいな  
って思います。」

私「なつ先輩はその、理想にしている部活にするために何かしていることはありませんか？」

なつ先輩「あ、これあります。私、パートをとかく仲良くする、パート仲をとかくよくしたら  
まあ、自分のパートだけになつちゃうかもやけど、みんな部活が好きって思ってくれて、なつたちが  
卒業した後も楽しんでほしいなって思いながら、みんなでご飯食べに行ったりする計画を立ててま  
す。」

なつ先輩はいつもコンクール後や文化祭後などに打ち上げを誘ってくれるのでその理由を改めて知  
った。

### 人生最大の謎

私「ありがとうございます。じゃあつぎに、なつ先輩は二年生から吹部に入学したと思うんですけ  
ど入学しようと思った理由は何ですか？」

なつ先輩「理由ね。あのね、結構人生最大の謎なんやけど。笑なんかY（なつ先輩の同期で1年  
生から吹奏楽部に入学している先輩）に誘われて。で、なんかなつ以外にも入りたいって言ってた人

が2人おるから、いつかってなって入部したみたいな。普通にそんな感じでー。あと、ママが音楽系の人やったから楽しいかなと思ってやりました。」

私「そうなんですね。吹奏楽部に入ってホルンにしようと思っただけでありませんか？」

なつ先輩「なんか最初は別に楽器は何でもいいなって思ってた。最初、色んな楽器に体験に行った時は全部楽しかったからなんでも良くてね。でもホルンの体験に行った時に、M先輩（74期のホルンの先輩）のほめるのがうますぎてさ。あの、なつはちよつと褒められたら調子乗って好きになる人だから、そんな感じで楽器で決めたいというより、先輩に褒められて入ったみたいな感じかな。でも今ではめっちゃホルンの音も、ホルンのこともパートも全部好きやから結果的によかったなって。」

なつ先輩は私がホルンの体験に行く前からホルンの体験にいて、その時から初心者とは思えないうまさだったので、M先輩がなつ先輩を褒めていたのはすぐわかる気がする。

今年のコンクールで

私「えっと、なつ先輩は二年生から入って、ふじふじ先輩が居るじゃないですか。その、今回のコンクールの自由曲はソロが二箇所あったと思うんですよ。それを本番は二個とも、ふじふじ先輩が年功序列で吹いたと思うんですけど、それを吹きたいとかそういう気持ちと違ってありましたか？」

なつ先輩「出来るかどうかは別として、なんかふじふじを抑えてでも吹きたいっていうのは思わなかったかな。なんか、なつが思うのは、ふじふじが風邪ひいたり、しんどい時に代わってあげられるようにちよつと練習してたって感じかな。結構これ本当に思ってることで嘘じゃなくて。ふじふじがしんどい時とかに代わってあげれるように、自分なりに吹けるような状態にしてるけど。うん、自分が吹きたいとかはあんまり思わなかったかな。」

私は部屋で練習しているときになつ先輩がふじふじ先輩のソロを少し練習しているところを見て「なつ先輩やっぱりソロ吹きたかったのかな」と思っていたので、ふじふじ先輩がしんどい時にかわってあげられるようにと聞いた時はその考えができるのがすぐくかつこいいな、優しいなと思った。

私「じゃあ同じく自由曲はふじふじ先輩が1STでなつ先輩が2NDじゃないですか。そこも1STを吹きたいとかそういう気持ちはなかったですか？」

なつ先輩「正直今思ったら、なつの方が高い音が得意だから1STやった方が高い音多いしいんかなって思ってたけど、ホルンの楽譜って全部楽しいから別に2NDの楽譜でもよかったかな。」

私は3RDだったのだが、それでも唇がバテてしまったので、1ST、2NDの楽譜を吹いているふじふじ先輩となつ先輩はやっぱりすごいなと思った。でも、なつ先輩の言う通り楽譜はどれも関係なく楽しく吹けるので私も3RDでよかったなと思った。

なつ先輩「逆に陽葵は1ST行きたかった？」

私「私は、もう一人同級生がいて、自分が3年の年で自分が2NDやったらめっちゃ悔しいなと思うんですけど。先輩だから当たり前に自分よりうまいし、来年同じ年がないから絶対1ST吹けるって思ったら、今は自分がその与えられた3RDを頑張ろうって思います。あと、ソロもなんかいまは先輩の音を聞くだけで感動するし、そんな先輩を蹴落としてまで吹きたいとは思わないです。」

なつ先輩「じゃあ来年のコンクール曲にソロあってほしい？ あったら絶対陽葵吹けるやん？」

私「そうですね、前までは絶対欲しいと思ってたんですけど、今年コンクールでふじふじ先輩の音とかなつ先輩の音に支えられて自分が吹けたっていうのをめっちゃ実感したので、最近は自分がソロを吹くっていうのが怖いなとも思ってます。でも、いつかは絶対ソロ吹きたいなとも思ってます。」

このあと、なぜか文化祭の話になって盛り上がってしまった。

私「じゃあそろそろ次の質問行きますね。笑」

なつ先輩「どうぞ。笑」

運営について

私「えっと、去年運営選挙があったじゃないですか。それで75期の運営選挙があつて一応立候補には二年生から入った3人以外は、全員一応立候補したじゃないですか。それで、もしなつ先輩が一年から吹奏楽部に入っていたら何かを立候補したのかなとか部長副部長セクリの何に立候補したのかなつていうのを聞きたいです。」

なつ先輩「立候補するか、かあー。でもなんか先輩とか見てたら運営もめてそうやし、なつも苦手な人おるから1年から入つても立候補してなかったかも。でも立候補するならつて言われたら副部長かなあ。なんか部長はできなそうやし、セクリも音楽面にはそんなに詳しくないから。どれかって言われたら部長をサポートする副部かなあ。」

私はなつ先輩がすごく運営に向いていると思つていたので、1年生から吹部に入部していても運営に立候補しなかったと聞いてびっくりした。

なつ先輩「陽葵は運営なりたい？」

私「そうですね、なれたら良いなと思つてます。」

なつ先輩「文化祭終わったら多分運営決める時期になるけど、やりたいのもう決まってるん？」

私「まだ悩んでるんですけど、実はセクリやりたいなって思ってた。」

なつ先輩「うん、そんな気した笑 絶対陽葵むいてると思う！」

私「本当ですか？嬉しいです！」

文化祭が終わったら運営選挙が始まることに自分は焦っていたが、なつ先輩に向いていると言われて少し自信がついた。最終的に何をするか、運営になれるかはわからないけど頑張ろうと思った。

私「でも今の金管セクリのY先輩と前セクリのR先輩の次に私って向いてるのかなって心配で。」

なつ先輩「陽葵は技術もあるし、発言とかもできるし、絶対向いてるよ！やし、なつが陽葵がセクリになってるのを見たいし！笑」

先輩はやはり人を笑顔にする天才だと思った。嬉しかったし、先輩の後輩でよかったと思った。

なつ先輩の魅力

私「じゃあ最後に、私はなつ先輩はいつもポジティブ思考で明るくてすごく尊敬していて、どうやったら気持ち下がっている時に気持ちを少しでもポジティブにできますか？」

なつ先輩「ええー。難しいな笑 あんまり意識してないんよな。でも、ちょっと話は変わんねんけど、人やったら絶対苦手な人っておると思うねん。なつもおるし。でも絶対その苦手な人と関わらんあかん時つてあるやん？ だからそのときはその人のいいところつて絶対一個はあると思うからそれを探すようにしてる！」

私はそれを聞いてそんな思考ができるのか、と心からなつ先輩を尊敬した。やっぱり私の先輩はかっこいいなと思った。

なつ先輩「どう？ 結構話したよな？」

私「はい！ 聞きたいこと全部聞きました！」

なつ先輩「おっけー！ よかった。」

私「今日は改めてありがとうございます。宿題の時間だったのに時間作ってくださいありがとうございます。ありがとうございました。」

なつ先輩「全然！ 時間まであとちょっとやしなんか宿題わからんところ教えよか？」

私「良いんですか！？ お願いします！」

なつ先輩「もちろん！ いーよー！」

結局このままなつ先輩に夏休みの宿題を少し教えていただいて、取材は終わった。

取材を終えて

今回の取材で、なつ先輩は生まれ持ったの明るさもあるけど、部活をより良くするため、パートを楽しくさせるためにたくさんのことを裏で考えてくださっているのだと分かった。そして、周りのことをしつかり考えて行動できる本当の強さを持っている人なんだとも感じた。部活の面でも友達関係の面でも学習の面でも私は何度も何度もなつ先輩に助けていただいている。だからなつ先輩が私にしてくださいのように、私も先輩が困っていたら自分のできる範囲で相談を聞いたりしようと思う。そして、なつ先輩が困っている時にいつでも頼れる先輩としてこれから過ごそうと思う。私になつ先輩に魅力を感じ、憧れたように私もいつかそんな先輩になりたいと心から思った。

なつ先輩が作り上げてくださったこのパートを、このまま明るくて笑顔が溢れるパートとして維持できるように頑張ろうと思った。また、パートだけでなく自分自身の考えや、なつ先輩から教わったことを大切に自分自身も部活全体としても成長していきたいと思った。そしてこれから一時引退をしてまた帰ってきた時に成長した姿を見せたい。

日頃のさまざまな感謝の気持ちをこれからも伝え続けようと思った。



理科部

物理実験室2

女子バスケットボール部

活動日...月火水金土日  
場所...総合体育館  
第一体育館  
見学休養  
休養, 休養!

剣道部



卓球部

第2体育館  
木: 4:00~5:30  
土: 1:30~2:30  
ぜひ来てください

男子バレーボール部

ESS部



ハンドベル部

Handbell posters and notices including 'ハンドベル部' and 'ハンドベル部'.

合唱部

Chorus posters including '中高合同' and '清教会館'.

吹奏楽部

Brass Band posters including 'BRASS BAND'.

女子バレーボール部

美術部

活動日...月水金土  
場所...第二美術室  
見学の休養  
休養, 休養!

家庭科部

Home Economics posters including 'NEXT' and 'Saturday'.

書道部

活動日...月火水金  
活動場所...書道室の横  
(美術室の横)  
初心者の大歓迎ぜひ来てください

なぎなた部



「三箱」  
分け入れ

## 尊敬する人

聞き手 竹中幸大郎

### 〈取材の動機〉

今回、私が取材する相手は女性であり、通っているピアノ教室の先生の西尾先生だ。

西尾先生は教え方が上手でわかりやすい。それに、私が弾きたいと言った曲はすぐに楽譜を印刷してくれるのだ。

もし、リズムがわからなくて困っている時、LINEで言ったら即座に、動画を送ってくれ、ゆっくりと弾いてくれたり、リズムを教えてくれたりする。そんな素晴らしい先生を私は尊敬している。

教え方は穏やかで優しく、この曲はどのような曲なのか、またはどのようなイメージで作られたのか。どのような風に弾けば良いかなどたくさん教えてくれる。他に尊敬しているところと言えば、生徒自身の意見を尊重してくれるところだ。

例えば、自分がここを繋げて弾きたいなどと言うと、なるべくその意見を尊重して、じゃあこういう楽譜で弾いてみたらどうかなどと真剣に考えて提案してくれるのだ。

そこで今回、取材しようとしている内容は、なぜピアノ教室をしようと思ったのか。そして昔、自分が困っていた時、どう対処していたのかだ。

## 取材概要

日時…8月16日 8時15分～8時25分

場所…ピアノ教室

取材した方…西尾有香さん

自分との関係…ピアノ教室の講師

## 先生の過去

自分「えっとー。まず、自分が困った時、昔どのようにして対処していましたか。」

先生「自分がピアノを弾いていて、困った時は聞く人がいなくて。親にも聞けず先生は怖くて先生にもきけず、まあ自分で、できるだけ考えて練習していました。」

今と違ってネットもなくて調べるものがないので、とりあえず自分で練習して持って行って、先生が教えてくれるのをまた聞いてまた帰るっていう。今みたいにこう、気軽に聞ける時代じゃなかったです。とにかく先生が怖かったです。『こんなものもわかれへんのか。』みたいな感じで言われるので、あんまり質問できなかつたけど、まあ先生が言うことを、ちょっとその通りにしてみて1回家帰ってやってみようっていう感じの繰り返しだからなかなか丸もらえなかつたです」

自分「大変だったんですね」

先生「無茶苦茶大変やったわ」

ピアノ教室を始めた理由

自分「でも、なんでピアノ教室をしようと思ったんですか？」

先生「本当は弾く仕事をやりたかったんですけど。ブライダルって分かる？ ブライダルって分かっては結婚式に関わる職業のことやねんけど。それでピアノ演奏をやりたかったんですけど、リアルな話、土日祝日が仕事あって、普通の休みの日が仕事なんでちょっと嫌だなって思ったんですよ。」

それで練習してたんですけど結局ブライダルの仕事をやめようと思ったときに、『自分教えるのが好きかな。』と。それで引越した時の最後の先生がすごく好きでして、先生みたいな先生になりたいなと思って始めました。」

自分「その、最後の先生ってどんな感じだったんですか？」

先生「えーっと、質問とかを聞いたら『こんなもわからないのか』とか、そういう怒るってことはなく、いっぱいこう、本貸してくれたり。昔だから、レコード貸してくれたり。一緒になって考えられる先生でした。わけわからず怒るっていうことはなくて、なんか色々聞きやすかったかな。」

自分「なるほど。今と違って昔は大変だったんですね。先生は生徒に対していつも公平な態度を取っているんですか。」

先生「公平な態度を取ってるつもりでやってるけど、何て言うかな。この子はキツめに言った方がいい子やったり、絶対キツく言ったらあかん子やったり、もっとうまく言ってあげなあかん子やったり、色んな子がいるので、同じようにしているわけではなくて。何て言うか一人一人に寄り添っ

てあげて、どう教えれば楽しく弾いてくれるかなと思って考えて教えています。

竹中君は自分で考えていっぱいやってくれるから、一応自分でやってきてくれた中でこう一緒に考えてできるけど。まあ、なかなかこう自分で考えてやってくる子は少ないから、一個ずつ一個ずつ教えて行かなあかんと思っています。

でも『教え方』って言うのは違うかな。教え方っていうか、一緒にやっていくっていうか。色々、やりたいことを見つけて楽しんでピアノをしてほしいなと思います。そして楽しんでやってもらえるように、一緒にやっていって一人一人の支えになって行ければな。と思っています。」

## 責任感

自分「一人一人のことを大切に思ってやっているんですね。そんなピアノ教室の仕事で責任感が一番多いのはいつですか？」

先生「やっぱり発表会ですね。」

自分「クリスマスコンサートと発表会がありますが、やっぱり発表会の方が責任感が多いですか？」

先生「やっぱりそうですね。一人一人の曲名やったり、プログラム作る時に生徒さんの名前を間違えたりしてもいけないので発表会前となると慎重に行動するようにしています。」

自分「なるほど。そうなんです。アナウンスの人はどうやって決めているんですか？」

先生「今のところは立候補制でやっています。やっぱり生徒さんの好きなようにしてもらいたいですしね」

自分「だから今年は生徒さんがやっていたんですね」

先生「まあそうですね。去年まではなかなか立候補者がいなくて、決めるのが大変だったんですけど。今年は立候補してくれる人がすぐに見つかったので助かりました」

自分「見つかった時はどのような感じでしたか？」

先生「いつもは生徒さん一人一人に聞いていくんやけど、今年アウンスしてもらった生徒さんは中学校で、放送部をしていると言うことを聞いていて、そこで聞いてみたんですね。そして、即答でやります！ って言われてすごい嬉しかったです。来年もやってくれへんかなと思っています。」

自分「そうだったら嬉しいですね」

先生「すごい嬉しいわ」

自分「自分の知らないところにはたくさんの人が関わっているんですね」

先生「毎回毎回、人を集めるのがものすごく大変やけど、発表会が終わったら今年も無事に終わってよかったなと思いますね。自分のしてきたことは無駄じゃなかったんだなと思います。」

自分「僕も色々なことに貢献できるように頑張ろうと思います」

先生「ありがとう」

自分「本日は取材に協力いただきありがとうございました」

先生「こちらこそありがとう」

そうして先生に対しての取材は何の問題もなく終わったのだった。

と思っていたら、写真を撮るのを忘れていてレッスン後に撮ろうとしているのだが自分の番が終わったらずくに別の生徒が来るので写真を撮る時間を設けることができなくずっと困っているのだった。

## 挑戦することの大切さ

聞き手 泉谷遼介

僕が取材相手として選んだのは、小学6年生の時の担任の西山英孝先生だ。なぜこの人を選んだかという点、今まで関わって来た人の中で一番すごいと感じた人だからだ。

どうすごいかというと、いつも笑顔ですごくポジティブな人で活気に溢れていたからだ。西山先生はとても面白い先生で、ゲームのことからブレイキングダウンの話とか幅広い話題の話を持っているから、生徒全員からとても人気があった。かといって授業は手を全然抜いてないし、とてもわかりやすく、わからない子をほっていくような授業じゃなかった。だから卒業するまでとても充実した小学6年生を過ごせた。そのことから僕は西山先生に魅力を感じた。

西山先生のエピソードは面白いことだらけであったが、卒業式の日が一番印象的だった。3月18日の卒業式は無事進んでいって、最後に6年1組のメンバーと西山先生の先生を含むクラス全員で集まった。実はその日、みんなで先生に向けて「3月9日」という卒業ソングをサプライズで歌う予定だった。そしてみんなで歌って、うろ覚えのところもあったけれど歌い切ることができた。すると先生が号泣してしまった。みんな泣くとは思ってなかったから、少しびっくりしていた。けれど最後は笑顔で別れることができて、とても充実した卒業式を行うことができたのを覚えている。

しかしその1、2週間後くらいの終業式に、弟から西山先生が転任するというのを聞いた。つまり僕たちとほぼ同じタイミングで地元の小学校を卒業したということであった。とても悲しかった。そして卒業式以来、西山先生とは会っていない。このことから僕は西山先生に取材しようと思った。

取材を頼むまで

改めて、僕が今回取材するのは小6のときの担任の西山先生だ。いま、この動機レポートを書いて、いい人だったなあとしみじみ感じていたが、書き終わった後に考えてみたらなかなかクレイジーな人だったなと思った。

今思い返してみると、外国で拳銃を打ったことがあったり、小学生の頃はバイク？のレーサーだったり、友達とバイクで遠いところまで旅をしたり、急に歌い出したり笑。とにかく小学生の頃に聞いた話では、少なくとも普通の人より人生経験がはるかに豊富だなと感じた。そんな中で、教師という仕事を先生は選んだ。

僕は疑問を感じた。なぜそんな西山先生は、数ある職業の中から「教師」を選んだのだろう。また、僕が小6の時の5月に先生に子供が産まれた。その日の授業中に「いつてきます！」と言って学校を急いで出ていったのでとても印象に残っていた。だから僕は「なぜ西山先生は教師を職業として選んだのか」ということと「子供が産まれて教師生活は変わった？」ということを知りたいと思う。

## 取材概要

取材時間…2025年8月13日8時半～9時半

取材場所…マクドナルドN店

取材相手…西山英孝さん

自分との関係…小学校6年の頃の担任

## 取材開始

僕は集合時間の五分前くらいにマクドナルドについた。会うのは一年半ぶりだからとても緊張していた。しかし集合時間になっても先生は来ない。「遅いなくなんてこーへんの？」と心の中で嘆く。

結局西山先生は集合時間から4、5分遅れてきた。

久しぶりにあった先生は変わらず明るい雰囲気で「久しぶりやなあ笑」と話しかけてくれた。とても元氣そうで安心した。全く卒業式の日から変わっていきなくて少しびびくりした。

先生は「奢ったるわ！ 何がいい？」と聞いてくれた。僕はその日、朝ごはんを食べていなかったの、嬉しかった。「そんなの悪いっすよ！」と僕は言いつつ、結局マックマフィンセットを奢ってもらった。

インタビューを始めた。

僕「先生になろうときっかけを教えてくださいませんか？」

先生「中学2年生くらいに後輩にテニスを教えたことがきっかけかなー」

僕「テニス？」

先生「そう。ちょうど泉谷と同年くらい頃かな、テニス部のキャプテンに選ばれて、そこからよく人に『教える』っていうことが増えてきてん。それで後輩にテニスのコツとかを教えて、後輩が大会でいい結果を残したら自分のことのように嬉しくて、そこから人に教えるって楽しい！ って思うようになって教師を目指そう！ と思って、先生になっくん」

失礼だけど案外普通理由だなと思った。てっきり先生はもっと変わった理由で先生になったと思っっていたけれど、違った。けれどとても素敵な理由だと思うし、そんなに早くから、教師になろうという意識が固まっていたんだと驚いた。

僕「なるほどー。では、なぜ先生は中高の免許じゃなくて、小学校の教員免許を取って、小学校の先生になろうと思ったんですか」

先生「えっとねー実は小中高の免許全部持ってねん笑」

僕「え？ 全部すっか！？」

小学生のときに知らなかったことを言われた気がして、思わず驚いた。

先生「そう。笑 中高は体育の免許持っていて、なろうと思えば泉谷のところの清教の先生にもなれんねんで。けれど強いというなら、小学校の先生になったのはできるだけ生徒の成長に立ち会いたいと思ったからかな。小学校の先生はいろんな教科教えられるしな。そのぶん大変なことも多いけど、やりがいがあつていい仕事やで。」

僕「ありがとうございます。次に授業の時に工夫していたことを教えて欲しいです。授業を受けていてとても楽しかったのです。」

先生「ありがとうございます。笑 そうやな。まずは全員とりあえず授業を受けさせることを意識してたかな。たとえば、泉谷みたいに勉強できる子も居れば、あんまり得意じゃない子もおるやん?」

僕「僕、賢くないっすよ。笑 けれど確かに頭が良い、悪いは別れてきますよね。」

先生「そう、説明ばかりやと眠たくなるやん?」

僕「なります。笑 僕も授業中寝かける時ありますもん。」

先生「笑 だから社会の授業とか、この絵を見て気づくことある? とかまずは誰でもできるようなことから始めてたやん?」

僕「そうですね。あとは算数の授業とかは、説明できて、完全に理解した人はグー、ちょっとわかる人はチョキ、全くわからん人はパーの手を挙げる（問題などの解説の時によくやっていた）みたいなやつてましたもんね。」

先生「そうそう。まずは全員参加させたかった、勉強が嫌いって思う子でもどう言うふうになら楽しい！と思うてくれるような授業を考えてたかな。特に算数とかはグーの人がパーの人を教えたり、できるやん？生徒同士で教え合つてわかることもあるやろうし、そういうのも意識してたかなー。」

いつもちよけてた先生が真面目な顔で話していて、とてもかっこよかった。僕は何気なく受けていた授業にこんな工夫がされていたことに驚いた。確かに、今思い返すとみんな笑顔で楽しそうに授業を受けていたし、生徒一人一人輝かせるような授業にとっても感心した。

僕「先生って意外とそういうの考えていたんですね。ただ授業のテンションだけで、乗り切ってたと思っていました。笑」

先生「ちゃんと考えてるわ！笑 東京まで行ってすごい人の授業とかを観察しに行ったこともあるし、全国のすごい人の授業を見に行つたで！結構頑張ってるで。」

僕「すごいですね！先生って本当に仕事熱心ですよ。あ、そうそう。思い出した。僕ずっと聞きたかったんですけど、先生、僕が小6の時の5月に子供産まれそうやから行ってくる！って授業から飛び出したことありましたよね。」

先生「あった。あった。忘れるわけないやん笑」

僕「僕その日のことすごく印象に残ってて、子供が産まれて変わったこと教えて欲しいです。」

先生「んーそうやなー。やっぱり時間をちゃんと気にするようになったかな。子供が産まれてから家族と接する時間が増えるし、そのぶんもっと家族を大事にしようって思った。子供産まれるまでは結構夜遅くまで仕事してん。遅くて9時くらいに帰ってたし。」

僕「きついつすね。ほんまに。」

先生「そうやな。けど今は早く子供に会いたいから子供産まれるまでよりもかなり早く帰るようにしてる。家族との時間を大事にしたいし。泉谷も家族の時間大事にしーや！」

僕「はい！つまり時間を気にして生きるようになったってことですね。」

先生「うん、そうやで。」

僕はこの時少しツツコミをしたくなった。あれ？今日結構遅れてきたくね？と。取材をお願いした側なのにかなり失礼だが、遅刻するタイプではないと思ったから、少し不思議に思った。けれど取材は続けなければいけないので、心の隅に置いておくことにした。

僕「お子さん今年で二歳ですよ。まじで早いっすね。」

先生「そうやなく。ほんまにあつという間やで。笑」

僕「ですね。」

次の質問が思い浮かばなくて、この時、結構気まずかった。とりあえず奢ってもらったマックマフィンを食べ終えてから、少し雑談をした。教師の裏話とか、O公園まで自転車を漕いで生徒を探しに行った話など、とても興味深いくて面白い話が多かった。もつといろんな話をしたかったけれど、先生が帰らなければいけない時間が近づいていたので、思い切って最後の質問をすることにした。

僕「では最後の質問いいですか？」

先生「はい、お願いします。」

僕「先生って教師としての『仕事』だけじゃなくて、生きている上での人生経験が他の人より上だと思っんです。小学生の時に西山先生のいろんな話を聞いたから。そこで聞きたいんですけど、先生が生きている上で意識していることを教えて欲しいです。」

先生「うーん、そうやなー。自分が漫画の主人公やと思って生きているかな。当たり前やけど、人生は一度きりやん？ だからこそ後悔しないように行動してるし、とりあえず楽しい人生を歩めるように生きてるかな。」

僕「なるほど。西山先生らしいですね！」

先生「それでさ、せっかくやから実はフルマラソンに挑戦しようと思うねん。」

僕「え！？ フルマラソン！？ あの、42キロ走るやつすよね？」

めっちゃくちゃデカイ声を出してしまった。フルマラソンと聞いて、今日一番驚いた瞬間だった。

先生「そう。淀川マラソンに参加しようと思うねん。だからその練習で今日家から、マクドまで走ってきてん。」

僕「すごいっすね！ 尊敬します！」

僕はここで疑問に思っていたことが晴れた。今日先生が遅れてきたのは家から走ってきたからだと。確かに先生がついた時少し息がきれていたような気がする。先生は目標に対して熱心な人だと思っ

先生「これからの人生、泉谷がどの部活に入るかとか、どの進路を歩むか、どんなことをするかは泉谷次第やから後悔しない人生を歩むんやで！」

僕「はい！がんばります！これで取材は終わりです。ありがとうございました。」

先生「ありがとうございます！」

僕「あ、最後に写真いいですか？」

先生「よっしゃ。とろ！」

僕「はいチーズ、はい！取れました！あとで送つときますね。」

先生「ありがとう！この動機レポート？もらっていいの？」

僕「大丈夫です！」

先生「ありがとう！嫁さんと楽しく見させてもらうわ笑」

僕「はい、ぜひ！」

先生「じゃあ、そろそろ解散しよか！」

僕「はい。ありがとうございます！」

そうして、先生は走って帰って行った。先生の背中が離れていき、ついに見えなくなった。少し悲しかったが、一年半ぶりに会えて、本当に楽しかったしいい経験ができた。

取材を終えて

僕はこの取材を経て、西山先生の教師としてのことと、人生のことについて聞けて、とても楽しい経験ができた。特に僕は西山先生の「自分は漫画の主人公だと思っただけで生きる」と言う言葉にグッと来ることがあった。自分は本当はやってみたいのに、周りの目や失敗が怖くてそのことに挑戦できなかったことが何回もあった。けれど、西山先生の言う通り人生は一度きりだから「あの時こうすればよかった」じゃなくて「この時ああいう経験をしてよかった。」と思えるようになりたい。だから失敗してもいいからどんどん挑戦していく気持ちを忘れないしようと心に誓った。







## 私の魅力的な先生

聞き手 本田未来

### 取材動機

今回私が取材しようと思っっている相手は吹奏楽部の顧問で、中1Aクラス担任の坂本信雄先生だ。私は吹奏楽部に所属していて、パートは太鼓や鍵盤楽器を演奏するパーカッションパートだ。坂本先生とは部活でしか関わることはないのだが、学生時代に私と同じパーカッションパートを担当していたこともあり、私たちの出来具合を見てもらい、指導して頂くこともある。

パーカッションは楽器が非常に多い為、演奏会やコンクールの前に楽器をトラックに乗せる「積み込み」という作業をしなければならない。私は積み込みの準備をするにあたり、下校時間に間に合わせなければいけないという思いで、同期の子に曖昧な指示をしてみました。焦ってしまおう。そんな私に対し、坂本先生は焦るといふ表情や雰囲気は一切感じさせず、どちらかという楽しんでような雰囲気準備をしている。そんな姿を見て私もこんな積み込みをしたいと思った。その後日、坂本先生は「積み込みはどれだけ楽しくできるかが大事。怒ったり焦ったら駄目。」と言っていたことが私の中でとても印象に残っている。

積み込みの日、パーカッションパートを含む積み込みメンバーは朝早く学校に登校し、積み込みが終わると顧問の先生方や世話人の方の車に乗せて頂き、現地（ホール）まで向かう。今年に入ってか

ら6月に初めて積み込みがあった。私、そして同期の1人と坂本先生の車に乗せて頂いたのだが、去年の話をしたり先生の学生時代の話を聞いて盛り上がった。この話しやすかったり相談しやすい所、明るく話をする所が魅力的だと思った。

私はすぐに嫌なことがあると落ち込み、考えすぎてしまうネガティブな性格なのだ。そんな私に対して坂本先生はいつも明るく、ポジティブで羨ましい。前向きに過ごすために心がけていること、ネガティブになることはあるのか、また色々な職業がある中、なぜ教師という職業を選んだのか聞きたいと思う。

取材日程が決まるまで

期末試験が終わり、午前中授業に入って1週間がたった日の朝礼後。私は総合学習の授業担当の先生から預かった「添え状」と、1学期かけて書いた「動機レポート」を持って、坂本先生が担任を持っている、中1A教室まで行った。渡すと嬉しそうな表情の反面、少し恥ずかしそうな顔をしていた。その後の自主練で、23日のホール練習の後に取材をするという話になったのだが、ホール練習があまりにもハードだった事もあり、お互い疲れ切っていたので別日にする事になった。

取材概要

日時…2025年8月1日 10時30分～11時

場所…ワーキングコモンズ

取材した方…坂本信雄先生

自分との関係性…吹奏楽部の顧問の先生

取材が始まるまで

吹奏楽部では8月に入ると午前中は各学年の教室で課題を進めるというのが毎年恒例になっていて、2コマ目が終わった休憩時間に職員室まで行くと「ワーコモでいい？」と聞かれると私は「大丈夫です」と答えワーキングコモンズまで向かった。私が録音機能を使っているのをみて、「こんな機能があるんや、すご」と驚いていた。

先生が教師になった理由

私「では取材を始めます。まず最初に先生が教師になった理由ってなんですか」

坂本先生「それは理科の教師関係なく？ 教師っていう職業になった理由？」

私「教師という職業になった理由です。」

坂本先生「そうやなく。一番は、人に教えるのが好きやったからかな。いつくらいからそうなったかったかというと、小学校の時にサッカーをやっててんけど、同期とやるよりは下の子と一緒にサッカーして弱いけど頑張って強くなってるって、先輩らが任せていくというのが楽しくなってるって。」

自分がサッカーするより教えるのが好きになっていったっていう感じかな。そこからどんどん教師になりたくなっていったかな」

私「じゃあ昔から教えるのが好きだったって事ですか？」

坂本先生「そうそう。小学校の時ぐらいからそうやったと思います。」

私は坂本先生がサッカーをしていた事はどこかで聞いたことがあったが、小さい頃から人に教えることが好きで、好きだった事を仕事にしている、というのはすごく良いものだなと感じた。

ポジティブの根底にあるもの

私「ありがとうございます。私は部活とか普段の中で、坂本先生いつもポジティブだなんて思っているんですけど、教師になってから今まで自分が明るくしようと思ってポジティブにしていますか？」

坂本先生「最初はそうやったかな。雰囲気重いのが苦手で、そこをなんとかしようと思ってたけど、そのうちにそれが普通になっていったかな。先輩とかとギスギスするの嫌やな〜って思ってた。場を盛り上げたくなって、みんなが真剣にやっていると追い詰めていっちゃうけど、そんな事しても良いことないねんな。なんでもそうやけど。そうやって無理して最初は明るくしててんけど、どんどんそれが普通になっていったかな。」

私「慣れっただことですか？」

坂本先生「うん。逆にそれしかできへんくなった。笑」

ここで「別に録音せんくても良いよ」と言われたものがあり、良い内容だなと思ったので紹介しようと思う。

坂本先生「これ別に録音せんくても良いんやけど、今回の取材で質問とか何個か考えてくれてると思うんやけど、これっていう答えが出てこなかったんよね。だから、俺も自分の事を知ろうっていう意味で来ました。笑」

私はこの時心の中で、取材の動機レポートに書いていた質問内容に対して、先生は答えを考えてきてくれていたんだ。と感じて、驚いた。

坂本先生「ポジティブの話に戻るけど、その根底には人に教えたいからっていうのも勿論あるんやけど、ずっと俺、中学の頃とか音楽始めてからやけど思ってるのは、【向上心を持ち続ける】って言うてるねん自分で。吸収できるものがあれば全て吸収していききたいタイプなんよね。だから自分がないものを持つてる人羨ましい！って思っちゃう。だから別に年齢関係なく、後輩だろうが生徒だ

ろうが大人だろうが、自分に持ってないもの持つてる人いいな〜って思ってた認めて盗む。」

「盗む」というワードを聞いて私は少し笑っていたが、今思うとこのワードにはその「盗む」という意味には深い意味があり、その意味が分かったような気がする。その後、私は取材の緊張のあまり、次の質問内容をド忘れしたり、録音機能が半分以上消えてしまい、しばらく焦ってしまった。

目標を立てるために

私「その、さっき質問したポジティブの話に戻るんですけど、先生はネガティブになる事ってあたりするんですか？」

坂本先生「めっちゃあるで。俺の悪い癖なんやけど、人の目をめっちゃ気にする。すぐ言った後とかにネガティブな気持ちになりがちやねん。だからいつもポジティブにしたりしようと思ってたのはそれが原因かな。だからあんまり良い意味じゃない。」

私「ネガティブになる事はあるけど、表には出してないから周りにはポジティブに見えるって事ですよね？」

坂本先生「そうやと思う。後はネガティブになっても寝たら忘れるって思ってるかな。笑」

私「笑笑」

坂本先生「これ多分遺伝やな。本田ちゃんはどうなりたいたかあるん？」

私「今、私はこうなりたいという目標がないんですよ。どうしたらいいんかなって思ってた。」

坂本先生「どうなりたいてって難しいよな。自分が生きやすいほうを生きるべきやけど、それこそ今回の地区大会（7月30日に行われた吹奏楽部のコンクール）ではポジティブにいった？」

私「本番前ってアクシデントとか色々あるじゃないですか。半年前の私なら多分そのままの気持ちで出てしまったと思うんですけど、切り替えて全力を出せました。」

そこから地区大会の話で少し脱線してしまった。

坂本先生「本田ちゃん泣ける人？単純やけど映画とかそういうので」

私「え！全然泣きません。めっちゃ泣きます！」

坂本先生「なんかそれってめっちゃ良いことやんな。泣いたらダサイとか恥ずかしいとかで泣かれへん時もあるけど、最近YouTubeで見たのがあって、サッカー選手の本田圭佑って知ってる？その人はメンタルの話しててんだけど、メンタルっていうのはすごい迷信だっていう話をしててん。

何か悪いことがあったり上手くいかんって時に、すごい落ち込んでしまう人のことをメンタル弱いっていうんじゃないかって、その先に切り替えて上手くやってる人のことをメンタル強いって言うって。でもそれって見方次第だよって言う話よな。だからさっきのネガティブの話もそうやけど、ネガティブかそうじゃないかっていうのは「見方」の問題ちゃう。だから今回のコンクールも録音を聞いた

ときにこれできてないやん！ ってネガティブになるか、まだこんだけやることある！ うわ楽しい！  
っていかのどちらかやと思う。でも前者か後者でどっちが上達するかって言われたらやっぱり前者ち  
やう？ だから自分だけがポジティブだけじゃなくてもっと周り巻き込んでポジティブにならなあか  
んなとは思ってます。部活でも。」

私はこの言葉を聞いて、大切なのは「元の性格や自分の性質をどれだけ活かしていけるか」なのだ  
と思った。先生が最後に言っていた言葉は、今のままでもポジティブな先生だと私は思うけど、それ  
にはまだ先があって先生自身が目標を持ってもっとポジティブになろうとしている事に気づき、私も  
ネガティブという言葉だけに囚われず、ネガティブをどう活かしていくかが大切なんだ、とそう気づ  
かせてくれた坂本先生に改めて尊敬の念を持った。

取材を終えて

先生は「人間観察が上手な人」なんだろう。私は今回の取材で「考え方や自分とは違う人が羨まし  
い」と言っていた事が一番心に残っていて、他の人を見て羨ましいと感じられたり、欲しい！と思  
ってしまう程周りの事を見ていて、周りを盛り上げたり、笑わせたりする事で周りを巻き込んでポジ  
ティブになっていっているのだと思う。自分と考え方が違う、坂本先生と話してみると少しポジティ  
ブになれた気がする。

この気持ちには先生が「もっと周り巻き込んでポジティブになりたい」と言っていた事に当てはまっているのだろう。取材が終わって部屋を出た後、先生に上靴を忘れスリッパの引きずる音が響いて少し笑われた。私は「ブカブカなんですよ」と言った後、改めて感謝を伝えてそれぞれ音楽室と職員室に戻った。緊張していて最後に写真を撮らせて頂くのを忘れていたので2週間後の夏合宿でのバーベキューの際に写真を撮らせて頂いた。

私はこれからの人生で「もっと自分の性格を知っていききたい」と思うようになった。どうなりたい、というはつきりとした目標はまだないけど、少しずつ自分の特性を知っていつて周りも自然にポジティブになれる、そんな人になりたい。先生のように。



## スーパー元気な祖父

聞き手 野中真一

### 取材の動機

僕が取材しようと思ったのは祖父の城之内おさむだ。今年で75歳になるのだが、いつもお米を作り、届けてくれる。最近、金剛山の登頂1000回を果たしている、とても元気の良い祖父だ。

そんな元気の良い祖父なのが、僕は昔の祖父がしていたことをほとんど何も知らない。では取材をした動機はなぜ？ と思っただろう。その理由としては、祖父は、昔、僕と一緒にコンバインという稲を刈り取り脱穀などができる機械にのせてもらったことやわざわざ自分が電車を見たいからという、わがままから電車に一日中乗せてもらったからだ。

そして最近では、受験の合格の時にとっても嬉しがってくれて、一緒に金剛山を800回記念で登って自分や母のペースに合わせて歩いてくれる。こんな感じでとにかく優しく本当に人に自慢したいような祖父であるからだ。

僕は今回祖父に絶対になりたい質問があるのだ。それは、どうして金剛山1000回も登るのか、昔はどんな仕事に就いてどんなことをしていたのか、お米をどんな気持ちで

作っているのかを徹底的に取材しようと思う。今回僕が知らないような魅力が今まで以上に出るかもしれないとドキドキしている。と同時にとても質問が多いかもしれないが祖父の意見をきちんと聞いて、緊張しないように取材をしようと思う。

取材依頼のLINEを送って日程が決まるまで

祖父とはお米を届けてくれるので良く会うのだが、LINEではあまり返信しないというか全くないので母に連絡してもらった。数日後祖父からLINEが届き「取材してもいいよ」と返信がきたので、行くこととなった。改めてとなると緊張してくる。

取材概要

日時…2025年8月16日12時～13時

場所…祖父の家

取材した方…元N電鉄城之内おさむさん

取材が始まるまで

祖父との取材をするために祖父の家がある市に行った。自分の家はお隣の市なので車で約20分着くことができる。久々に来たなーと感じた。やはり自分の市より田んぼが多く、稲穂が綺麗だなと感じ

じた。家に着いてから久しぶりに祖父と背比べをした「すごいな、身長越されているわー」と祖父が言ってくれたので嬉しくてその場でガッツポーズをして喜んだ。（その2週間後、自分の靴によって身長を盛っていたのでまだ抜かしてなくてちよっぴり悲しくなった）

お米を作ってくれるようになったきっかけ

早速取材をはじめた最初はなんでお米を作ってくれているのかについて聞いた。

祖父「お米作りについては、農地改革の影響もあっておじいちゃんのお祖父が田んぼの土地を持っていた人から息子のために田んぼを買ってくれたで、家の下に2枚の田んぼ広さが16A（1600平方メートル）を機械とか使って、そのおかげで今は合計5軒の家族が食べていけるほどのお米を育てているかな。」

僕「田んぼはいつも広いなどは思っていたけどこれほど大きいんですね。そしていつもお米ありがとうございます。」

祖父「真一も暇なときは手伝いに来てや。」

僕「もちろん、いつでもよんでくれていいで」

やはり毎回お米を作ってもらって助かってているので、暇なときや呼ばれたときは手伝いに行こうと思う。

仕事について

祖父「仕事については、おじいちゃんの曾祖父が土木の仕事をして、簡単に言うとな建設業をしていました。作業人が結構いるぐらい栄えていたんですよ。で、N電鉄の仕事をやったらしい。私は私のおじいちゃんの影響もあって土木を専攻して大学に入って。で、技術などの勉強をして土木を学んだ。それからN電鉄に入社して、鉄道線路の列車の安全走行を支えるために線路のズレや歪みを修正する保線というものから始めた。まず保線の現場があって、職長を二年間して和歌山の保線区に保線区長としていったのが31歳ぐらいかな。」

祖父「で36歳になる時に踏切と平面交差をする鉄道にしようということでも百人ぐらいの部下を連れて3年間ぐらいそこで働いていたかな。」

僕「100人の部下ですか、とても沢山の人がいますね。」

祖父「でもね、部下の大体が自分より年が上だったからとても緊張したよ。」

僕「なるほどそれは緊張しますね。」

祖父「そこからいろんな土地開発をして、あるところは半分薬草園で半分住宅地みたいなのもあったな。」

僕「主に土地開発などをしているんですね。もし自分が土地開発のような残せることを成し遂げたらとても誇らしく思いそうです。」

祖父「そう言ってもらえてなんだか誇らしく思えるな。」

その後仕事を辞めて

祖父「昔はタバコを良く吸って、お酒を飲んでいただけ体が悪いから辞めて、日記をつけ始めたんだ。今でも毎日つけていて、5年間日記をつけて3冊ぐらいかな。」

そう言ってリビングから取ってきてもらった日記をじっくりと見た。とても細かなことを書いていた。自分では絶対続かないと思った。

祖父「最初は3年日記から始めようと思ったが、だんだん続けることに慣れてきて日記を続けていくんだ。」

僕「昔、タバコを吸っていたなんて知らなかったです。僕のお父さんにも辞めてと言ってやってください。（父はタバコをよく吸っている）あと毎日、日記もつけているなんてすごいです。」

祖父「まあ私も昔は継続的なことが嫌いで、やろうと思ってもなかなか続かず三日坊主だったけど、段々と歳をとってくると続けることが習慣になってくるから。」

話を聞いていて、とても羨ましいと心の中で思った。

祖父「あと、おばあちゃんがお茶を教えているんだけど、男性にも教えたいということで私も三年間ぐらい習ってるんだ。」

僕「とても趣味がたくさんあっていいですね」

祖父はそこから少し嬉しそうにしていた。

何故金剛山を登るのか

祖父「ある日同窓会があつて、そこでみんなで金剛山に登ったんよ。でそこからはまったかな。最初は何人か一緒に登ってきたんやけど、300回を超えてからほぼ1人で登ってたかな。」

僕「まず300回を超えられるのもすごいです。」

祖父「そう言ってもらえて嬉しいな。それで今1000回を超えているかな。予定としては80歳で1500回、85歳で2000回を予定しているかな。」

僕「とてもすごい予定ですね。今日は沢山の話聞かせてもらいありがとうございました。」

祖父「いえいえ、こちらこそ。また来てな。」

取材を終えて

祖父はやはりとても元気があって、趣味が多くあり今の過ごし方を楽しんでいると感じます。もしこれから金剛山を登る時やお米を作るとき、僕が暇な時などは一緒にしたいと思います。魅力的な取材で祖父のことをたくさん知れる機会ができて、とても嬉しかったです。







自分のやりたいことを全力で楽しむということ

聞き手 蒼井風香

### 取材の動機

今回私が取材をする人、つまり魅力を感じる人は私の母である。いつも楽しそうに過ごしている人で、この前なんかは台所で謎の鼻歌を歌っていた。(母曰く、職場でもこのような感じで過ごしているらしい。)しかし、普段はこのようにマイペースだが、やる時にはしっかりとやるべきことをするというふうにメリハリをつけ流ことができる人で、私はあまりそれが得意ではない。なので、その私が出来ないことができる部分に私は魅力を感じた。

母は薬剤師なのだが、基本的に家に帰ってくる時間が遅い、朝も早くに出勤しているので、もちろん疲れているはずなのだが、最近は「大学受験以来受けていなかった英検の一級に挑戦する!」と言って、家事もこなしながら勉強をしている。何故そんなにいろいろなことをこなしながら自分が挑戦したいことに向かって頑張れるのか不思議に思ったので、今回はこのことについての取材をしようと思う。

### 取材概要

日時…2025年8月10日 13時30分～14時30分

場所…スターバックスコーヒー

取材した方…蒼井聖さん

自分との関係…母親

取材場所に到着してインタビュアーを始めるまで

母との相談の結果、取材の日は、教会に行く日でもあったので、近くのスターバックスで取材をすることに決まった。最初に入店したスターバックスは、席が全て埋まっていたので、他のスターバックスに移動し、席を確保して、母はコーヒー、私も本当はコーヒーが飲みたかったのだが、母に「やめとき。身長伸びひんで。」と言われたので、渋谷キャラメルマキアートと、チーズケーキを注文した。(私は、普段は、ドリンクしか頼まないのだが、母が、今日は特別だから、ケーキも注文しているよ。と言ってくれたので、ありがたくチーズケーキも注文することにした。)

それから、総合学習の授業のノートと、授業プリントを挟んだファイル、録音・文字起こし用のiPadと、もしもの時の為に、スマホの録音アプリを立ち上げて、飲み物が届くのを待った。しばらくして、私が緊張で少しそわそわしているうちに飲み物が届いた。(この後、iPadの取材の文字起こしが消えて、私は大変な思いをすることになる。)

英検の勉強を始めたきっかけ

届いた飲み物を少し飲んでから、早速インタビューを始めた。私はまず、何故、忙しい中、英検の勉強をしようと思ったのかを母に尋ねることにした。

私「なんでお母さんは、毎日忙しいのに英検の勉強を始めようと思ったん？」

母「ずつとやろうと思っていたけれど、できていなかったことだから。本当は、大学のうちにやっていた方が良かったんやけど、ちよつとのんびりしすぎたの。他のことに夢中になってた。それから最近、お父さんに社労士の資格取ってみたら？ って言われたから、社労士の勉強をしてたんやけど、あんまり私にとって面白くなって、どうせ勉強するんやったら自分の好きなことを勉強しようって思ったから。」

私「どんなことに夢中になってたん？」

母「アルバイトしたりとか、お友達と遊んだりとか。アルバイトは、すき焼き屋さんとかやってた。どんな縁やったかは忘れたんやけど。そのすき焼き屋さんの店長に食べにおいで！ って言われて食べに行って、お父さんも一緒にきてたんだけど、私は無料でお父さんはお金取られてた。あとはお家の近くのイタリアンレストランとか。」

その話を聞いて、少し父のことを気の毒に思った。

私「他にやっていたアルバイトはある？」

母「あとは牧場とか。本当は本屋さんとかもやってみたかったんやけど。」

母が、過去にイタリ안의レストランでアルバイトをしていたことは知っていたが、かなり幅広いジャンルのアルバイトをしていたことは、今回の取材で初めて知ったので、少し驚いた。

チャレンジできる理由

そこで、以前から気になっていたことを母に質問することにした。

私「そんなに色々なことにチャレンジできる理由って何？」

母「とにかく楽しそうなことはやってみることかな。後先考えずにとりあえずやってみる。」

私「なるほど。やっぱりやりたいことをやるって面白い？」

母「なかなか面白いよ。」

私「新しいことに挑戦する時ってどんな気持ち？」

母「ワクワクする。知らないことを知るってすごく楽しいことじゃない？」

母の声のトーンが少し高くなったように感じた。

薬剤師になろうと思った理由

私は少し、チーズケーキを口に含んでから、なぜ、色々なジャンルのアルバイトをしていた母がなぜ今までやっていたアルバイトと全く関係のない薬剤師という職業についたのかが気になったので、そのことについて質問することにした。

私「なんで薬剤師になろうと思ったん？」

母「妹が薬学部に通ってたから。あと、家族に医療関係者が多くて、ロキソニン（解熱鎮静作用のある薬）のことを魔法の薬みたいに言ってたからなんで？　って薬に興味持ったから。あとは、文系の大学はもう行ったから次は理系かなって。あと、人生の中で頑張ったことってあんまりなかったから、頑張ってみようって思った。」

私の母は薬学部に入る前は、大学で文系の外国語学部を選び、スペイン語学科で、スペイン語の勉強をしていたそう。つまり、今までに2つの大学を卒業している。母含め三人分の大学の費用を出すだけでも大変だっただろうな。と考えると、（母は三人兄妹の二番目である。）母の2番目の大学の費用まで出した祖父母を少し気の毒に思った。

私「そういう理由やったんや。」

母「うん、だから薬学部の際は夜の1時まで勉強してたよ。」

私「夜1時!?!」

母「そう。大学が始まるのが9時だから8時までは寝れるでしょ? しかも家が近かったからすぐに行けたし。」

私「そうなんや。」

あまりにも薬学部時代の母の就寝時間が遅かったので、しっかりと寝ることができていたのか心配になったが、朝は8時に起きていたという話を聞いて安心した。

母「だから1時ぐらゐまで勉強してビール飲んでから寝るっていうルーティーンやった。」

私「ビールはいるの?」

母「ビールは、いる!」

母が答えた。母の顔がニコニコしていたと感じていたのは、私の気のせいだろうか。

そして、では、最初に通っていた大学はどうして入ろうと思ったのだろう。と疑問に思ったので、

そのことについても話を聞くことにした。

私「じゃあ、なんで最初の大学では、スペイン語学科でスペイン語を学ぼうと思ったの。」

母「高校の時の友達がこんな大学があるよって言って、いっしょに受けよう！ って言ってくれたから受けることにした。で、その子は英文科に行ったけど私はスペイン語を勉強しようって思ったから、スペイン語学科に行った。知ってる？ スペイン語ってね、はてなマークが逆さになって、文頭につくんだよ。」

私「そうなの？」

母「うん、それっていいなって思ってたね、だからスペイン語学科に入ったの。あと、英語は自分でできるなって思ったから。」

私「そうなんや。」

スペイン語の話をしている時の母の顔がすごく明るくなったので、私は、少し驚いてしまった。

母の将来の夢

最後に、母にこれから挑戦してみたいことを聞くことにした。

私「これからの目標とかってある？」

母「子育てが終わったら次は自分のしたいことをやってやろうと思ってる。子育てが終わったら家にいなくてもいいから。大学も実はもう一回行こうかなって狙ってる。それでめっちゃ勉強を頑張ってる。よし！ 海外の留学生にしてあげましょう！ って大学に言ってもらって海外に留学しようと思ってる。おばちゃんやけど。」

私「もう一個大学行くん？」

母「そうしたいなあって思ってる。」

母が、私が自立できるようになって、子育てが終わったら、もう一度大学に通い、海外に留学しようという夢（野望？）を持っていたのは驚いたが、自分がやりたいことに全力で挑戦して、努力している母らしい回答だと思った。

私「私もやりたいこと全力で頑張ってみるわ。」

母「うん、頑張りがや。」

そうして今回の取材は終了した。

## 取材感想

こうして私の母への取材は終わった。最初はとても緊張したが、取材をしていく内に、私が今まで知らなかった母のことが色々と知ることができて、とても面白かった。取材を終えて分かった母の魅力は、自分がやってみたいと思ったことは、どんな時も、後々自分が後悔しないように、「とにかく楽しそうなことはとりあえずやってみる」という自由な考え方を持っているところだと思う。また、母は、世の中で普通とされている社会人の生き方とは少し違う人生を送っているのかもしれないが、だからこそ、常識にとらわれない柔軟な考え方を持っているのだらうなと私は思った。



## 父と母と僕と動物

聞き手 大松和毅

今回取材しようと思っっているのは父だった。でも父とは離れて暮らしていたので、予定が合わずできなかつた。なので父に近い存在である母に取材することにした。

父と母は昔から仲が悪く、いつもほとんど話さず、話しても互いに敬語だった。たまには母の怒声が響き、僕は怖くて、他の部屋で隠れていることしかできなかったほどだ。でもどうしてそんな父と結婚し、長年一緒に暮らしていたのか。それを聞いてみたいのが理由の一つだ。

また、母は昔から優しかった。いろんな人に食事や旅行に誘われたり相談されても、どれだけ疲れていてもそれに応えて会いに行ったり解決しようとする。その時から父に対してストレスもあつただろうに自分の前にいる時や友達という時はいつも笑顔だった。

僕が見たことがあるのは母親としての母だが、僕は仕事をしている時の母はほとんど知らない。母の職業は動物病院の看護師で、いつも帰ってきたらとても疲れている。たまに酒を飲みながら愚痴をこぼす時もある。そんな辛い仕事をなんでその仕事をしようと思ったのか。そこを知りたかつたのも理由だ。

さらに、父は家にいることも少なかったし多くを語らないタイプ、でも母は家にいることは多くしゃべってくれるタイプだったので話しやすいと思つたのも理由の一つだ。

取材をするため母にいつがいいか聞いてみた。そうすると母は「今日の晩で」と軽く予約ができた。母ならもうちよつと迷うかと思いきや即答でびつくりした。

日時…2025年9月17日 20時30分～21時15分

場所…自宅

取材した方…大松美智子さん

自分との関係…母

取材が始まるまで

晩御飯を食べた後、数分したらじゃあやろうかと声をかけると「今テレビがいい感じだからちよつと待って」と声をかけられた。5分ぐらいかなと勝手に思っていたら15分ぐらいの間は始めることができなかった。

いざ始まるとなってテレビが消えて、静かになるといつもみている母なのに少し緊張してしまつた。

## 母の職業

僕「えっとじゃあまずなんで動物の看護師になろうと思ったんですか。」

母「まあ動物が好きだったから、はい。」

僕「ほかの職業とかなかったのですか。」

母「警察犬の訓練士になりたかったです。」

僕「やっぱり動物好きなんやね、なんで好きになったんですか。」

母「うんまあ昔から犬を家で飼っていたからやね」

僕「あー、その犬ってどんなの」

母「犬ってえっと特に犬種のない雑種やけど、保健所に居ったような子犬をもらいに行つて、で連れて帰ってきたっていうのが初めての犬との出会いです。」

インタビュー中もいつもと変わらない母を見て少し緊張が和らいだ。母は昔から動物、特に犬の話になると楽しそうに話していた。

僕「これまで働いてきてなんかその犬に対する気持ちが変わったとかありますか。」

母「うんまあ、この仕事に就く前は単純にこう、犬や猫が可愛いつていうかわいがるだけの気持ち

だったけど、動物病院という職業について、まあ医療なので単純にただかわいいっていう気持ちから看護すると、助けるでも死ぬとか、なくなってしまう場面にもたくさんあって。ただただ可愛がるっていう気持ちではなくったね。」

僕「死んでしまうとか、そういうつらい事はどうやって乗り越えてきたんですか」

母「乗り越えてはないねんけど、病院に来るということは飼い主さん、その子の家族のことを考えておいおい泣くよりも、もつと辛いのは飼い主さんなのでその気持ちを考えるとこつちが泣くよりは声をかけて辛さを少しでも和らげたいって言うのはあります。」

母の犬に対する思いはすごいんだなと思った。優しさに溢れるところがここにも出ていて、すごいなあ。

母が看護師になった理由

僕「動物病院で働くんだなって思ったきっかけはなんですか」

母「まあ専門学校にいったって、行きながら学校からの実習を何回かして、で実際にその病院で働こうという体験をして。もう絶対働きたいと思いました、うん。それがそのT動物病院に実習行った時に『ウチで働いてくれないか』と行ってくれたので、それでそこに行きたいと心を決めました」

僕「その時の恩師とかがっていらっしやいますか」

母「はい、もうその恩師はもうすでにご病気で亡くなられたんですが、この獣医療はいくつになっても勉強だと。新しい知識を常に学ばないといけないと言っておられる姿が今でも忘れられません。今も根本にはその方がいます。」

母の優しさはここからきていたのか。そういえば確かにT動物病院の近くを通った時にそんな話してたっけ。

父との出会い

僕「動物病院でお父さんと出会ったと思うんですけど、その時はどんな感じでしたか」

母「うんまあ、お父さんもまだ修行中の身だったので。もちろん私より先にもう現場で働いてたけども、まあ私からいったら先輩ではあったけど、一緒にいてあの、学んで成長してきたなあっていう感じですねはい。」

僕「父の若い時から今までに変化はありましたか」

母「髪は薄なったね。お父さんは同じ大学の先輩である院長先生のもとに修業に来たっていう形で大阪に来た。まあすっかりその先輩に教えてもらって今に至るといいう形なんですよね。」

逆に父は髪が生えてた時期があったんだな。そこに驚いてしまった。

僕「そうそう、我が道を行くってタイプの人やから、そんな時代があったんやなあ」

母「もちろんね、六年大学行って、すぐに全部できるわけじゃなくて。もう何年も修行を重ねて手  
術の練習とかもして、今が勉強もして今があると思う」

僕「あのに余裕みたいなどころの中には、大きな努力があるんだね」

母「もちろんそれはなんの仕事もそうやけど、入ってすぐに何でもできる人はいないので。いっば  
いしんどい思いしながら学んで、今いろいろできるようになってるっていうのきつとほとんどの人そ  
うですね。」

母「ええまあ一緒に働いてる獣医さんは清教学園出身やで」

僕「ええすごい、そういうふうな繋がりもあるんやね、世界は狭いな。」

僕「貴重なインタビューありがとう」

母「こんなこと話す機会ないから泣けてきたわ」

取材を終えて

本当は父にインタビューしたかったけども、直接父に聞いても話してくれなそうなこともあった  
し、母の昔の姿を知ることができてよかった。もつと質問を考えてからやればよかったなと思うとこ  
ろはあるけど、楽しかった。





たけさんってやっぱすごい

聞き手 吉宮琴葉

私は父の友達に取材をしようと思う。あだ名は「たけさん」。私がつけたあだ名だ。父とたけさん自身もたけさんと呼んでいるが、私は「おたけ」と呼んでいる。あだ名のあだ名。元の名前は覚えていない。たけさんはお店を営んでいて、たけさんのお店はK駅の近くにある。たけさんは何の仕事についているかあまりわからない。鹿肉や卵を売っていたりしているが、そのほか何を売っているかわからない。だから詳しく仕事内容を知りたいと思った。

たけさんは大のお酒好きで、3時間以上飲んでいただけもあるみたいだ。びっくりだ。父とたけさんは仕事の関係で仲良くなったらしい。私が初めてたけさんに会ったのは四年生の頃だったと思う。私の父が小柄なこともあり、たけさんとはとても大きく見え、180cmくらいはあるように見えた。たけさんのお店は、お店というよりは家みたいな構造になっていて、最初は本当にお店なのか？と疑ってしまった。お店に入るとジュースとアイスを出してくれた。

私が帰りにスマホの充電がなくなってしまい母と連絡が取れなくなってしまった時、近くにあるたけさんのお店に助けってもらった。たけさんのお店に入るときは外から「おたけ」と呼んだら「はいはい」とたけさんが出てきてくれる。半分の確率でたけさんはお店にいる。その日もお店にいるか

不安だったが声をかけた。するとたけさんはすぐに出てきてくれ、中に入れてもらえた。たけさんはモバイル充電を貸してくれ、おまけに冷凍したチョコパイも出してくれた。この食べ方がお気に入りらしい。無事に母と連絡が取れた。

2025年8月1日

### 取材開始

私) よろしくお願いします！

たけさん) よろしくお願いします！

私) まずたけさんがどんな仕事してるかよく知らないのでもだちよつと詳しく教えて欲しいです。

たけさん) S っていう会社を女将と一緒に経営しています。

私) どうしてその仕事に就こうと思ったんですか？

たけさん) 長くなっても大丈夫ですか？

私) はい全然大丈夫です！

たけさん) えっとね、私はあの働いたことがないんですね、サラリーマンとかもしたことがなくて、できなかったんですね性的に。ずっといろんな方のお手伝いしてきた人間なんです。で、40代前になった時に、この先50代6代にもなるわけじゃない？でその時にこのままでいいかなと

思ったときに、ちよつといややなって思つてこういろいろ考えて。じゃあこの先どうやって生きて行きたいかなつて思つた時、何もなかつたんですよ。学歴ないし、資格もないし、友達もいないし、夢も無ければ目標もなかつた。でもこの先も生きて行きたいと思つたときに、じゃあ何のために生きようかなつて思つて、じゃあもうここから先は人を喜ばせることを仕事にしよう思つてん。そこから始めた感じ。

たけさん) その中でこう、いろんなことをいろんな人に出会つたりいろんなこう職業に出会つてい  
る中で、うちの代表の女将と出会つて。女将がSつていう会社を立ち上げてそれを一緒にやれへん?  
つて言つてくれはつて、2012年からSつていう事業を女将と2人でやっています。

私) なるほど! ありがとうございます。その仕事は自分にとつてやつてよかつたなどか好きだ  
なつて感じましたか?

たけさん) めっちゃ面白いです! なんか「面白い」つていろいろあるじゃない? なんていうの  
かな? こう例えば、ことはちゃんまだ未成年だけど、酒飲んで楽しいとか、踊つて楽しいとかつてな  
んかこういうこういう(踊つてる) 楽しさじゃない? でもさSの理念つていうのは関わつたすべ  
ての人が笑顔で豊かになるつていうのが理念なわけで、それに関わる事業は全部やるつていうのがうち  
の在り方やねん。それやつてると腹の底から楽しい。

でもこれは嬉しいことばつかりじゃなくつて、例えば辛かつたりとかまあ試練があつたりとか当然

その経営やから、お金があるないってのもすぐシビアになってくるし、困難と試練があるじゃない。困難というのは、考え方や選択を間違えて、道から外れた状態っていうことなんだけど、試練っていうのは字のとおり自分自身の本気度が試されるわけじゃん。でもそれ乗り越えたら絶対神様はギフトくれるから、試練も楽しくてしょうがない、どうしようワクワクするみたいな。上手くいったら当然嬉しいし、これがうまくいくっていうのは何て言うのかな、お客さんやったりとか取引先の方であつたりとか、それこそことはちゃんが俺に取材したいということ。やっぱり言うのはただ喜んでくださってるっていうことが一番うれしいことなので全部が面白いです。仕事は楽しいです。

私）たけさんは仕事をするにあたってどのようなことを気をつけていますか？

たけさん）調子乗らないようにすることかな。うーんと女性と男性がいるじゃない？ そんなでも性別だけじゃなくて、ことはちゃんの中にも女性的な面と男性的な面があるでしょ？ それはもちろん男の側にもあつて、その中で男性性っていうのは結構勢いがあるわけ。勢いあるけど、あかんたれでもあるわけよ、だから男性性が強い人ってのは、うまくいっているときは調子乗るし、あかん時は落ち込む。わりとブレる。戸籍上で区別される女性、男性とは別に存在する、内面的な性差だと捉えていて。うちの代表おかみはもうほぼ100%女性なので、腹くくったらブレないんですよ。何のためにやってんの？ Sは何のため？ 関わった全ての人が笑顔で豊かになるっていう理念のためにやってるから、そつからぶれないように気をつけてる男だけに。

私）お店に売ってる鹿肉はたけさんがとってるわけじゃないと思うんですけど、猟師さんとか加工業者さんとかとはどうやって知り合ったんですか？

たけさん）神様に祈りました。それは本当に祈りもあるんですけど、鹿肉ってね、その漁師さんがいらっしやあって、それを加工する加工業者さんがいらっしやるわけ。で、この猟師さんとか加工業者さんの腕で味が決まっちゃうんです。その猟師さんが下手だったり、加工業者さんの加工の仕方が下手だったら、もうまづい肉になってしまいうねん。だから全国から取り寄せて探してん。

たけさん）その当時はまだその、小口で取引してくれる人が少なかったから、小口で取引してくれる、そんなでうちの関わった全ての笑顔で豊かになるっていう理念に共感してくださる方を探しまくってん。実際に長野県の諏訪湖が有るところに会いに行つて、お酒飲みながら話をして。あ、一緒だよね、おいしく鹿肉を届けたいっていう思いが一緒で、一緒に仕事をしてる感じ。願いが通じました。祈りはすごい大事だと思ってる。

私）神様信じてる感じですか？

たけさん）そうだね。祈りつてこう、いろんな解釈があると思うんだけど、神様お願いっていうのも祈りだけど、祈りつて「祈り」じゃない？ この、「い」っていうのは自分の意志だと思ってる。自分の意志を祝詞として神様に言うわけ。ということは神様に宣言するわけ。俺絶対Sやるで！ って宣言

言しました。

たけさん）今回ことはちゃんだって俺に取材したいって言うてくれて、したいなら、したいだけで終わりじゃない？ だけど俺にしようって決めて、父さん通じて申し込んで下さっていうのもあるわけで、その一つの祈りだと思えます。祈れば叶う。そういう意味での祈り。ただ単に神様！ ってことじゃないってことです。

私）人生の中で一番辛かったことと嬉しかったことを教えてください。

たけさん）Sやる前は全部辛かったな。嬉しいこともあったけどな。辛い時期があったから今があるし、自分が辛い思いしたから、少なくともSに関わる人にはそんな思い絶対させへんっていうっていう動機にはなった。嬉しかったことは、今取材受けることかな。今までで一番嬉しかったこと。

私）このお店はどんな存在ですか？

たけさん）帰るところですね

私）ありがとうございます！

たけさん）ありがとうございます！

この取材で感じたこと

まず初めに私が一番驚いたのはたけさんが一つの質問でこんなにも分量の多い返答をしてくれるとは思っていなかったのでも驚きました。辛いことや悲しいことを含め、たくさんいろいろなことを経験して生きてきたんだなと思いました。

これからもたけさんに会いに行きます!!!!!!!!!!!!!!



## 笑顔の裏の責任感

聞き手 谷口いのり

私は昨年、合唱部で同じパートの副部長だった先輩に取材をしようと思う。今は中学合唱部を卒業し、現在は高校陸上部に所属している、藤田沙知先輩だ。沙知先輩は周りからの評判もよく、社交的で誰とでも話せるところがイメージの先輩だ。

だが私は部活内では真面目でしっかりと「ここはこうやって歌った方がいいと思う！」と指摘で終わらず、しっかりとアドバイスしてくれるところや、それとは反対に、先生に「やっぱ藤田歌上手いな！」と褒められた時は照れたあまり、筆箱のチャームを壊してしまうなど、お茶目などところがあるギャップな一面に魅了されている。

先輩に今回の課題で取材をしようと思った理由は、部活が離れてあまり、沙知先輩とじっくり話すことが少なく、会う機会も減ってしまったので、少し雑談も交えながら沙知先輩に質問したかったことを聞ける機会なんじゃないかと思った。

また、総合学習の授業で「身近な魅力的な人は誰か」と言われた時に、「最近、誰を目標やお手本にして行動しているのか」と考えると、後輩と交わるときに気をつけていることや、練習に対する姿勢が沙知先輩に言われたことを参考にしてているなと思ったので取材をしようと思った。

私が沙知先輩に取材をしようとしたエピソードがある。

それは、先輩と初めて話した機会で、私が初めてパート練習（パートごとの音をとるなどの練習）に参加した時だった。その時先輩たちの名前を覚えていなかった不安や、何がおこるかわからない緊張でいっぱいだった。始めると「はじめに自己紹介しよう！」という笑顔の沙知先輩や「うちのパートの目標を立てよう！」と沙知先輩が率先して、みんなの意見を聞く姿にとっても憧れた。今、私がこの取材動機レポートを書いている時に、沙知先輩も新学期で副部長になってまもなく、緊張しているはずなのに笑顔でいたということを感じ出し、やはり沙知先輩は、周りを見て責任感がつよい人だと感じた。

取材依頼のLINEを送って日程が決まるまで

沙知先輩とは同じ部活だった時にアドバイスをもらうため、たまにやり取りをしていたのだが、久しぶりに沙知先輩にLINEを送った。初めはとても緊張していたが、久しぶりにやり取りをしていると、とても気さくに返信してくださった。私は、取材をすることへの楽しさが増した。

## 取材概要

日時…2025年7月30日 14時～14時40分

場所…1年Aクラス教室

取材した方…清教学園在学中の高校一年生、藤田沙知先輩

自分との関係…去年同じ部活だった先輩

取材場所に到着してインタビュ어가はじまるまで

沙知先輩との相談の結果、取材場所は1A教室に決まった。私は普段1D教室で部活をしているので、お互いの部活終わりの日に取材をすることにした。お昼ご飯を食べている時間は何を聞こうか、話続かなかと、とても不安と緊張でいっぱいだった。

予定よりもすぐにご飯を食べ終わったので、先に机などを少し移動させ、友達と白板にウエルカムボードを書いて楽しく過ごした。

### 運動部の先輩

約束の十分前ごろに沙知先輩がAクラスに入ってきた。その日は、互いに部活終わり、沙知先輩は高校の制服姿だった。少し前までは文化部っぽい、そこまで黒くなかった肌が、毎日のトレーニングで小麦肌になった姿を見て少し驚いた。たまに、移動教室などで通りかかった時に会って、挨拶をしていたので、久しぶりに会ったわけではないが、しっかりと対話するのは半年ぶりぐらいだ。

挨拶を済ませた後、事前に渡せていなかったもので、総合学習担当の先生から言われていた「担当教

員からの添え状」を渡し、さらに、私が書いた取材動機のレポートをじっくりと読んでくださった。読んでいる最中は、「うんうん」「そんなことあったっけ?!」などと笑顔で読んでくださった。

三年間の合唱部を振り返って

インタビューを始めた。私はまず、自分が思う先輩の魅力を伝え、はじめに気になっていた、三年間合唱に打ち込めた理由を聞いてみた。元々沙知先輩の入学した理由は、以前に雑談してくださったときに言ってくださり、それは沙知先輩が中1の頃、勧誘の時に少し合唱部の説明を聞いていると、合唱に魅力を感じたからだだった。そこで私は、合唱だけでは三年間も続けるかなと思いついたことにした。

私「まず、なんで合唱という小さな魅力から、三年間も合唱部に打ち込めた理由はなんですか。」

沙知先輩「えっとまあ、何よりも周りの人より沙知たちの学年は、特に歌を歌うことが好きな人がめちゃくちゃ多かったから、よく片付けの時とか、ずっと歌っていて、『もうそれ以上歌わないでください。』ってA先生に言われることもあったぐらい。笑 もうとにかく歌が好きだったから、そうやな。それが一番大きかったかも。」

私「逆になんか、そこで部活を辞めたくなくなったとかありますか?」

沙知先輩「ありました。ありました。笑 なんか全然、その時はその楽しくなくて歌うことも。難し

い曲やったのか、あんまり好きな曲じゃなかったのか、理由は明確には覚えていないけど。なんか部活って、先輩後輩の関係だったりとか、そういうのが楽しく感じてこやんくなってる。それで部活に対して自分が持ってた魅力みたいなのがまあなくなってきたってしまったのがなんだろうね。行きたくないなって毎朝話しながら行ってた。」

私「それは、もうずっと辞めたいって感じやったんですか？」

沙知先輩「秋の全日本の練習の、結構大事なホール練習の日まではずっと、夏終わりぐらいからその日までずっと嫌やったけど。その時のある先輩が言ってくれて、『楽しんでないと思うから楽しんでください。』みたいな。もうその言葉に『確かに』と思って、めっちゃ不意をつかれたっていうか、目からウロコで、いま自分楽しんでないわと思って。そこからまあ楽しんでむことをちょっと意識してやってたら、だんだんまあ楽しくなってきたかな。」

話していると、いつもの元気澁刺とした沙知先輩で、話を聞いている自分も元気が伝わってきた。やっぱり沙知先輩は魅力的な人だなと改めて感じた。それと同時に私の緊張もほぐれてきた。

先輩自身の気持ち

私は沙知先輩が中2の冬に副部長という発表を受け、その時に感じたことや沙知先輩らしい真面目な目標を立てていたのか気になったので質問することにした。

私「定期演奏会の時に副部長になるという発表を受けて、そのときに感じたことと違ってありますか？」

沙知先輩「そうやな。なんかこう、周りの子とかえつとまあ、比べるってわけじゃないけど。そのなんかキャラクターみたいな。それぞれそのキャラクターの中で自分は多分結構『今静かに！』とか結構言っていたタイプやったから。まあそこら辺は部長とか副部長、パトリリーダーのどこら辺かには属するんかなとは思ってたかな。」

色々話をしていると、今日取材をしていると聞きつけた高校一年生のN先輩が入ってきた。少し二人の雑談を聞いていると、「取材終わったら一緒に練習しよー。チャペルで待ってるわ。」と話していた。私は、陸部に入っても歌が好きな沙知先輩であることが嬉しかった。

沙知先輩「何の話やったっけ？」

私「忘れました…！なんでしたっけ…！」

沙知先輩「そうや！なんか周りの子とのキャラクターとか見た時に、自分はそこらへんやろうなみたい。まあ覚悟って言ったらちよつと重く感じるけど。なんとなく腑に落ちました。」

N先輩と話しているとうっかり話している内容を忘れてしまつて焦つたが、すぐに沙知先輩が思い出して、笑顔で答えてくださった。やっぱり笑顔は救われるなとしみじみ癒された。

あの時の意気込み

私たちの学年の合唱部はとても少なく、来年、中三になっていくことに対して、とても不安に思っていたので、沙知先輩に少し経験や沙知先輩方の時はどんな感じだったのか聞いてみることにした。

私「新体制で、部活を始めるつてなつた時になんかこうしようとか気をつけたことはありませんか。」

沙知先輩「自分が何かを始めようつてする前に、結構元副部長やつた人とか、自分が中1の時の副部長をやつた人とかと結構仲良かったから、その人から「ZZZ」来て、『あ！沙知ちゃん副部長なんやな、私と一緒に！』えーい、笑』みたいな。笑。それから、副部長つて仕事ある割にはあんまり部長みたいなにこう、前に出ることがないから、でも自分はそんなに仕事せんかつたけど。笑。まあ、しんどいこととかも頑張つてみたいなこと言われて。まあそんな感じなんや。みたいな感じで特に目標とかはなかつたかなー」

沙知先輩は結構役職に対して真面目に取り組んで、発表された時は気合入っている感じだと思つた

が、予想と反して、緩い感じの意気込みで少し驚いた。

### 最後の決断

沙知先輩は前に一度「自分ボイストレーニング的な合唱じゃなくて、ひとりで歌うみたいなんやってみたいねん。だからやめるかも」といつていたので、実際に高校で入ったのは陸上部じゃん！と思っていたので、なぜ陸上部に入ったのかを聞くことにした。

私「現在、陸上部に入ってるじゃないですか。まあ、辞めた理由やったりとかってありますか？」  
沙知先輩「笑。中1の時はもう、このまま高2まで合唱部で頑張るんやろうなあみたいな思ってた。でも、いつの間にかもう中3で辞めようと思うてたかな。そこにどんな根拠があったかみたいになちゃんと覚えてないけど、中3のときに思った一番大きい理由としては、新しいところに自分が入ってみたいと思ったのが割と大きくて。」

今この合唱部っていうグループの中で、一年前とかは結構副部長で、結構ハキハキ言わなあかんし、ちよつと一部の人に嫌われてもしようがないみたいな立場で、自分でもまあ、もうちよい優しくできたとか結構反省する点がいっぱいあったな。だから、もう一回高校も合唱部で続けて自分の人間として上を目指す選択肢もあったんだけど。まあそうじゃなくて、いったんここでバサッと切って、新しい組織（グループ）に入って、新しい自分じゃないけど、また一から人間関係築いていっ

て、自分の性格っていうか、人間としての中身をみぎきたいなと思ったから、辞めました。笑」

私…「一度習い事？　なんかボイストレーニング的なことをやろうとしてたみたいなのを一度言っていて。」

沙知先輩…「そうそう！　なんで知ってるの？」

私「なんか言ってくださいました。」

沙知先輩…「そーやったっけ。笑」

私…「で、『夢があるんだ。』と思って、帰宅部なのかなと思っていたら、誰かから言われたのか忘れただけ、『藤田さんは陸上部に入りました』と聞いて、しかも全然ジャンルも違う運動部だったの。笑　そこで夢の行方はどこへ行きましたか。」

沙知先輩…「そうなんですよ。笑　自分は高校から自分の夢に向かって走ろうと思ってたんやけど、芸能界っていうか歌手系の方にももちろん行きたかったんやけど。もちろん今もちょっとだけ気持ちあるんけど。笑　やっぱり現実見た時に、自分の立場とか夢に行きつけるのかみたいなの、夢と自分のギャップを具体的にどういうふう積み上げて、いつまでにこういうことを成し遂げてみたいのそんなん全く考えてなかったから、そこら辺を考えた時にちょっとまあ難しいというか。今そっちじゃないほうが良いんじゃないかと思って。普通の高校生としてJKとして部活頑張りたいなって思って。頑張って何かを成し遂げたりするっての青春やん！　今しかできひんやんか。だからそっちに行こうかなっておもって歌はやめました。笑」

沙知先輩は自分と歳が離れているし、人生の夢ということにあまり知らなかったけれど、歌をやめるということをごんごんに考えていることを知りかつこいいなと思いました。

私…「文化部から急に走るようになった理由とかがありませんか？」

沙知先輩…「なんかちよつと、実は中学の時から運動部に行きたいみたいな希望あって。その中でまたま自分の教室が合唱部の活動場所で、超魅力的で入ったんだけど。もう結構それと似てて、自分が入りたい部活高校の時はまあ陸部ちよつと長くなるんやけど。」

私…「全然大丈夫ですよ！」

沙知先輩…「体育大会のコアメンバーやって、そのメンバーが沙知以外全員陸部やって！暗黙の了解じゃないけど、陸上部がコアメンバーをやっているらしくって。沙知が知らずに飛び込んで周りが陸部の先輩だらけで『陸部どう？』みたいに誘われたのもあって。そのおかげで陸部とバトミントン部でどっちかで決めようと思って。」

まず陸部に見学行って、すごい雰囲気自分的に合ってた。陸部はそれぞれ個人競技で、その雰囲気合唱部とガラッと変わって、結構いい雰囲気に惹かれて。結局予定とかがかぶってバトミントン部に見学行かれへんくて、結局陸部以外見学行かずに、もうお願いしますって入部届を出しました。」

## 先輩の人間性の秘訣

私…「私は沙知先輩責任感が強いところと笑顔が好きなんですけど。」

沙知先輩…「ありがとうございます。笑」

私…「その時に気を付けてることはありますか？ それか、結構人格的にそうなんですか？」

沙知先輩…「責任感は、小学校の時からなんか割と児童会とかやってて、自分はやるべきことがあるのに、全然誰もしてなかったらもう自分が行こうって思うタイプだから、たぶん自然とナチュラールに。自分で何か変えて責任感をゲットしたわけではないから多分な自然になっていたんやと思う。」

笑顔かー。そんな沙知いつも笑顔？」

私…「練習してる時にずっとニコニコしてるとかそういうことじゃなくて。話す時とかコミュニケーションをとるときとかにめっちゃ笑顔やなって思います。」

沙知先輩…「そうや！ 昨日お好み焼き屋さん行ってん。店員の人で、めっちゃ笑顔の人がおって。意識してなくても、もう反射的にこっちも笑顔になれたから、やっぱそういう場面で笑顔って大切やなって思う。だから、やっぱり自分は初対面の人でも誰であつても笑顔は大切って思ってます。」

私…「ありがとうございます。」

沙知先輩…「あ！すみません！ 沙知がめっちゃ信じてるのは、幸せやから笑顔になるっていうのも勿論あるけど、笑顔やから幸せになるっていうことをどっかで教わって。周りに人が居たら、つらい時でもちよつと心も晴れるし、幸せまではいかへんかもしれんけど。少なくとも少しはプラスになるか

ら笑顔から生まれる幸せも心の中で秘めてあることのひとつです。」

私…「ありがとうございます。」

沙知先輩…「水飲んでもいい？」

私…「全然大丈夫ですよ！」

沙知先輩…「まじで一リットルのサイズのペットボトルのサイズめちゃいいで！」

私…「めちゃそのサイズ感初めて見ました！あと写真撮りましょう！」

沙知先輩…「とろとろー！今日部活帰りやから前髪ない。笑」

私…「十分可愛いですよ！」

取材を終えて

取材をすることになってから、沙知先輩と長い時間対話をすることに不安を感じていたが、会って話してみると、久々の沙知先輩を見て話したいことがたくさん出てきた。取材を通して、笑顔の大切さ、自分とも人とも向き合えるかっこよさ、そして、沙知先輩が言って下さった笑顔から生まれる幸せを大切にしていきたいと感じた。





一歩、大人に近づくために

聞き手 辻村優

### 取材の動機

私が今回取材相手に選んだのは矢口先生だ。小学生時代、担任をもってもらったりと特別な関わりはなかったのだが、廊下ですれ違うと笑顔で声をかけてくださったり、現在中学2年生になった今でもお会いすると「部活お疲れ様ー！」と声をかけてくれる。

私は先生とお話したいがためだけに、わざわざ駅から家までの帰り道を小学校の前を通るような遠回りルートで帰っている。また先生は去年から教頭先生になられており、私の在学中には担任の先生をしていらっしやった。どうしてだろうと不思議に思っていたため、先生を志したきっかけやその理由などを聞きたいと思い取材することにした。

まさかの大ハプニング発生!?

夏休み前のある日、取材の日程を決めようと私は小学校を訪れたが、誰もいなかった。

校舎は空いていたため、入って職員室のドアに手をかけた瞬間、「ビーーーーー……!!!!!!」とおそらく不審者侵入の時の警報ベルが鳴ってしまった。めちゃくちゃびっくりしたし、焦った。そしてそのベルの音が全く止まらないのである。止まる気配もなかった。私はそのまま怖くなっ

て、家へ逃げ帰ってしまった。けれど、よくよく考えるとこのままでは「T市の小学校中に不審者侵入事件があった」と連絡がいつては非常にまずいと思い、次の日、部活が朝一から、K駅の近くのSホールというホールでの練習だったのでK駅からSホールに向かいながら学校に電話して謝罪した。その時に矢口先生が出勤している日にちを教えてください、取材日程を決めさせていただいた。私が入っている吹奏楽部では、夏休みの練習は午前中は自習で、午後から部活という感じだったので朝早くに取材させていただくことにした。

#### 取材概要

取材した人 矢口陽子先生

取材した場所 U小学校

取材した時間 8月4日 8時30分～9時10分

自分との関係性 小学校の先生

#### 取材までの困難

本来取材は9時からの予定だったのだが、8時からだと勘違いしていた私はすごく早く小学校に着いた。あまりにも静かだったので、これは時間勘違いしてた可能性大だと感じ、もう一度家に帰っ

た。でも心配だったので、念の為早めに家を出ることにした。するといつも引つかかる信号が全て青でノンストップで行けてしまったので、予定よりも相当早く着いてしまった。なのでもう少し、質問をたくさん考えて心の準備をして待っていていようと思っていると、先生はもう来てくださっており、もう教室に冷房をかけてくださっていたので「ちょっと早いけどもう始めてしまおか」と言われたので緊張でさらに汗をかいた。全然心の準備はできていなかった。

〔取材前の雑談〕

私「取材始めさせていただきます。よろしくお願いします。」

先生「よろしくね。ちょっと大人っぽくなったね!」

私「ありがとうございます。中学2年生になりました。」

先生「部活どう? 楽しい?」

私「めっちゃ楽しいです! 大変なこともあります。毎日みんなと練習頑張っています。この前の吹奏楽コンクール南地区大会代表になれたんで、8日に大阪府大会出るんです。」

先生「おめでとう! 目指すは関西大会?」

私「関西です!」

この会話でほんの少しだけ緊張がほぐれた気がした。そしてスマホにメモしていた考えてきた質問

を出して本格的に取材を始めた。先生が終始ニコニコしてくれていたのでそれも安心した。

（先生という仕事編）

私「まず、なんで先生は先生という職業を選んだのかということについてお聞きしたいです。」

先生「まず小6の時に支援学級の人たちと交流する機会があったんやけど、その時に初めてその子たちとの交流の仕方がすごく上手いって言われて。勉強も得意じゃなかったし初めて人に褒められて嬉しいなって思ってたんな。じゃあ自分の得意を活かそうと思って、最初は障害児教育の方に興味を持ってずっと障害児教育の方にいこうと思って。大学も教育大学の支援教育学科に入ってたん。

で、養護学校の先生になろうと思ってたんやけど、なんか教育実習に行った時に、『一旦通常の学級の担任を経てからの方がいいよ』っていうアドバイスをもらって。でそこから転向って言うか転勤することもできるからって言われて、そういう道もあるんやなって思ってたん。やからそういう道を歩んでみようって思ったのがきっかけです。」

私「その小6の時に支援学級の人たちと交流し終わった後には、先生っていう夢を決め切ってたんですか。」

先生「そうやね。ぼんやりそれがいいとは思ってたね。小学校1・2年生の時に、支援学級の先生と仲が良くて。その先生の部屋に遊びにいくたびにぎくろをもらって食べたとか。ホッピングして遊んだり、よくしてもらったのもすごく印象に残って。ああいいなって思ったんよ。」

私「ありがとうございます。」

私「次は先生っていう職業の魅力について教えていただきたいです。」

先生「先生っていう職業の魅力は、子供ができないことをできるようになっていく時の嬉しさが一番嬉しいかな。子供ができることが増えた時に『できたね』っていうとすごい嬉しそうな顔をしてくれたりとか、前に進んでいく姿を観れるのが一番嬉しい。」

私「その先生の職業関連でなんですけど、先生になるまでが一番辛かったことはなんですか。」

先生「特にこれが辛かったことにはないんやけど、先生っていう仕事の今の制度のよくないとこやと思うんやけど、3月に卒業していきなり4月から担任を任されるんよね。私は一発目が5年生でそんなんわかるわけないんやんか？ 一応指導の先生はおんねんけど、大学を卒業して10日ほどで

『今日から担任』って言われて名簿渡されて。そこから5教科6教科を毎日やってくださいって言われた時に、ほんとにどう進めていいんかも分からへんし、ほんとに困ってんな。

特に社会がどうしていいか分からんくって、教科書通り教えることは簡単やねんけど、それやと授業が10分経たずに終わってしまうんやんか。なんか、それをどう面白くしたらいいかが分からんくて本当に困った。やっぱり研修期間とかが、一年目は担任持たずに副担みたいな感じで見るとか、家庭訪問も急に5月ぐらいに『行ってきて』って言われて行くしかないから行ったらある家庭で私怒られてんな。『家庭訪問する意味は何や』って。だから自分も制度がわかってない中で、家庭訪問とかそ

ういうのも研修期間をもたしてあげたほうが新任の先生はいいと思うし、そうしたらやっぱり一年目で辞めてしまう子も減ると思うねん。それが一年目大変でしんどかったかな。」

私「確かに私も新しい先生には副担みたいな形の研修期間をつけた方がいいと今一部の話聞いただけでも思いました。」

緊張がなかなかほぐれず、私は一口お茶を飲んでからまた質問した。自分の心臓の音が聞こえていた。

私「さっき『授業の進め方がわからなかった』と言われていましたが、今先生が授業を進めていく上で気をつけてること、大切にしていることってなんですか。」

先生「まずは、今日この時間に何教えるんかっていう、ブレない一本のものを自分の中で決めとくってというのは大事やなって思ってるねんな。これだけは教える、これだけは子供にわかってもらうっていうのを一時間の目標っていうのを持つっていうこと。それとあと、子供の興味感心にできるだけ合わせて、今の世の中っていうのを観ながら子供の興味感心にどう合わせていくかっていうことが大事っていうのと、そこについてこれない子供達をどうフォローしていくのかっていうところからわかんねやったらここまではわからしてやろうっていう気持ちを持って、その3つを大事にできるだけで授業を組み立てるようにしてるよ。」

私「ありがとうございます。」

先生の話を聞いているうちに小学校での勉強を思い出し出てきて、あの先生今思うとこんな工夫をしていてくれてたんだと思うとその先生に会いたくなった。

私「次の質問なのですが、先生は小学校の先生ですが小学校は1年生から6年生までいます。1年生はまだ幼稚園児みたいなどころもあります。6年生はすごく大人っぽく成長すると思います。先生が小学生に対して接する時に共通して考えてることってありますか。」

先生「多分、どの子に対してもやし、大人に対してもやねんけど、まずは信頼を得ることが大事やと思ってる。誠実さとも繋がってくるんやけど、常に『私は味方ですよ』っていう気持ちと、『好きだよ』っていう気持ちを持って接するようにしているよ。ちょっと方向を間違えかけた時に訂正はするかもやねんけど、嫌なことをしてしまったらごめんつもちろん言って謝るし。相手に対して必ず誠実であるって言うことを伝えるように接すること、常に味方になるよ助けますよっていうことも大事やし。」

一番大切にしているのは『好きだよ』っていうことを思うだけじゃなくて、伝えるようにしてるねん。若い頃は恥ずかしくて伝えられなかったんやけど、今は『それいいね』とか『かっこいいね』とか『今日も元気にきてくれたね』とか、そういう言葉で毎日伝えられることが一番大事で信頼を得る

ことができたら厳しい言葉を言う時にも想いが伝わるかなって思ってるよ。」

私「私も刺さる内容すぎます。」

中学2年生になり、だいぶ清教学園での生活に慣れてきて、友達とも仲良くなってきたこの時期。私に一番必要なのは信頼される人になること、気持ちを伝えることなのかなと感じた。私自身、友達との距離感が近くなりすぎて嫌なことを言ってしまったり、喧嘩してしまう時もあった、そんなときには素直に自分の気持ちを伝えることも大切だと身に沁みだ。

「なんで教頭先生に？ 編」

次に何気に一番気になっていたことを質問した。

私「話は変わるんですが先生は去年から教頭先生になられました、私が在学中には担任の先生の仕事をされていたと思います。担任の先生と教頭先生の難しさの違いを教えてください。」

先生「教頭っていう仕事が、校長先生の描く学校像を実現させるっていう仕事が一番に与えられて、やから校長先生とたくさん話をし、校長先生がどんな学校にしたいのか、どんなふうにとっていこうとしてるのかをよく聞いてわかりやすく他の先生たちに伝える仕事をしてんねん。やからまずはそこを理解してうまく先生たちに伝えるっていうのがいちばんの仕事。」

ほんで実は教頭先生って『職員室の先生』って言われてんねん。教室と同じように、先生たちの体調が悪くなさそうとかか、先生たちが困ってないか、仕事を抱えすぎてしんどくなつてなさそうかっていうのを観て、なんか困ってることある？ って聞いたりとか、助けてほしいこととかあつたら聞いたり。教室でこんなことなかった？ って聞いたりなんか察知して聞いていくのが教頭先生の仕事やと思ってるし、先生たちもつと子供達と向き合えるように制度とか体調とかを整えていくつていのが教頭の仕事の難しさかな。」

私「ありがとうございます。」

先生「なんかこう、学年主任とかやったら学年全体は助けられることも多いんだけど、他の学年とか学校全体とかは見られへんやんか。気づいてるけどどこまで手出したいいかわからなくて、なんもせずにおつたらしんどくなつちやつた先生もみてきてんな。やからもうちよつと手助けしやすい立場になりたいなって思つて教頭試験を受けてん。」

私「私は小学校の時、本当に失礼なんですけど、教頭先生つてたまーに授業を見にくる先生で、なんか怖そうやし担任の先生と比べて何やってるかが見えにくくてずつと教頭先生つて何やってんやろーって思つてたんです。」

先生「そうやと思うわ。笑笑 あんまり子供達からは見えないところでやっています。」

私「本当にすみませんでした。小学生の自分に教えてあげたいです。」

教頭先生に対して「あの人何してるんやろ」って常々思っていた小学生の時の自分に教えてあげたいエピソードだった。教頭先生、すみませんでした。

↳最近の悩み編↳

私「また質問なんですけど、私は今なりたい仕事っていうのが明確になくて、ぼんやりこんな仕事してみたいのかなってみたいなのはあるんですけど。周りのクラスや吹奏楽の友達はこれになるって決めてる子も多くて、自分の興味関心からこれになるって言ってる子も多くて私はまだ決めてないんですけど、大丈夫ですか。」

先生「全然いいと思うよ。現にうちの息子2人はまだ決めてないと思う。けど、ここからの時代がいろんな職業が増えていろんな職業が減るって言われているから、多分、優ちゃんが大人になったときには今まで考えられなかったような仕事があると思うし、先生とかお医者さんとかわかりやすい職業以外にも、目で見えない職業って山盛りあると思うねん。世界の中でいろんな仕事があって、それが複雑に絡み合って社会っていうのは成り立ってると思うねんな。やから大学に入った時に見えてくるものもあるやろうし、社会人になった時に見えてくる仕事もある。今からは一つの仕事を一生やり通す時代ではなくて、転職を繰り返す時代って言われているから、キャリアアップをしていく上で新しいやりたいことを見つけたらいいと思う。」

私「私は今のところ完全なる文系なんです。模試とか定期テストの結果とかみてもグラフがあから

さまに偏ってて。数学が終わってて、国語はそこそこマシかなみたいな。やから理系の道は考えてなかったんですけどあんまり今決め切らなくてもいいですか。」

先生「決め切らんくていいと思う。大学いつてから方向転換する人もおるし、自分がどういってろで仕事したいかっていうのが大事やと思う。苦手科目はあるやろうけど、どうしても自分の進みたい道にはその科目があるって場合は学校の先生に相談したらいいと思うで。清教の先生なら聞いてくれると思う。ここをこうしたいってことは先生に相談して、そこで考えたらいいんちゃうかなって思うで。」

私「ありがとうございます。」

周りの友達がみんな立派に未来のことを考えている中で、私は目の前の課題と部活をすることに必死で、未来のことなんて考えられず、少し悩みだった。先生の話聞いていく中でそれが心の中で和らいだ気がした。

〈人間関係編〉

私「最後になるんですが、今までの先生や将来の話っていうところからは離れるんですけど、私は今年中2になって『先輩』って呼ばれる立場になりました。そしたら後輩と接するのがなんか難しく、小学校の頃は一つ学年が下の子と遊ぶなんてよくあって何もなかったのに、中学生になった瞬間

間、接し方がわからなくて。2人ともいい子なのにどう接したらいいかがわからなくて、後輩とどうコミュニケーションを取ったらいいんでしょうか。」

ついついお話が楽しくなつて全然関係ないのに最近の私の悩みを聞いてしまった。

先生「それはすごく我々の悩みどころでもあるし、新人の先生ともどんなふうに接していいかなつと考えるんやけど。無理に全部話しかけたりとか、めっちゃ仲良くならなつて思うことはないと思うし、仲良しこよしつていうそこは目指さなくていいと思う。清教学園の吹奏楽とかなら上を目指したいやろうから尚更な。

ただ、話しかけやすい雰囲気をもつことは大事やと思うねん。何か困つたことがあつた時に先輩に言つてみよう、相談してみようつていうことを思わせてあげてほしい。さつき子供達に信頼されるように接するつて言つたけど、それも一緒やと思うねん。いつでも話しかけられる雰囲気を作ることが先輩として大切やと思うで。ほんで先輩が教えてあげたり、厳しいことを言わなあかんときは言つてあげた方がいいと思うし。で、自分が仲良くしたいつて思うなら自分のことも知ってもらわなあかんから、まずはちよつとだけでも挨拶とか、こつちから話すつて言うのは相手の方の話を聞いてあげるつて言う認識の方がいいと思う。

私もあんまり人と話すのは得意じゃないから『話さなきや』つて思つてたけど、質問の方がいいら

しいねん。普段休みの日何してるん？とか。どう言うことが好きなの？とか聞く方が、相手も心を開いてくれやすいらしいし。人は結構、自分の話をするのが好きやから話を聞いてくれる人の方が好きになりやすいねんて。とりあえず相手に質問を投げかけてみるって言うのと良かったことを褒めるって言うのも大事。吹奏楽でもこの子こはめっちゃ上手くなったな、上達したなって思うことあると思うねんな。そういうことを見つけたらどんどん褒めてあげてほしい。でもそれも練習やと思う。私も先生になって、私の周りにそう言う先生が多かったからこう言うふうにするばいいんやなって学んだこともあるから今日は一個あの子に質問してみるとか褒めてあげるとかしたらいいと思うよ。頑張ってね！！」

私「今日はお忙しい中本当にありがとうございます！」

取材を終えて

先生の魅力は「人を思いやる心」だと思う。優しい先生といったイメージが大きかったが、今回の取材を通じて一貫していたのは、人のことをまず考えている言動だった。私も清教学園に入って、たくさんの人と出会った。その人たち一人一人のことをおもいやって考えて行動し、みんなで楽しめる学生生活になるように頑張ろうと感じた。それができたら一步、私も大人に近づけるかな？

これからも矢口先生に会うために学校の前を通る遠回りルートで帰り続けようと思う。



## 姉の魅力と優しさ

聞き手 寺師明夏

### 取材の動機

今回私が魅力的に思い取材相手に選んだのは、7歳歳が離れている姉の寺師呉明さんだ。姉を取材相手にした理由は、頭もいいし人付き合いもいい、そんな姉の、親しい人にしか見せない一面が魅力的に感じたからである。

私が物心ついた頃から、姉は受験のために塾に入り浸っておりほとんど顔を合わせていなかった。私が小学校に入学したときは姉は中学生だったので、関わる時間も少なかったし、私が小学校の中学年～高学年の時姉は受験だった。さらに現在姉は進学に伴い、関東の方で一人暮らしをしている。そのため私が印象に残ったのは、姉が親にスマホを取り上げられた時、私が姉のスマホが隠されている場所を教えたり、勉強でわからないところを聞くと一生懸命教えてくれたが、幼かった私にXやYを使って問題を教えてくれた（その時私はわからなかったけど理解したことにした）。

姉は実家に帰るたび勉強を教えてくれるし、ゲームと一緒にしてくれる、学校で怪我を負った日は病院に行く時、姉がずっと肩を貸してくれて私が階段を登る時も私を支えてくれた。そんな優しい姉の魅力に迫ってみたい。

## 取材依頼と日程

夏休み、1週間ほど姉が大阪に帰ってくるらしいので、その間に取材できるかLINEで依頼すると詳細も話していないのに「いいよ!」と快諾してくれた。それで、大阪に帰ってきている間に取材することに。

姉は頻繁に大阪に帰省するので特に緊張もなかった。姉が帰省するのは就職のためなので、忙しい時間を繕って取材を受けるそうなので申し訳なく思ったけど、結構ゲームとかしてたのでまあめっちゃ忙しいわけでもないしなあ。と思った。

## 取材概要

日時.. 2025年8月21日 17時~17時30分

場所.. 自宅

取材した方.. 大学生 寺師呉明さん

自分との関係.. 年上の姉妹

インタビューが始まるまで

せっかくなら家で取材を受けたいという姉と、私の希望で自宅でインタビューすることに。取材前も姉と私はゲームをしていて、あまり緊張はしていなかった。iPadのWordとメモ用紙、筆記用具、

スマホの録音アプリを立ち上げて取材に挑んだ。ちなみに3歳離れた年の別の姉も、私たちを横でガ  
ン見していて、年上の姉が「取材するならMでええんちゃん？ Mの方がいっぱい答えてくれそうや  
し面白くなると思うで」と言われたが「ケチつけられそうやし、魅力もないし、無理やし、気にせえ  
へんやろねえちゃんやったら」と言ったら、しょぼんとしてる姉が横で突っ伏してた向かい側の姉  
は爆笑していた。

気を取り直して取材した。さっきの会話で話しやすい感じでバンバン聞いていこうとワクワクしな  
がら取材をした。

W大学に行った理由

私「なぜ呉明さんはW大学に行ったのですか？」

呉明さん「動機でええんかな。まず就職したい企業があつて、その企業に行くには結構な学歴が必  
要で。そのためにと、W大学に行きたい学科があつてその学科に行くためにな。」

私「そのほかに理由とかないん？ 結構遠い大学やで。親の了承とかがどうしたん。」

呉明さん「えっと一人暮らしにはあんまり抵抗とかなくって、どんだけ遠くても国内ならいって  
親が言つてたから遠慮なく関東圏の大学に行ったな。学費めっちゃ高くて親もびっくりしてたけど。  
笑あと滑り止めの大学にも行きたい学部があつたで。」

姉が受験していた時私は自分の志望校より、姉がどんな大学に行くのかばかり考えていた。近い大学なのか、遠い大学なのか、賢い大学なのか、そうでもないのかとか。ずっと気にしていた理由は、姉は優しくて精神的にも肉体的にも強いけど、私は大の心配性なのでもしも何かあったら…と自分の成績と頭の悪さを棚に上げて考えていた。

そんな心配をしていて、いざ姉にどの大学に行くかと聞くと候補がいくつかあり、そのほとんどが関東にあり思わず「ねえちゃん東京行くの！！！！？」と叫んでしまい、姉には「受かったらな、一人暮らしや」と言われ11年間ずっと一緒に暮らしたのにと大変ショックを受けた覚えがある。

気を取り直して取材を進める。

私「なるほど。自分も姉が関東まで行くってびっくりしてたけどそう理由があったんやな。」

呉明さん「他にはね、一回一人暮らしとかしたら親の偉大さとかわかるかなーって。実際親がどんなかだけすごいかわかったし、あとあんたがいつもワーワーしてたから最初の方は寂しかったで。今でもずっと家で一人やったら歌歌ってるもん」

私「姉ちゃんも寂しいって思うんやなあ、なんか意外」

呉明さん「私を鬼かなんか思ってる？ 人間やで多分」

姉ちゃんの昔の印象と実際のところ

そんな会話をしている思い出したのが、昔の姉は今ほど優しくもなく、むしろ節分の時にくる鬼と並ぶ恐怖の対象であったので、ここであることを聞いてみた。

私「*ひまわり*、あと姉ちゃんってさあ、昔怖かったやん。でも今はそうでもないけどどうしたん」

呉明さん「さっき言った通り一人暮らして寂しいからかなあ。昔はあんたらがおって当たり前で、あんたらうるさいからストレスも溜まるけど、今はあんた達とずっとおるわけでもないからそんなにあんたらに当たらんかなあ。あと精神的に大人になったからかな。昔結構自己中やったから反省」

私「客観的に自分を見ることができたんやな、成長しとる素晴らしい！」

呉明さん「どうしたんや急に怖いねんけど」

私「気にするんじゃない、続けるで。姉ちゃんは中学高校とテニス部に入ってたけどなんで入ったん？あとよく続けられたのはなんで？」

姉は中学高校でテニス部に入っていたが、大層下手くそだったのに副部長だったのが疑問なのと、私は重度の飽き性で続けられる秘密が知りたいので聞いてみた。

呉明さん「あんたまだ生まれたか生まれてへんかの間の話やけど、テニス教室前の家のところで習っ

てたんよ。あーあそこあそこ：そう、B公園のそこ！」

B公園とは私が今現在住んでいる家に引越す前に住んでいたところにある、馬鹿でかい体育館だとか遊具だとかが置いてある公園で、よくみんなで遊びに行つたのをかすかに覚えている（なんせ引越す当時私は5歳だったのであんまり覚えてない）。

会話に戻る。

私「習つてたん！？ ええええええ！ それでもあんなそうでもない腕前やつたん！！！！？」

呉明さん「下手で悪かつたなあ！笑 そんなで中学で頑張つて部長にまでなつて試合もしてたよ景品とつてきたの覚えてない？」

私「ゴリラやろあのイケメンゴリラ」

イケメンゴリラとは姉が出場した試合で二位をとり、その景品として贈られたイケメンなゴリラのことで家族の中で一部の人から父方の祖父に似ているので「じいじい」と呼ばれていた。

呉明さん「そうそう、それ！ あの試合めっちゃ頑張つたんやで。それでえーっと、頑張つて後輩とかも教えてたから、後輩たちは私が卒業する時メッセージカードめっちゃくれたし、プレゼントもくれたで」

最初はちよつと意外に思ったけど、昔から面倒見は良かったし家じゃなくて学校ではいい子ちゃんだったから、ことさら後輩からは慕われていたのだろうなと思いつつ、取材も最終局面へ移った。

妹達になぜ優しいのか

私は今回の取材のテーマでもある、「姉の優しさ」を直接聞いてみた。

私「最後に質問するのは、なんで姉ちゃんは妹達に多少恐怖政治を敷きながらも、昔から今まで優しくできるん」

姉はちよつと意外そうにしてうーんと唸ったあと口を開いた。

呉明さん「姉やからそれが当然……っていうわけでもないなあ。あ、昔から友達とかテレビとかは妹に対してなんとも思ってたなかったり、ずっと仲悪くて一言も喋らへん家とかあるって聞いて、なんかそういう家とか家族って必ずしもじゃないけどなんか悲しくて不幸そうやし、楽しくなさそうやからそういう空気を出したくないねん。あとせつかくのお母さん達が育ててきてくれたんやから、大事にしようと思えるんかな。それに、なんやかんや言うてあんたらのこと好きやし、うるさいけど。笑

あと妹とかに嫉妬するってこともようけ聞くけど、うちら姉妹って結構得手不得手はつきりしてるやん。例えば私は勉強もゲームもできるけど、Mはダンスもできるし、形体的に勉強できて英語も実用性で言うとな私より喋れるし、あんたも絵描けるし勉強せえへんだけで一番頭もいいやん。だから嫉妬ってのはないかなー」

姉は笑いながら答えていた、私はずっと疑問だった事がある。それは私は姉がいくら優秀でも劣等感がわかなかつたこと、多分それは今回姉が答えてくれたことに近いかもしれない。

私「なんやかんやいって私たちのこと好きなんや」

姉「うん、好きやし大切」

私は今回の姉の魅力を探る取材を通して、姉の魅力と昔から一緒にいた姉が私たちのことをどう思っているかを知れて嬉しかったし、なんだか小恥ずかしかった。最後に写真を撮ることを伝えると姉はちよつと待ってと言い前髪を整えて二人で写真をとった。





## 私の嫌いな努力家

聞き手 渡部健一

今回私が取材相手として選んだのは、母である。母は中国出身で、昔は英語の教師をやっていたらしい。が、日本に来て、最初は文化の違いで仕事が上手くいかず苦労した時もあったそうだ。このような境遇にあるにもかかわらず、めげずに今でも頑張っているところに魅力を感じた。

### 嫌いな母

正直言って私は母が好きではない。反抗期の影響と、毎日のように勉強のことについて叱ってくるからだ。子供の頃、保育園で帰りの時間になった時、いつものように私を背負って家に帰してくれたあの温かく優しい母の腕が好きだった。今はもう、厳しくなっていて指を刺されるようになってしまった。「いい加減にしなさい」「いつまでそんなことをやっているつもり」などとネガティブな言葉が飛んでくる。その裏には、母の血の滲むような努力と、私への愛情が込められているかもしれない。

母はさまざまな外国語を使って毎日頑張っている。4ヶ国語も話せて仕事でも活用できていると言っている。歳をとっても勉強は止めたらいけないと言いながら、夜な夜な勉強をしている。母の座右の銘は「やるならとことん突き詰める」だ。

私が母に聞いてみたいこと

- ・母の学生時代について
- ・勉強についてしつこく言ってくる理由
- ・私についてどう思っているか

これらを母に聞きたい理由は、毎日母を見てきて、自分もこうなりたいな、と思ったからである。

### 取材概要

日時・・8月31日20時～20時30分

取材場所・・家

取材した方・・渡部真理子さん

自分との関係・・親

### 取材に至るまで

夏休み中に取材が出来なかった私は、早く取材をしないと、と思いながら母に取材の許可をもらいに行った。そうしたら、「私の何を取材すんねん笑」という返事が返ってきた。その時は、大事な

課題の1つだから。と言って押し通した。

時間が経ち、取材の時が来ていざ始めようとした時に、母が自分の部屋から出てきた。私は見ていたテレビを消し、取材に臨んだ。

### 母の学生時代

取材が始まり、早速最初に聞いてみたいことを聞くことにした。

私「真理子さんが学生時代のことと、頑張ったことを教えてください」

真理子さん「学生時代はね、私は負けず嫌いだっただよ。」

私「たとえばどんなところ？」

できるだけ会話を長続きさせたかったので、質問をした。

どんな回答が返ってくるか楽しみだった。

真理子さん「うん、だから勉強においてもそうやったし、たとえばスポーツでも100メートル走とかスピード勝負のやつは別やけど、自分の努力していけるものに関しては、徹底的に努力するタイプやった。私はそこまで学力がなかったから、努力は本当に学生時代によくしてきた。」

私「そうなんです、たとえばスポーツにおいて必死になったものはありますか？」

真理子さん「えーっと、ある時バトミントンをやる体育の授業がありました。でも私の家はその時そこまで裕福じゃなかったから、バトミントンが家になかったの。で、バトミントンをいざ授業でやるってなった時に私は全然打てなかったの。バトミントンの経験があった同じクラスの子は、結構打てたから楽しそうにやっけて。それで自分が打てれないことに悔しくて。

それでパパとママにおねだりしてバトミントンを買ってもらって、週末、私の住んでるマンションの裏手に空き地があって、そこで1人で自分で打ったやつを自分で打ち返して、それを何十分、何時間、何日もやっけるうちに上達して。授業でいっぱい打てるように努力した覚えが未だにもある。その時は体育の授業の先生がびっくりしてたのを覚えてる。」

私「すごい努力ですね、私ならそこまでできないと思います。」

真理子さん「あなたでもできるよ、努力はやる気があればいくらでもできるからね。」

こんな考え方をしているからこそ、ここまでがんばれているのだなと思った。

勉強についてしつこく言ってくる理由

私「次の質問、勉強についてしつこく言ってくる理由を教えてください。」

真理子さん「うーん、社会に出た時にちゃんとスタートラインを切れるようにして欲しいから。い

い大学を出んかったら、ちゃんとスタートラインを切れずに、いい会社に入れんくて、苦勞するよ。」

正直言つて、大学はそこまで興味がなく、いい会社に入れればいいと思つていたが、やはり大学は重要なんだなと氣づいた。

真理子さん「それに勉強はひとつの習慣。勉強ができるということは、それに対して一生懸命できたということ。ほんなら、他のことも一生懸命できるということよ。もし、他の勉強以外の壁にぶつかった時に、あなたが学校で頑張つたその力を、その壁にぶつけられるようになるのよ。勉強勉強っていつでも実は、頑張れる力を勉強を通じて身につけることが大事やねん。」

勉強にはそんな効果もあつたと知つて思わず驚いてしまった

私「そんな効果もあるんやね。」

真理子さん「そうや。毎日帰つてきたら、決まつた時間に椅子に座つて勉強する。単なる勉強だけして思うように思ふかもしれへんけど、実はその中には、あなた自身がなにかに向かつて自分の時間をちゃんと管理する、自分のやる氣をそこに向けていける努力がそこにあるのよ、結局は。自分が努力

して成果を上げた時の快感は、いつだって、社会に出てもあなたをつき動かしてくれる原動力になるのよ。」

私「ありがとうございます」

私についてどう思ってるか

私「最後の質問です。私についてどう思っていますか」

真理子さん「私の自慢の息子よ。自分のやるべきものに対しての熱意をもってる。勉強にももっと熱意を持って欲しいねんけど、最近は部活に集中しすぎてから、勉強はもうちょっと頑張つて欲しいと思うけど、私はあなたのことを信じてるわ。いつか追い上げてくるよ、あなたは。」

私「その追い上げてくるっていう自信はどこにあるんですか？」

真理子さん「自分の息子やからやる。部活に夢中になって頑張ってるあなたを見てる。それにあなたのその頑張りを受験を通じて見てきて、あなたの辛抱強さをわかってる。私のまずい料理を毎日食べなくても1回も文句言わないんだから。」

ここでふと母が笑った。そこまで母の料理がまずいと思っていなかったが、言われてみればそうだった気がする。

真理子さん「あなたには思いっきり夢を持って過ごしてほしい。食べて寝るだけの生活するだけじゃ留まらずに、夢を持って世界をたび回って欲しい。そのために小さい頃から外国語を勉強させて、ともしんどかったんやろうけど、本当に小学校卒業する時は成績トップで卒業してきた。だから自分の息子に自信を持つてる。まだタイミングが来てないだけで、そのうち自覚してくると思うよ。」

私「そうなん？じゃあ期待しといて」

そうして私の取材は終わった。

取材を終えて

私が、親しく接している母に取材して感じたことは、努力をしないと前には進めないことや、勉強をしないと将来的に見て損するということだ。この結果から、継続はとても重要だということに気がついた。私は勉強をするにあたり、なんでこのようなことをするのか、どうしてそうなるのか。などを、自分の中で考えながら努力をしていきたいと思った。



## 元清教生のやばかった兄

聞き手 亜野日里

兄に取材しようと思った理由

僕はいつも家でゴロゴロしながらゲームをしている、自分の兄に取材しようと思う。なぜなら僕の兄は元清教生だからだ。

僕の兄は頭が悪く、テストはずっと点数が低かったのに無事高校まで卒業しており、今は家でゲームばかりしている。正直「バイトくらいしろよ!」とは思っているのですが、一緒にゲームしたりするので何気にいい兄だ。

部活のない日曜日は、よく僕と兄と弟でゲームをしたりします。兄は消防士になるための試験の勉強をしないとといけないのに、家でゴロゴロしているのだ。

だけど、優しく、一緒に遊んでいると楽しいのでたまに、ええ兄ですよん!と思うことがあるのだ。

中学一年生の二学期辺りでやらかして、二分の一退学になったという歴史を刻んでいる。その理由が自分で買ったモデルガンを教室で発砲したからである。その時僕はまだ小2だったのに、お母さんが兄にめちゃくちゃキレてたのを覚えている。僕と弟が怖がっていたら、お父さんが「お前ら一緒に2回のベッドに避難するぞ!」と言われ、ベッドの上でお母さんが怒鳴っているのを聞いていまし

た。ちなみに、この事があってからお母さんに怒られるのが怖くなったのだ。

こんなことがあったのに、高校を留年せずにしつかりと卒業できた兄に魅力を感じたから取材することにしたのである。

そんな頭の悪かった兄（いろんな意味で）でも、英検三級を持っているから、どのような勉強をしたら三級が受かるのか？ ということや、最低限何を頑張ったら高校まで卒業できるのか？ などといったことを聞こうと思ったのだ。

取材の日まで…になるはずだったもの

僕は、夏休中にお兄ちゃんに「総合の宿題の取材するぞ！」って言うっては断られてを繰り返していた。それを繰り返しているうちに、取材をできずに夏休みが終わってしまった。「時間は残酷やなあ…」そして、2学期の初回授業を終え、次の授業までに取材をすると心に誓ったのだ。そこで兄に「総合の取材しよ」って言ったのだ。

取材日時…9月3日午後10時

取材場所…自宅のリビング

取材相手…亜野荘塀さん

質問の内容

- ・なんで成績とか悪かったのに卒業できたのか？
- ・なんで英検三級を持っているのか？
- ・学校生活で最低限何を頑張ったのか？
- ・テストの点数は大体どれぐらいだったのか？

当日取材に至るまで（兄が質問への答えを書いてくれるまで）

僕「前から言ってた取材なんやけどさ、今からいける？」

兄「別にええけど…」

僕「じゃあ今から取材の準備しますね〜」

兄「あのさ」

僕「うん？」

兄「録音するん、ゲームの合間で分けて取材でいい？」

僕「いや、一気にやりたい！」

兄「ええ〜」

兄「じゃあさ、ノートに俺に質問する予定やったことまとめとして、お前が寝た後に書いといたるわ」

僕「う、うん（それやったら喋った記録じゃないからあかんのちゃうかな…？）じゃあそれでもいい、書いて」

僕「じゃあ寝ますわ」

といった感じで残念ながら直接の取材は出来なかったが、質問に対する答えはどうか知ることができたのだ。

質問に対する答え

Q..なんで卒業できたん？

A..得意教科以外の成績は総じて低かった自分が無事卒業できたのは、偏にお世話になった先生からの慈悲、これに尽きると思っているそう。

兄は、中一から問題を起こして、結局卒業するまでの間も、なにかと迷惑をかけ続けてきたのだ。先生方からすれば、本当に面倒臭いクソガキ生徒だったと思われる、本人は言っているのだ。

兄が言うには、そんなガキを六年間お世話して頂き、卒業まで導いてくれた先生方には、本当に頭が上がりなくらい感謝してるらしい。

兄がお世話になった先生をみんながよく知ってる方を挙げるなら、N先生だと言っている。兄がN先生にお世話になったのはよく知っている。それは、N先生から家に何回か電話がきているのを母か

ら聞いたからだ。課題の未提出や、居残りをサボったとか、色々な理由で電話がかかってきている。そのおかげで、N先生と僕の母は仲が良くなり、入学説明会るとき、母とN先生が話していたのを見てしまったのだ。

Q・・英語の成績も悪かったのに何故英検三級を持ってるいるのか

A・・英検三級は中二の時に受け、気づいたら合格していたらしい。

兄は、こんな事を言うのはあまりよろしくないだろうが、本当に勉強してないと言っている。強いて言うなら、英単語を三十個程覚えただけで合格したから、「なんで英検三級を持っているのか？」と質問されても、逆に質問したいくらいらしい。

正直これを聞いて、めっちゃ腹たつた。だって、今英語がダメダメで今後どうなるんやろ？って心配してるのに、英単語三十個程覚えただけで合格されたら、「俺の心配してた時間を、英単語三十個程覚える時間に使ったら合格できるんか？」って気持ちになったからだ。

Q・・学校生活で、最低限何を頑張った？

A・・兄は、最低限、課題の提出を頑張ったらしい。

課題を提出する時は、提出期限を過ぎてから出すことが殆どだったらしい。しかし、「課題は基本的に定期試験までに終わらせること」に尽きると思っっているそうだ。

兄が、「勉強ができる人なら違うだろうが、苦手教科などあっても難しいということもあるだろう。そういう時は、まず課題を定期試験までに終わらせるといいう事を試して欲しい」と言っている。

Q…テストの点は普段どれぐらいだった？

A…教科による。

テストの点は、得意だった国語は、勉強せずとも65〜80点くらいは取れていたそう。しかし、苦手だった数学に至っては、最低点で8点を取ったらしい。「その時は勉強もせず、ずっと遊んでいた時期でもあったからなのだが、それにしても酷い点数だったと思う。」と本人は言っていたのだ。

他の教科は内容によって点数が変わったので、どれぐらいだったとは言い切れないと、本人は言っていたのだ。

取材？を終えて

取材はできなかつたけど、聞きたかつた事に対しての答えはしっかりと書かれていて安心できた。

正直、兄がずっとゲームをしているので、「ノートのこと忘れてて、朝見てみたらまっさらかなあ

〜？」と思っていたけど、しっかりと書かれていたので、やっぱりやる時はしっかりとやってくれる良いお兄ちゃんだなと思った。

ジャンパーを着る

聞き手 大山門左工門

今回、私が選んだ取材相手は私の父である。

なぜ父を選んだのかなのだが、友達、先輩に取材するのは私からすると現実的でない（いつ私が体調が良くなるかわからず、また体調が良い時に相手に時間があるとは限らない）ため、取材できるのは身内に絞られるな、と考えたからである。

そんな中で、比較的休日に暇を持って余していそうな父が一番良いと考え、今回の取材相手に選んだ。もちろん、取材動機としてはこれ以上ないほど終わっているが、父を選んだ理由はこれであったのだ。

取材依頼に関して

父に取材するのは、本来であれば盆休みに行く予定であった。取材して良いか、と言う旨を伝えたのは夏休みに入った直後のことである。だが、実際に取材をしたのは夏休み明け、それも夏休みが明けから一ヶ月ほど経ってからである。言い訳がましいが、なぜこんなに遅れてしまったのか軽く説明しよう。

まず、盆休みに入る一週間前ほどから、父方の祖父が危篤になり、亡くなる時に誰かいたほうがい

いだろう、と言うことで常に誰かが祖父の寝室にいることになった。昼も、夜も問わずである。

そんな状況で、父は夜起きっぱなしだったり、帰ってきたかと思うとまた午後出かけたり、とまあ、取材できるような状況では一切なかった。

そして、盆休みの中あたり、祖父が亡くなった。

通夜、葬式と済ませ、葬式の翌日、私は吹奏楽部の合宿へと向かった。(1日遅れての参加である)絶対に疲弊していたと思うのに、朝5時ごろから合宿所までよく父は送り届けてくれたと思う。そんなこんなで、完全に取材する機会を失ってしまっていた。(父は仕事で単身赴任しており、休日には帰ってこない。かつ、休日は休日で演奏会の練習に行ったりと忙しかった)

だが、課題の期限(といってもとつくに過ぎているが)があったので、先日、暇そうな時において取材させてもらった

まあ、そう言う感じである。

## 取材概要

場所..自宅のソファにて

日時..2025.09.28 17..30 ~ 18..00

取材相手..大山惣左エ門さん

## 関係性…父

取材を始めるまで

父はソファで寝ていた。

というか父は大体寝ているのだが、（尚、本人は「気を失ってるだけ」と主張している）いつも用事があるときは叩き起こしているので叩き起こした。

事前に今日、総合学習の課題のやつやるで、と伝えていたのでそのことを言うと、「ああ、今やるか」と言われた。

…と、まあこんな薄い始まり方をした取材である。

## 謎に真面目

父はふだん結構奇行に走り、笑いを取ろうとする。（と言う私も家ではかなり奇行に走っている）だが、そのときは真面目でかなりびっくりした。父が真面目なのは、演奏会の時と仕事の時くらいだと思っていたからだだった。なんか変に身構えられても嫌だなあ、と思いながら取材を開始した。

感情的にならないでいる方法

まず、最初に質問したのは「感情的にならないでいる方法」である。

父は滅多に感情的にならない。というか感情的になつているところを見たことがない。なぜだろうか、と前から不思議だったので、聞いてみることにした。(私は結構感情が表に出してしまう)

私) 「えっと、まず感情的にいないでいる方法。父さんって感情的になることがあんまないなつて思うんやけど、まあ、知らんけどな? 人がそう見えるだけの可能性もあるけど」

父) 「あ、そう昔ね。本を読んだんよ。そこにな、イラッとした時は、まあいいジャンパーを着なさいみたいなん書いてて、まあいいじゃんつていうジャンパー。それを着て、まあいいじゃんと思いなさい。つて書いてたんよ」

私) 「へー、なんて本か覚えてる?」

父) 「いや、覚えとらんな」

私) 「いつ頃読んだん?」

父) 「結婚して間もないころ? そこで、この感情的になつてもいいことがないつていうのを理解した。なんらいいことないんよ本当に。相手も気悪いし、自分も気が悪いし。」

私) 「でも、そのしゃあないをできるのはどういう風にしてるん? むずない?」

父) 「客観的に俯瞰的に。自分をまあ頑張れや落ち着きや、つて思う。離れたところから見ろ」

私) 「じゃあコミュニケーションを1つ取る中で大事にしていることは?」

父) 「コミュニケーションを取る中で大事にしていること? なんの?」

私) 「何のコミュニケーションでも」

父) 「父さんコミュニケーション上手くないで？」

私) 「いやいやいやいやいや、コミュニケーション上手くなかったら営業職できないやん」

父) 「それは仕事やから、正直それには向かない。器質的に。プログラム作ったりリード作るのもあるやん。なんかを作る黙々とやるそっちの方が好きやね。」

父) 「仕事のためにコミュニケーション：いや、ちゃうな、なんやろなそういう意味じゃ、子供の頃から、相手に変な人やなって思われたくて、相手が笑うことをしたかった。とりあえず相手を笑わせたかったってこと」

父) 「相手の記憶に残ってほしかった。そうするにはどうしたらいいのかなって考えて、まあ失敗いっぱいしたけどな。自分のことばかりでも相手聞いてくれないし。」

父) 「なんやろ、うまいことトライアンドエラーで繰り返しながらだよな。父さん、今営業コミュニケーションうまいとか言うけど、実際見たらびっくりすんで？ 父さん一切喋れへん。あそうなんですわねー、とか新規の客のとこ行っても全然喋れへんよ。喋ってもらっててそれに相槌打つだけ。」

父) 「仕事上でのコミュニケーションは相手を喋らせる、んで気持ちよくさせることにこだわってる。」

会話の時には「相手を気持ち良くさせる」らしい。それを聞いて私は、非常に驚いた。相手の気分をよくする、という発想は一切なかったからである。いらつとしたとき、「しゃーない」と思うことは確かに、自分の精神的にも相手の精神的にも、大事なことだと思った。

私はジャンパーを着ることができのだろうか

なぜ独特なことをするのか

いくつか聞くことをリストにはいたのだが、なかなか思いつかず、適当に書いてしまったりリストの中の一つ。まあ、これはかなり変な質問である。

私) 「じゃあこれはなんかあれやけど、まあ全然話すことが思いつかんかったから、これ入れてるだけやからまあ適当に答えてくれていいんやけど。なぜ独特な楽器(バソーン)を吹こうとするのか教えてもらいたいです」

父) 「変わった楽器：笑 まあ、変わったことかと思ってるからや。名前が変やから、そんな名前されたから、父さん。けど、なんかそういう風に生きなきゃって思ってしまう。名前がもう変やから。印象に残る名前だと相手は期待するんよ。その時点で。面白さを」

父) 「で、なんか普通の人やったらなんかおもんねってなられる。根本的に変わったことかした。変わったこととして、面白く思われたい」

父) 「コミュニケーションじゃないってことだよ。自分で思うには、意図にやってんの。自然にできる、じゃない。意図的にやる。」

私も変な名前の父親に変な名前をつけられたから変なことをしているのだろうか…？ あまり学校で出していない(はず)ので、これを読んでいる同級生は「？」であるだろうが。

コミュニケーションで大事にしていること

父は自分でコミュニケーションがないと言う。だが、意図的にしても何かを大事にしているはずだと思ったので聞いてみることにした。

私) 「じゃあ個人的な会話とかで気をつけてることって何？ 今も昔も含め」

父) 「そやなあ…、あ、今は相手を気持ちよくさせる会話をする。嫌な思いをさしたくない」

父) 「昔は我が、我がやったから」

私) 「何年ぐらい前まで？」

父) 「大学ぐらい？ 社会人になってからすぐ鼻を折られた。自分はすごい、できるやつと思ってた。でも周りとか見るとコミュニケーションお化けのやつらばかりやから。ほんまにお化け」

私) 「じゃあさ、努力とかするときのモチベーションってどうしてる？」

父) 「父さん負けず嫌いやねんよ、やから絶対にどっかで飛び抜けたいって思ってる」

私) 「全体的にってこと？ 特定の誰かに負けたくないとかではなく」

父) 「そうそう。だから飛び抜ける方向性は全体的にもあるし、唯一無二でもいい。誰かに勝ちたい、特定の誰かに勝ちたいって言うのは思ったことがない」

私) 「それは私と似てんな、私も負けず嫌いやと思ってるけど個人的に誰かに勝ちたい、とは思わないもん」

私もそうだが、負けず嫌いというのはこういう面で役に立つのだなと思い、すこしほっとした。負けず嫌いというのはポジティブにもネガティブにも捉えられてしまうが、父のこれはポジティブに捉えるのが易しく良いなあと思った。

察する力について

父は本当に相手の心を察する。私からすると怖いくらいに察する。なぜだろうか。本当にこれが不思議だったので聞いてみることにした。

私) 「父さんって結構相手の感情とか察するけどどうやってるん？」

父) 「え？ どこがやねん」

私) 「え? いやそうやん」

父) 「察するっていうかそれはあれじゃない? 相手が何してほしいんかな、と考えてるんよ、それもさつきと同じ相手を気持ちよくさせる、っていうのと同じ思考。何が欲しいんかな、何して欲しいんかなって、父さんが相手の立場やったら、同じような立場になったら何してほしいんやろ、何を欲しいんやろってかんがえる。」

仕事でも何言ったらこの人受けんのかな、何を見せたら衝撃が走るのかな。そういうのを考えて、セオリー通りやらない。一切やらない。ただ、結構パターン化するのが好きなんよ。あ、このパターンの時はこの引き出し開けてこれ出す。その引き出しがいっぱいあるねん。ああ、こういう流れでこうなってABCみたいな流れに来たなってなったらじゃあこれは次のDの引き出し使おうって。いくつもいくつもパターン作って、そこから選択するってこと。経験やから、まあ、父さんの思考はそんな感じ。

型にはまったことやろうとする。ちょっとでもずれたらあかん。枝で考える。選択肢Aの方に行ったら次は、な? CDがあるねんけど、ゴールは全然違う所にある。持っていきたいところは。だから、ゴールにちよつとずつでもよっていくようにな、質問を選ばなあかん。そういうのを繰り返して、あれ離れていったなってなってそうしたらちよつとずつちよつとずつ戻していくよな」

私) 「たくさんあるランチの中でそれをなんかD方向に行かせたいとしたら、ちよつとずつD方向のランチにどんどん差し替えていくってこと?」

父) 「そう。そういうやり方もあるし、色々あるねん。わざと反対向けるとかな」

私) 「ほえ？」

父) 「Dの方に行きたかったら、A行く質問する。わざとな。なんでわざとするかっていうと、相手がいやちようよってなつて大きく戻る時あるの」

父) 「まああと、父さん所長やから相手が怒っていたら行くわけよ。最初仲良くなりたいたい解決したい、こうやって怒ってるのか。こういう地づけやろ？めっちゃ怒ってるとは解決から全然違う方向に話が進む。そういう時はわざと怒らせる時もあるしな。マジで。こういう人は、めっちゃめっちゃ怒る人は怒り続けられへん。エネルギー使い切るから。そうしたら勝手に妥協点探そうとするんよそんな時から。変にこう、解決の話ばかりしたらどんどん発火していく」

父) 「だから、そう言う人が早く燃え尽きるように、わざと怒らせることもある。冷静に、正論を言つて。『はよ燃え尽きんかな』。あ、燃え尽きてきたな』って。

父さんは昔は本当にコミュニケーション下手やった。ひたすら自分で爆発しただけやんっていう。勝手におもろいこと言つて相手が受けへんかったらずーんつてなるだけ。みんなの前でガメラの歌を熱唱したり、まあ、大声叫んで。なんでかって言ったら、普通に会話してうまいこと喋られへん。そうやって切れると思つたから。

まあほぼ経験や。うん。あとは大学の時、部活の幹部とか入つて会議とかするやん。お父さんついていかれへんねん。会議に。めっちゃ困つてたよ。みんなの言つてることが分からへん。なんでか言

つたら勝手に考えてな、自分ですごい先々考えちゃう。ピューっでもう結論ぐらいまで。」

私) 「それは私もそうやわ、確かに友達と話しても結構そうなる」

父) 「喋らずにね。で考えてる間に全然ちゃう方向に会議は進んだり。結構悩んだね」

私) 「思考をストップできない？」

父) 「そやね。あの時どうしようかなくて考えてた。そう、だから大学の色々あんねんけど、そういうのも全然できへん。みんながわいのわいの騒いでみんなのやってることわからへん。ようは相手の話なんか聞いちゃいなかったんやろ。笑だからまずいつてなって変えた。意図的に。まず自分の意見問わず、相手の意見をまずよく聞いてそっから考えるようにした」

話を自分の持つていききたい方向に持つていくのは至難の業なのだなど痛感した。これは経験でなんとかするものなのだ、と。私はいつになつたらこんな話術を手に入れられるのだろうか？(経験は今ほぼ積めていないだろう。なぜなら他人との関わりが皆無だからだ)

—— ああ、ちなみにガメラは1965年に公開された怪獣系の映画である。古い。

ちなみに父は1974年生まれだ。

取材を終えて

取材を終えて思った父の「魅力」は自分を見つめることができること、である。父は思った以上に色々考えて、改善しようとする人間なのだ、と知った。

私はどうだろう。何も考えずに最短のルートをただ突き進んでいるだけの人間だ。自分の改善すべきところが改めて見えた気がする。とりあえず、私は自分の思考をとめる練習をしようと思った。そして、改めて父はすごい努力家なのだ、と再認識した。

私は結構感情的になってしまう。

だから、私はジャンパーを着なければならぬ。

それが自分も相手も幸せにいられる手段だと知った30分であった。

最後に「2ショット今とつてもいい？ 前撮ったやつ使う？ それか」と切り出すと「撮ろう撮ろう」と快諾してくれた。

N L

当初はひたすら変顔を保っていたので待ち続けること5分後、ようやく変顔を解いて普通に撮ってくれた。



了



開いてみよう

その見聞きに乗っている  
の4文字目までわかるよ



## まだ隠れた魅力

聞き手 長理愛

### 取材動機

今回私が取材相手に選んだのは、吹奏楽部の先輩である75期生の綾瀬美羽先輩だ。美羽先輩は私のパートであるパーカス（パーカッションの略）のパーリー（パートリーダーの略）を務めている。パーリーは主に、自分のパートをまとめることが役割である。そのほかにも、パートで練習するときを中心に進めたり、後輩に新しいことを教えたりと、たくさんやるべきことがある。また、たくさんすることをやりつつ、自分の基礎力を高めたり曲の完成度を上げたりしていかなければならない。美羽先輩は、私よりやるべきことがたくさんあるのに基礎力は高く、色々な楽器を使いこなしている。その上とても上手い。そんなところを私は、尊敬している。そして美羽先輩は、優しくとても接しやすい先輩だ。

そんな美羽先輩は元々、あまり音楽が好きではなかったようだ。それなら、別に吹奏楽部に入部しないで、別の部活に入部する道もあったはずだ。それに、吹奏楽部は部活の中では活動日数が多いし大変な部活だ。だけど、今は吹奏楽部に所属し、パーリーになっている。そして、今ではたくさん楽器をこなしたり、マレット（鍵盤を叩くやつ）を四本で持ったりと、難しい技までもこなしている。

美羽先輩は練習中、できていないことがあったら指摘してくれて、わかりやすく教えてくれる。例えば、私がウッドブロックの練習をしている時のことだ。私が、楽譜通りにリズムを叩けず綺麗に拍にハマらなかつたとき、美羽先輩は自分の練習もあるにもかかわらず私の練習に付き合ってくれた。そのおかげで、練習する前よりも綺麗に拍にハマることができるようになった。自分の練習する楽器でないのに、こんなに上手に教えることができるのは、やっぱりすごいなと思う。

こんなふうに、美羽先輩の部活での魅力はたくさんある。でも、普段の美羽先輩のことはあまり知らない。だから、この取材を通して、部活以外の美羽先輩のことを知れたらいいと思う。

そこで、今回私は美羽先輩に、どうして吹奏楽部に入部したのか、どうやって大変なことを乗り越えてきたのか、練習の時にどんな事を心がけているのか、普段、どんなことをしているのか、など、たくさんのお話を取材しようと思う。

取材依頼から日程が決まるまで

取材をするかもしれないことは、少し前から言っていた。授業担当の先生からもらった「添え状」と、1学期に書いた取材動機のレポートを先輩に渡したことで、取材をすることが本格的に決まった。先輩は取材をころよく引き受けてくれた。取材の日程は何度か「㊦」ではなした結果、最初はスタバで取材をしようとしていたが先輩と相談した結果、コンクールも近いので学校のラーニングコモンズで行うことになった。夏休み中にある部活での自習中になった。

## 取材概要

日時…2025年8月7日 9時～10時20分

場所…ラーニングコモンズ

取材した方…綾瀬美羽先輩

自分との関係…部活の先輩

## 取材が始まるまで

取材は夏休みに部活で行われる自習の時間に行われた。まず、学校に着いたら学年ごとに点呼をとるその後、先輩とラーニングコモンズへ向かった。私はこの時改めて、取材をすることを実感し、とても緊張していた。

ラーニングコモンズにいたらまず雑談をした。私はとても緊張していたが、先輩はいつものように明るく喋ってくれたので、少しずつ緊張もほぐれていった。15分ほど雑談したら時間も迫ってきたので、取材を始めることになった。

## 入部動機

インタビューが始まった。私はまず、先輩はなぜ吹奏楽部に入ろうと思ったのかを聞くことにした。何度か入った理由を聞いたことはあったが、詳しいことは聞いたことはなかったので今回知れた

らしいなど思いこの質問をすることにした。

私「取材をはじめます。まず、なんで奏楽部に入ったんですか？」

先輩「んーと、んー、新入生歓迎会の時にも言った通り、なんかいろんな部活に体験入部してみたいなと思って行っただよ。やりたかった楽器はフルートかパーカッションやっただんやど、パーカッションやってみて、先輩3人しかおらんくて、そのうちの二人のY先輩とK先輩（74期の先輩）が美羽が言うのもあれだけどめつつちゃ可愛がってくれて、後輩やん！みたいな。

そして1回の体験入部だけで毎日絶対1回は休み時間会いに来てくれて、教室まで来て会いに来てくれて、入ってな！入ってな！って言われたから、さすがにそれで入らんのもあれやなあと思って、本当は清教入っただらなごなた部に入りたいなと思ってたけど、まあそうされたら吹部に入るしかないなと思って吹奏学部に入りました。で、入った時にはもうH（もう一人の75期の先輩）がおつて、2023年の課題曲を練習し始めてた。って感じです。」

私は、この入部動機を聞いて、ある時先輩が「音楽が好きじゃなかった」と言うことを言っていたのを思い出した。そこで、音楽が好きじゃなかったのに、なぜ常に音楽と触れ合っている吹奏楽部に入部しようと思ったのか、聞いてみることにした。

私「そうだったんですね。あの、なんかの時に先輩は音楽嫌いやったっていったじゃないですか、他の部活に入ろうと思わなかったですか？」

先輩「なんか、音楽嫌いだったのは小学校の時で、なんか音楽の先生がクソ怖くて、めっちゃ怖くて、もうほんま何やってもなんか、自分が怒られてなくてもめっちゃ怖いよ。だからもう嫌で嫌で楽しくないし、<sup>ッ</sup>ええー次音楽ー!? ええー<sup>ッ</sup>みたいな。まあでも、唯一楽しかったのは楽器演奏。やっぱり鍵盤しかやった事なかった。」

私「鍵盤以外は、なかったんですか？」

先輩「なんかボンゴもあったしコンガもあったしタンバリンもあった。あとアコーディオンもあった。」

私「アコーディオン? ギターですか？」

先輩「アコーディオン知らん? なんか、こうやって空気入れながらこつちで引くみたいな。(エア<sup>ー</sup>でやってくれた。)」

私「ピエロのやつですか？」

先輩「ああそうそうそう! それそれ! それがあった」

私「楽しかったですか? 楽器演奏。」

先輩「うん、それだけはまじで唯一の楽しみやった、音楽で。それ以外はほんまに嫌で、歌うのも歌うっちゃ歌うけど、そもそも音楽の授業が嫌やからなんかやる気ゼロみたいな。まあなんかでも一

番最後に小6の時に卒業演奏会みたいながあったんやけど、その時に歌う曲と演奏する曲はガチった。でも音楽の先生嫌いやから、〃話聞くのだる〃ってずっと思ってた。これが、小学校の時に嫌いやった理由。」

私「じゃあ、中学になって好きになっただけですか？」

先輩「うん、なんかもう、小学校の時の名残があるから音楽の授業だけはホンマにやって、でも中学校のY先生の音楽の受けたら、めつつちゃなんか楽しくて、〃この先生やったら音楽楽しめる!!〃とか思ってためっちゃ嬉しかった。」

私「良かったですね！」

先輩「で、Y先生何部なんやろんなーって思ってたから吹奏楽部やって、自分なごなた部って言うけど吹部もいいなあと思って。で、そこから1回体験に行ったら先輩が毎日休み時間来て〃もう行くしかないな〃と思って入ったって感じ。」

私「吹部入って良かったですか？」

先輩「うん、まじで良かった。」

私「後悔はないですか？」

先輩「後悔ない！」

私「おめでとうございます。」

先輩「ありがとうございます。」

私はこの話を聞いて、もし先輩が中学校に入って音楽を好きにならなかったり、吹奏楽部の体験に行つてなかったら出会えてなかったかもしれないから、今一緒に活動できていて良かったなと思つた。

吹部に入って

私は次に、吹部に入って嫌なことはなかったのかを、聞いてみることにした。吹奏楽部は大人数でやっているから意見がぶつかったり大変なことも多かったりするから、先輩にもそんな経験がないか聞くことにした。

私「次の質問に行きます。吹部に入って嫌になつたことはないですか？」

先輩「んー、まあ人間関係を抜きにしたらない。」

私「おー！」

先輩「やっぱり人間関係かな、一番は。」

私「なんか、楽器を準備するの面倒くさいとか、そういうのはないんですか？」

先輩「それはないかな。自分が練習したい楽器を出すのは別に。なおすのが嫌だったけど。」

私「何が違うんですか？」



先輩「でもさパークスってさ叩いたら音出るやん。そう、その違いがあるから。美羽はそういうふうに見られるのがいやや。」

先輩「やめようと思ったこともやけど、やめたら『誰でも出来るからー』みたいなんなりそうやから、いややなーと思ってるけど。うん、人間関係では『そっちがやめてください』って感じなだけで、美羽はやめたくなかった。」

私「そうなんです。じゃあ高校もこのままパークションで二年間？」

先輩「やるつもり。まあ、下のクラスに下がらない限りな。」

私「そうなんです？ 下がっちゃたら…」

先輩「はいらない。」

私「なんでなんです？ 私、下のクラスでしたけど入りました。」

先輩「(笑) 下のクラスやったら美羽はESSとか。」

私「英語ですか!？」

先輩「うん! 笑笑」

私「英語好きなんです？」

先輩「きらい」

私「なんで…」

先輩「嫌いやから。」

私「きらい…。楽しくないじゃないですか！」

先輩「うん、楽しくない。」

私「やのに、毎日行くんですか？」

先輩「なんか、あかん”って言われた。親に。」

私「じゃあ、部活に入らないっていう選択肢はないんですか？」

先輩「入りたいから嫌かな。何もやらんのはちよつと嫌かも。逆にサボりそうで嫌や。」

私「勉強とかですか？」

先輩「うん。かなーって感じ。あれ、何の話やったっけ？ 笑」

私「えー、何の話…。あ！吹部に入って嫌なことは何ですか”っていう話でした。」

先輩「んー。別にない。」

私「よかったです。」

先輩「まあ、あつたけど。んー特に2年の時が一番あつた。」

私「そうなんですか？ あんなに楽しそうでしたのに、去年。」

先輩「まあ、裏があるからな。美羽にも。」

私「そりゃー…。」

先輩「ずっと先輩に相談乗ってもらってた。」

私「そうなんですか…!？」

先輩「うん！ Y先輩にずっと。グーチャーではないけど、グーチャーを聞いてもらってた笑」  
私「おー、まあよかったじゃないですか。それで、〃やめる〃ってならなくて。」

先輩「でも、逆によかったかも。あーあれかも、いってて良かったかも。」

私「誰がですか？」

先輩「なにが？」

私「いっててくれて良かったかもしれないって。」

先輩「相方」

私「H先輩ですか？」

先輩「うん。まあ、そんな感じ。」

去年の先輩は、とても楽しそうに毎日部活に来ていたから、ずっと先輩に相談乗ってもらってたってことを知って、びっくりした。

私「あと半年ないじゃないですか。」

先輩「何まで？」

私「卒部。」

先輩「まじで！？ 卒部って3月じゃないん？」

私「4、5、6、7、8。で、一時引退。もう、5ヶ月じゃないですか。」

先輩「うん、ないのか。6ヶ月もないんか。」

私「で、あと7（ヶ月）やとしても一時引退があるんで、」

先輩「確かに。」

私「もう、半年もないです。」

先輩「んー」

私「続けれそうですか？ 楽しく。」

先輩「頑張る！ 美羽なりに頑張る！ あとは、努力する。」

私「なんかあったら叫んでください。」

先輩「うん、叫びます。」

私「やまびこに向かっで。」

先輩「雄叫び（笑）」

私「あ！ あれは、何なんですか？」

先輩「なにが？」

私「あー、雄叫びというか、パー練のときの。」

先輩はよく、パー練の時に雄叫びのように急に叫んだりすることがあるので、私はとても不思議に

思っていた。だから、この機会に聞いてみようと思う。

先輩「(笑) んー、わからへん。」

私「勝手になんですか？」

先輩「うん、調子が狂ってるだけ、かな。なんか多分、本望？本能？かどっちかわかんけど、やと思うねん。なんか、今、3年の先輩がおらんくなって、あ、今3年じゃなくて去年！のはなしな」

私「74期の」

先輩「そう！74期の先輩がおらんくなって、しつかりと注意する人がおらんくなったんかな。」

美羽が1年の時はほんまに先輩3人ともめっちゃ優しくして。」

私「そうなんですか？」

先輩「先輩、その3人は先輩おったけど定演(3月末にある中高合同の定期演奏会)前に辞めてるから、美羽もその先輩にあつたことはあるっちゃあるけど、ほとんどないんよ。片手で数えられるくらいしか会つたことなく、まじで、多分名前も覚えられえないうつて感じ。ほんとやったら3年の先輩におるはずやけど、おらんかったから…。3人、1年3人。途中からずつと。」

私「えー！」

先輩「だって、2年と3年どっちも辞めたもん。1人ずつしかおらんくて。パークス3人入つてきて、2人やめて、2人上がってきた。つて感じ。」

私「大変…」

先輩「そう、大変やったから、どういうふうに教えればいいんか、っていうのも遅かったし、教えられるのが。76期の2年ズと違って。だから、160のテンポ（メトロノームの速さ）でゴーズトモーション（パークッションの基礎の一つ）やれ」って言われたのも定演の直前やったし。」

私「えー!!」

先輩「一年のな。え？ そんなん言われてないんですけど…」って感じで。」

私「えー！ 一年ですか!?!」

160のテンポでゴーストモーションをすることはテンポが速く難しいのに、それを中1の時にやっていたんで、とてもびっくりした。

先輩「うん、一年。」

私「私、144ですけど。」

先輩「定演？」

私「はい。」

先輩「んーん。え、でもちゃうねん。先輩が、もうコンクールの時に160できてたから、み  
たいな言われて、あー、は、はい」みたいな。定演？ いや、文化祭かな。文化祭で160できてた

って言われて。」

私「すげー」

先輩「すごーとは思うけど、〃できてたから、なに!?!〃 って思っで。で、ずっと定演まで144  
でやってて、〃160? ん?〃 って、〃めっちゃ上がるやん!〃 ってなっで。」

私「二つ。(メトロノームで変えられるテンポ)」

先輩「そう、ずっと悩んでたそこは。〃やばいやばい! やらなあかん!!〃 って思っで、めっちゃ  
頑張った。」

私「H先輩と一緒にやったんですか?」

先輩「うん。でも、あの子は美羽と違っで、美羽は曲のほうは先にできるんやけど基礎はちよつと  
遅いんやんか、できるのが。まあできるっちゃできるけど、遅いんよ。でも、あの子は確かに曲はで  
きるけどまあ、ほとんどTIMPANIしかせーへんやん。」

私「はい。」

先輩「(笑) 慣れてるつてのもあるかもしれへんけど、もし他の楽器でやるつてなつたら多分もう  
ちよつと遅いんやろな。美羽の基礎とおんなじくらい。でも、あの子は基礎は早い。」

私「すごいですよね! あ…どこをどうしよ…わお! すげー、〃吹部に入つて嫌なことはあります  
か〃で3ページくらい…」

先輩「これも嫌なこと?」

私「はい。どうしよ。まあ、置いとこう。合宿でやろう。」

先輩「合宿で？」

私「よし。」

先輩「何の話したっけ？」

私「えっと、なんで入ったんか聞いて、次に吹部に入って嫌なことはないですかって聞いて。」

先輩「あ、そう。それで、3年の先輩たちが抜けて74期が3年になって、2年ズ2人が入ってきて、2年ズ2人は成長早かったけど…。あれ、なんの話してたっけ。あ、そう75期が3年になって76期が2年になって77期が新しく1年生入ってきて、で、美羽はその先輩に教えてもらってたことを、むちゃくちゃ優しくのんびり教えてもらって、けど、でもその去年のあなたたちが3年の先輩に教えてもらってたことを見たら、だいぶ早かったし、美羽たちの時と比べたら、だいぶ厳しかってんやんか。〴〵それでよくついていけるな〴〵って思って、〴〵すごいな〴〵って思って。だから、その時の3年の先輩が怖かってんよ。75期からしたら。」

私「そうだったんですね。」

先輩「だから、怖くて、さすがにこれは優しくしななって思ったんよな。だから、Rちゃん（77期の後輩）には優しく教えてるけど、上達早くてびっくり！してる。」

私「バレエやってるからリズム感覚が」

先輩「な、3連符めっちゃ上手いよな。尊敬してるけど。」

私「3連符みんな上手いです。」

先輩「たしかに。うん、だから、パー練の時も75期が1年の時はちょっとだけふわふわしてて優しかったけど、でも、2年になったら76期が75期よりも速いスピードでやてたからめっちゃびつくりして、怖くなつて3年の先輩たちが。だから、さすがに自分も教える側として、そんな厳しくつていうのが嫌やつたから、美羽、怒られるのがめっちゃ嫌なんよ。」

私「わかります！」

先輩「わかる？怒られるのめっちゃ嫌やから、でも、優しくすぎたらチョロいって思われて、この先輩やつたらなんでも許してくれるから、いけるわ””って思われたくないから、優しくはしてるけど、ちゃんとやりや””みたいな。””これしときや””とは言うようにしてる。””見るでー””みたいな。」

私「はい。どうぞ見てください！」

先輩「(笑) うん。」

私「確かに74期の先輩に比べたら、75期の2人は優しいというか…」

先輩「だいぶのんびりしてるような気もする。のんびりはしてるけど、ちゃんとやるべきことは、伝えている。つもり。かな。でも、それにちゃんと乗っかってきてくれるから嬉しいっっちゃ嬉しい。」

私「よかったです。」

先輩「だから、パー練の時もめっちゃシーンってやるよりも、ちよつと賑やかでやったほうが、楽しいやん。美羽は多分、なんも思ってたなくても沈黙が嫌やなんよ。気まずいから。から、とりあえずちよつと楽しくやろうと思ってる、と思う。かな。」

先輩は自分の経験を活かして色々考えてやってくれているんだなと知って嬉しく思った。

色々な楽器ができる

パーカッションは管楽器と違って一つの曲でも色々な種類の楽器を演奏しなければならぬ。たくさん種類があると得意不得意が出てきてしまう。自分も実際、苦手とする楽器がいくつかある。でも、先輩はどんな楽器もこなしている。だから、どうすればどんな楽器でも上手くできるのかを聞くことにした。

私「次の質問に行きます。パーカスは楽器色々あるじゃないですか。で、得意不得意あるじゃないですか。で、美羽先輩は鍵盤もやるし太鼓系もやるし。」

先輩「TIMPANIだけできへん笑」

私「どうやって、いろんな楽器を上手くやってたんですか？私、鍵盤無理じゃないですか。」  
先輩「多分苦手意識があるだけやと思う。」

私「はい。で、美羽先輩はTIMPANIは置いといて、なんでもやるじゃないですか。で、私たちがなんの楽器をやつてろうが教えてくれるじゃないですか。それって、自分ができなと教えられないじゃないですか。だから、すごいなーって。」

先輩「ありがとう。」

私「どうやってるのかなーって。」

先輩「でも、美羽も人には教えてるけど自分もできてないところはいっぱいあるで。もちろんな。自分もできてなくて人に教えてるんやったら、〃自分でできてないのになんで教えてんの〃 っとなるやん。それを、思われたくないし美羽は、そうずつと思つててん。74期の先輩に。」

私「そうなんですか？」

先輩「そう、ずつと思つてたから、それを思われないようにしようと思つてるけど、自分もちゃんとできてないところもあるけど、〃後輩もちゃんと見てあげないといけないな〃 っと思つて。自分のことも注意しながら見るようにしてる。」

私「すごい。」

そういう思いで今までやっていたなんて知らなかったからなのか、この話を聞いて〃すごい〃と思つてしまった。

先輩「でも、太鼓系でやったのは2年からで、1年の時はほとんど鍵盤で。」

私「じゃあ、私その逆ですね！」

先輩「そう、逆やねん。で、めっちゃ自慢になっちゃうんやけど、1年のときさ、もう1人の相方のほうは、美羽よりもパーカッション入ってて課題曲練習してて、美羽も後からパーカスに入ってる。もう、まじで、何すればいいん!? 曲どうしよ:」ってなってる時に先輩が「一樣美羽ちゃんもしてて」って言われて、「わかりました」って感じでなってる、でも、ピアノやってないから音マジでわからなくて、でも小学生の時に教えてもらってたやつで、〃線の上はミソシレファ、線の間はファラドミ」って教えてもらってる。

私「そうなんですか!？」

先輩「そうやねん。で、それを頼りに楽譜に全部ドレミファソラシド書いてて、そうじゃないとできへんかった。」

私「嫌いな音楽が役に立ちましたね。よかったですね。」

先輩「よかった! それだけ覚えてた笑。で、音楽の休符とか言われても「知らねーよ」みたいな。四分休符と全音符とか全休符とかはわかる。でも、〃何このマーク〃 8部休符とか、16部休符とか。ほんまに意味わからんから曲で覚えるしかなくて、曲でいつ入るのかってのを全部覚えて、合奏する時には「あ、次ここで鳴らすんか」っていうので覚えてた。楽譜は全てドレミファソラシドを聞いて、本当はこういうやり方はあかんと思うねんけど、美羽はメトロノームをまず使わずに、どういう音形なのかっていうのをまず試して叩いてみる。そのあと、メトロノームに合わせて叩くっていうのを何回も繰り返した。で、2年になってまず、音を全て覚える。場所はわかってるから、音をまず

覚える。で、その次に叩く順番を考える。っていうのをやってた。」

私「すごいです。」

今ではそんなこともせず上手に演奏しているから、1年の時にこんなことをしていたなんて想像できず、びっくりしてしまった。

先輩「で、自慢になっちゃうって言う話が、Hさんの方が先に入ってたから、〃課題曲も自由曲もどうせ鍵盤やるんやろな。〃って思ってたんだけど、その時は課題曲だけやねんけど、一樣やつといって言われて、なんかオーディション(?)がY先輩の手で行われて、〃一応録音するね〃って言われて。で、メトロノーム鳴らされて全部叩いてみたいな。〃叩かれへんところもあってもいいけど、とりあえず全部叩いて〃って言われて。その時はグロツケンしか叩いてなくて音間違えがあんまりなかってんな。でも、途中のメチャクチャ速いところは、速く叩かれへんからそこだけはめっちゃやてこずってんだけど、ギリギリ勝ってん!!!」

私「おー!!! (拍手)」

先輩「そうやねん。向こうのほうが早く進んでたから、ずっとこう言う状態(手で実力の差を表してくれた)。でも、1日だけ言い方悪いけど休んでくれた時があって、その時に美羽バリバリ練習してん。美羽の方が後から入ったけど!〃負けたくない!〃っていう気持ちはあったから、めっちゃ頑張ってる子のとこまで追いついてん。で、ちよつと時間あったからちよつと一歩だけ進んでん。一回だけT先生(木管楽器の先生)のレッスンがあって、美羽まだできへんに〃叩いてみて〃って言

われて、2人ともそんなところまでたどりついてないのに叩かされて、「えー」ってなったけど美羽が勝って。よかったーってなって。」

私「すごい！」

元々は楽譜が読めなかったのにオーディションに勝つことができるなんてとてもすごいと思った。

先輩「課題曲な、5人じゃなくて4人しか出られへんから、TIMPANIにまわるとかBDにまわるとかなくてん。3人先輩おるし、2人入ってきたけどどっちかだけ出るってなって、美羽がギリギリ勝ってコンクールは課題曲と自由曲どっちもグロツケンになって、それからHもTIMPANIをやるようになって。あ、自由曲でちよつとTIMPANIやって。で、美羽かもう1人の子どつちかがTIMPANIの後継者にならなあかんくて、どつちかが鍵盤、どつちかがTIMPANI OR 太鼓。で、美羽は自分が練習した成果で鍵盤になってあの子がTIMPANIになって。今はマジで別れてるやん。仲悪いって言うんじゃないくて、得意不得意で楽器割れてるやん。で、今の3年は「ちようどいいなー」って思ってる。雨すごいなー(笑)」

私「すごいですね(笑)あ、中1から課題曲出たんですか!？」

先輩「そう、課題曲と自由曲どっちも。」

私「すごい！」

私は中1のときのコンクールは自由曲しか出なかった。自由曲の練習だけでもとても大変だったから、先輩は自分よりも大変なことを2曲分、しかも中1の時にやっていたなんて、とてもすごいと思っただ。

先輩「しかも、自由曲めっちゃ速いんだよ。」

私「そうなんですか！？なんでしたっけ？」

先輩「『メリー・ウイドウ』セレクション」

私「あー！」

先輩「一番最後が申し訳なんやけど、Y先生本番めっちゃ速い癖あるから、めっちゃ速かったんで、1年やし…え、聞いてほしい。(音源流してくれた)」

私「すっごー！これを中1の3ヶ月間で！？」

先輩「そう！3ヶ月もないもん(笑)入ったの5月やろ。2ヶ月くらい。だから、余裕がなくて一番最後だけやばかった。あのね、自主練は何があっても絶対参加してた。自分から行ってた。自主練いきたい。行かせて」って。やってた。逆に「行きなさい」じゃなくて「いかせて」やった。うん、これでグロッケンといか鍵盤が習得できた。マリンバとグロッケンだけやけど、やってたのは。まあ鍵盤楽器はコンプリートしたってことにしとこ」

私「はい!!」

先輩「で、2年になってリバーダンス(2024年のコンクール自由曲)で、太鼓をやってBDとシンバルを二つ持ちでやってで、板もやってで一番最後TOMもやって。」

私「トライアングルとかドラもやってましたよね。」

先輩「うん。トライアングルは1年、2年で絶対に課題曲と自由曲どっちもやった。」

私「私トライアングルやったことないです。」

先輩「そうなん?」

私「ないです。」自主練かなんかのときにちよつとだけチャラチャラーってやったことはありますけど。」

先輩「演奏ではやったことないん?」

私「多分、あ、定演でやりました。」

先輩「あれはまあ…オプションやし。」

私「すごい…」

先輩「でした。それで鍵盤はいけて、そつからは、鍵盤なんでもいける、って感じ。まあチャイムだけは背がとどかんかったけど(笑)」

先輩は、こんなにもたくさんのお楽器をこなしていて、すごいと思つたし、尊敬している。

#### 4本持ち

4本持ちとは、左右の手に2本ずつマレットを持ち、両手で4本になるようにする持ち方だ。これは持つだけでも難しいのに、先輩は上手くこなしている。私は今年のコンドールの課題曲で4本持ちをすることになった。だから、そんな先輩に上手くやるコツを教えてもらうことにした。

私「なんか、四本持ちとか難しいじゃないですか。私、課題曲でやるじゃないですか。どうしても均等に音を出せないんですね。どうやったら上手くできますか？」

先輩「そんな時は、主に使うのって内側なんやんか。だから、内側を上にして」

私「上にするんですか!？」

先輩「そう。クロスあるやん。こうじゃなくて、こうすんねん(手でやってくれた)。右手で持つ場合やったら内側にあるやつを上にして、外側にあるやつを下にすんねん。そしたら、こうなるわけ。でも、内側の方を叩くってなったら平行になるわけ。だから、一緒に叩く時は外を下にした方が音の均等さは出てくるかな。」

私「へー! やってみます!」

先輩「やってみて。っていうはこないだ知った(笑) 自信満々に言ってるけど、こないだ知った。知ったというか、へ!?! この持ち方やん!」 ってなった。自分で発明した。」

私「すごい！（拍手）」

4本持ちは、できるだけでもすごいのに、その上自分で上手く音を出す方法まであみだすなんて、やっぱりすごいなと思った。

先輩「持ち方はなんでもいいらしいねん、N先生（パーカッションの先生）いわく。けど、外側を下にした方が内側に力入れちゃうから一緒に鳴んねん。頑張って。」

私「はい！」

先輩「叩き方も、もうちょっと考えたらいけるかも。場面によって叩き方を変えてみたり音の大きさも変えてみたりしたら、だいぶ良くなると思う。音楽を流れている部分をマジで体全身で感じてもらって、この今のフルートの場面やったら（フルートの練習の音が聞こえてきた）、タラターン、タラターンみたいなさ並の感じするやん。っていうのでマジで体こうなんねん（実際にやってくれた）。たぶんこれできたらまじで鍵盤上手くなると思う。Rもそうやし、ちょあもそう。マジで頑張って！」

私「はい！頑張ります！」

先輩「っていうのが鍵盤と打楽器でした。TIMPANIだけ叩けないです。でも、シンバルも叩かれへんかったけど叩けるようになってん！」

私「20（笑）」

「20」とは、シンバルのサイズ。このシンバルはよく見るシンバルよりも大きく重いのだ。このシンバルは、先輩が去年の定期演奏会の演奏の時に使っていた楽器でもある。

先輩「20の定演のやつは」ほんまにやめよ」って感じ」

私「重いです・・・そのせいで、筋肉痛になりました。」

先輩「あれは、やってるはじめはマジで筋肉痛になる。定演の時は美羽マジでキツすぎて、あなたより身長低いし」叩けんの？？」みたいな。N先輩（高校の先輩）にも」あれ叩いたん！？」って言われるし。」はい！叩けましたー！」とか言ったけどまじやばい。いけるよ。筋肉ゆうてもないけどな、美羽も。」

私「20のせいで筋肉つきました。」

先輩「美羽、なにしても筋肉つかんからな。ちよつと悩みどころ。重いもの持つのが嫌い。」

今の時期

今年は学年が上がり、はじめての後輩ができた。だから、去年は先輩しかいなかったけど、」先輩」と言われる立場になった。でも、私は」先輩」としてどうしたらいいのか、わからない。だ

から、先輩は私と同じ時期の時、どのようにしていたのか聞いてみることにした。

私「美羽先輩の経験を聞きたいんですけど、中2って上も下もいるじゃないですか。どうやって乗り越える？っていうか…」

先輩「美羽の場合、上も下も横もおったから、ほんまに逃げ場なくてしんどかったけど、どっちかに寄り添うのが大事やと思う。」

私「上か下か。横か。」

先輩「美羽は、ずっと上に寄り添ってた。下も寄り添う時はあったけど、あんまり2年の時は3年の先輩よりは話してないと思うねん。話してるよ。話してるけどあんまり関わるっていうか横で一緒に演奏するっていうことがなかった。でも、リバーダンスの時に、長が横でBDとタンバリン叩いたから、そこで“横に1年生がおるなー”って思ってたけど、あんまり美羽が“ここできてないから、ここやりや”って言える立場じゃないし、立場やねんけど一応もう一個上にもおるわけやから、そこから言った方がちゃんと受け止めるかなーと思ってたからあまり言ってるない。」

私「言ってる、くれて、よかったですのに。」

先輩「な、1年生はそう思ってるんやと思うけど3年からしたら“勝手なこと言わないで”って思う人もおるかもしれへんから美羽は言ってるなかったかな、ずっと。で、美羽は特に鍵盤の叩き方の話をするんやけど、3年になってよりな。あとは一応パークスやからリズムの話も、一応な。パークス

やからリズムの話もするけどTIMPANIはなんも言われへん。(笑) かなって感じ。」

### 人への教え方

次に、どうしたら人にうまく教えられるかを聞いてみることにした。なぜなら、私は教えることが苦手だ。それに対して先輩は自分が普段使っていない楽器であっても、とてもわかりやすく教えてくれるからだ。

私「えっと、教えるのが苦で、どうしたら上手く教えられるかなって。教え方を教えてください!!!」

先輩「教え方を教えてください!?!? ほー。美羽がRちゃんに教えてたのは、基礎で言ったらゴーストモーションやねんけど、メトロノームまず使います。80のテンポでまず鳴らします。でやって、まず持ち方からの説明もあるけど持ち方はまあみんな教えられるから大丈夫として、まず簡単なやつからどんどんやっていく。」

4分とか一番簡単やん。だから、簡単なやつを使って、どんどん難しくしていったら自然とできるようなになると思う。あとは、初めは遊び感覚でやった方が早くなれる気がする。それから、どんどん難しくしていったらいいと思う!」

最後に

私「最後！ 後輩に一言お願いします！」

先輩「一言？ ちょっと考える。あとでもいい？ また、考えとく！」

ということで、後日先輩に取材の続きをLINEで送ってもらった。

先輩「えっと、76&77期の3人へ！ ぱーかすに入ってきてくれてありがとう♡ みんな個性豊かで(?) 大変だけどもちゃくちゃ楽しい！ 来年の姿とかもう想像できちゃうけど仲良く頑張ってるね〜文化祭と定演楽しませよう！」

取材を終えて

こうして、先輩への取材が終わった。今まで、こんなふうに先輩と1対1で話したことがなかったので、とても新鮮だった。今回の取材を通して、今まで知らなかった先輩の魅力を知ることができた気がした。そして、今までたくさんの場面で自分たちのことを考えてやっていくと知って、とても嬉し気持ちになった。また、これからもっと先輩の魅力を知れたらいいと思った。残りの時間も一緒に楽しんで部活をやっていききたいと思う。





## 明るい祖母

聞き手 宮北莉華

### 取材の動機

私が取材する相手は祖母だ。いつも晩御飯を作ってくれたり、韓国アイドルという共通の話題でも盛り上がる。いつも助けてもらっている祖母に私にはとても憧れる。だが、たまに八つ当たりしてしまう。祖母はとても明るく、私がテストの点数が悪かった時や、母に怒られて喧嘩をした時、私が相談した時、そんなときに祖母は私に元気がなかった自分に元気を与えてくれとても感謝している。

印象に残っているエピソードは、私の定期テストの点数が悪く、母にとっても怒られ、落ち込んでいると祖母は良かったところをとて褒めてくれたり、ダメだったところはちゃんと認めて、次の定期テスト頑張ればいいよと落ち込んでいた私にとても普通のことかもしれないが私になかった言葉を与えてくれとても感謝している。また、毎日おいしいご飯を私と母に作ってくれたり、犬の世話までしてくれる。

### 取材依頼の話をして日程が決まるまで

祖母とは毎日のように会っているが、いつも学習面や勉強の話などはあまりしたことがなく、総合

学習の課題「身近な魅力的な人に取材する」の話を持ち出すのはとても緊張した。正直、祖母に取材のことを言うのは恥ずかしかった。祖母に取材のことを話すと、「ほんまにばあばでいいん!？」と何回も聞いてきた。「うん、ばあばでいいよ」というと、私の母に自慢げに話していた。

### 取材概要

日時…2025年8月27日 17時30分～18時

取材した場所…自宅

取材した方…高橋美奈子さん（祖母）

自分との関係…世代は違うが趣味が同じの家族

取材場所に到着してインタビュが始まるまで

祖母と話した結果、取材場所は祖母の家になるかと思っただが、ちょうど私の家に用事があったので私の家ですることになった。その日は私も部活の後で、取材のことを忘れそうになっていた。とても緊張のせいで心臓がバクバクしていた。

緊張と部活後でお腹が空いていたのでアイスを食べってしまった。アイスを食べながら、取材の準備をする。iPadのWordの準備を立ち上げ、本番に備える。やっぱりとても緊張していて、前日に少し考えていた聞くことを忘れてそうになって、少し焦った。

いつも通りの祖母

祖母は私が家に帰る少し前から、私の家に来ていた。その日は祖母も仕事はなく、太極拳という習い事が終わってから私の家に用事を済ませに来てくれた。なので、服はいつも同じで見慣れた服装だった。

毎日のように会ってたくさんのことを話しているが祖母と2人きりでちゃんと話すのは久しぶりな気がして本当に緊張した。事前に渡せなかった「授業担当教員からの添え状」と、1学期に書いた取材の動機のエピソードなどが書いてあるレポートを渡して読んでもらおうと、祖母は自分で「ばあばってこないいい人なん！客観的に見たらめっちゃいい人やん！」と自分で言っていた。

その後で今回の課題レポートについて説明して「録音していい？」と言うと、祖母はまだ録音してないのに「もう録音してるん？」と興味があるように聞いていた。「まだしてない」と言う。「あーよかった」とほっとしたような声が聞こえた。

保育園で働いていた祖母

インタビューをさっそく始めた。私はまず、祖母がなぜこんなに明るいかと考えた時に、昔、保育園で働いていた経験が関わっていると思った。祖母が働いていた頃は私はまだ、幼くてなにも知らなかった。ただ、過去の話をつまにしたときには給食の先生だったよと何回も聞いていた。でもやっぱり仕事していた時私は幼かったり、まだ産まれていなかったかの、なにも仕事をしている時の様

子などは知らなかった。

私「ばあばがなんでそんなに明るいのかなあと思ったのは、あの保育園の仕事をしてたのが関わってるかなと思ったから。なぜ保育園の仕事をしたんですか？」

祖母「まずあの、給食の先生して、これはもうばあばにとって天職やなって思ったのがあって、もともと子どもらと関わられて、楽しい仕事で毎日定年まで過ごしてました。縁やな。縁があつて保育園で仕事した。もともと子供好きやし、体動かすのも好きやし、食べるのも好きやし。それは莉華ちゃんにもあるな。」

大切にしていたこと

私は今回のテーマである魅力について深く掘り下げるために、祖母の魅力の背景には仕事に関わっていると聞いたので聞いてみることにした。

私「将来、莉華は人と関わる仕事をしたくなって思ってた、人と関わることで大切にしていたことってなに？」

祖母「やっぱり縁やな。縁つてやっぱり大事やねん。もう人つてやっぱり色々な人と関わるやん。そやけど何人も関わるけどほんまに関わる人つて数えるほどやねん。でやっぱり自分が好きやつて思

う人は相手も好意を持ってきてくれるはずやねん。自分が嫌やなって思う人は相手もいややなって思っていると、相手からたくさんいる人の中で自分と合う人と探したらいいと思うで。

まあやっぱり自分から行かなあかん。ようさん人がおる中で色んな人と出会って、いろんな考えを持った人プラスなるな。あと、あーゆー子になりたいって思った人に話しかけて接して仲良くなったこともあったな。嫌やなって思う人はあんま関わらんかったかな。」

私「え、それってダメじゃないん？」（笑）」

祖母「ダメなん？（笑）でも無理に関わる必要ないやん？ やから自分に合う人見つけたらいいよ。でもやっぱ縁やな。まだ分かれへんかもしれんけど。」

助けてくれる理由

その後、私は祖母に過去の話をしたりした。そしていつも私は祖母の手をかりてとても感謝している。私はいつも祖母が私や母を助けてくれる理由を聞いてみた。

私「いつもままとか、まるちゃんの世話してくれたり、莉華の迎え来てくれたり、なんでいつも助けてくれるんですか？」

祖母「子供三人育ててきたけど、あのやっぱり働いていたからほったらかしやって。やっぱり誰かの助けがないと働かれへんかった。今と状況は違うけど。やから助けてあげなあかん。ってほんで

できることはやったあげよーって。なにができるんかなーって思ったら、ばあばは給食のやつしてたからあの、食べることに。働いてから天職かやなって思った（笑笑）甘やかすからままは一個もしいひんけどやっぱり難しい。でもやっぱりばあばが身体動くうちは助けたり。見てたからな保育士さんを。やっぱりできることはやってあげたいなって思ったからかな。」

私「うん。じゃあ最後！」

祖母「やっとかやれやれ」

私「これからも大切にしていきたいことはなんですか？」

祖母「健康なやな！健康！まず身体も健康心も健康でそれが1番やな。倒れたり。」

私「ばあば倒れへんやろ（笑笑笑）」

祖母「わからへんやん。やからままは毎日生存確認の電話くれるけど。こけてるかもしれんし熱射病なるかもしれへんし。まず健康で、元気でおりたいな。それが目標。限りがあるからな。毎日一生懸命楽しくしてたら悔いはないわ（笑笑）」

私「いいと思うよ（笑笑）」

祖母「参考になりました？（笑笑）」

私「うん。よしいいよ。ありがとう」

最後ににやにやと笑う祖母の笑顔はとても優しく明るく感じられた。そして少し笑ったりしたせい

か最初の緊張は最後にはなくなり取材は終了した。

### 取材を終えて

取材をしてみても祖母の魅力は明るく元気をくれることだと改めて思った。いつも身近にいてくれる元気をくれる祖母はやっぱり取材中にもとても元気をもらうことができた。いつも家族を助けてくれていることに改めて感謝してこれからも助けてもらおうと思いましたが、でもやっもらうばかりではなく私もいつか恩返しができるようになるうと思えました。私も誰かを助けて明るくポジティブに生きたいと思いました。



あったかい心の持ち主

聞き手 野田心

### 取材動機

私が魅力を感じる人は、母のいとこの看護師の高杉凜さん（以下りんちゃん）だ。私が小さい時から可愛がってくれて、たくさん遊んでもらって、一人っ子の私にとってはお姉ちゃんのような存在だ。いつも会いに行ったらおすすめのお菓子をくれて、とても優しく面白い人だ。私の中ではいつも穏やかでほわほわした人のイメージがある。そんなりんちゃんに取材をしようと考えたのは、なぜ看護師になろうと思ったのか、他の仕事についてみたいと思ったことはなかったのかなどのことを聞いてみたかったからだ。

この間私が所属する吹奏楽部の定期演奏会があったのだが、それにも仕事が忙しいにも関わらず、大切な有給を使って見に来てくれた。私はステージに立っている側だったから、客席の様子は何も知らなかったのだが、りんちゃんと一緒に座って見てくれていた母からその時の様子を聞くと、りんちゃんは始まった瞬間から泣いていたらしい。しかも定期演奏会が終わるまで。お母さんはそのことにすごく笑っていたが、私はそれほど人に感動を与えられるような演奏ができてよかったなと思ひ安心した。

話は逸れたが、りんちゃんはそれだけ感受性がある人だなとも感じられた。

また、りんちゃんは私だけでなく誰にでも優しく、他の人が困っていたら自分のことを後にしてでも他の人を優先する人なのだ。

私が体育の授業でけがをしてお母さんが病院に行こうか迷っていたときりんちゃんにLINEをして聞いたら、「実際に見ていないからの確なことは言えないけれど、念の為の確認としていくのもありだと思うよ。」とすぐに返信をくれた。ちなみにそのとき私は右手中指を骨折していた。わからないことをいい加減に答えたりせず、わからないことは正直にわからないということを前置きで置いてから自分の意見を言ってくれるところに私は尊敬した。

また別のときには「少し前に体調を崩していたって聞いたけど今どう？大丈夫？」と聞いてくれていて、私が体調不良で学校を休んだときには「LINEで「今日学校休んだって聞いたけど大丈夫？部活忙しいと思うけど無理せず頑張ってね！」と送ってきてくれていた。すごく嬉しかったし、優しい人だと思った。

私はりんちゃんになぜ看護師になろうと思ったのか、なぜそんなにみんなに対して優しいのか、お仕事をすることでどんなことを意識しているのかを聞いて見たいと思う。なぜなら、医療系の仕事ならお医者さんや薬剤師さんなどの仕事もあるはずなのに、その中でなぜ「看護師」という仕事を選んだのか気になったし、親戚全員年上・年下関係なく誰にでも優しくできるところに何かわけがあるのか気になったからだ。

取材をする前二人で集合したのが昼ご飯の時間だったので一緒にご飯を食べた。  
私はその時から心臓がバクバクしていて緊張感しかなかった。

#### 取材の連絡

私が携帯を持ち始めた時からりんちゃんとはLINEが繋がっていたので、取材の内容を大まかに伝えて、日程や時間の調整をした。

#### 取材概要

日時…2025年8月12日13…00～14…00

場所…ジャンカラ T店

取材した方…O病院 看護師 高杉凛さん

自分との関係…母のいところ

#### 会った瞬間

私(りんちゃんどこにおるんやろう…私が迷ったんかな…)心配していたその時!

彼女「わあ!!!」

私「何！？ 誰！？ びっくりした…ってあれ、りんちゃんやん！どこおったん？」

彼女「びっくりした？ 笑笑」

私「私がビビりなん知っててやってるやろ！ 笑」

彼女「そんなことないし！ 笑笑 違う改札におった！」

私「そうなん！！ 探しに行けばよかった…ごめん。」

彼女「全然いいよ！ こっちこそびっくりさせてごめん！ 笑」

私「全然！！ 楽しかったから大丈夫！！」

私「どこで取材しよう？」

彼女「あれは？ カラオケは？」

私「なんで？ 笑笑」

彼女「だってもし取材するんやったら静かなところの方がいいやん。じゃあカラオケボックスやったら静かに取材できるかなと思って！」

私「確かに！！ それいいなあ！ じゃあカラオケ予約する！」

彼女「そんなんできんの？ よろしくー！」

そのあと無事にカラオケを予約し、一緒に昼ごはんを食べいよいよ取材をする時間になった。さっきまで楽しかったはずが、急に緊張してきてしまった。でも知らない人ではないため少しだけリラッ

クスして取材を始めた。

## 取材内容

今の仕事に就いた理由

私「まずなぜ看護師になろうと思ったん？」

彼女「看護師になろうと思ったのは昔おばあちゃん子でおばあちゃんと一緒に住んでいて。お母さんがお仕事に行っているから幼稚園の時に帰ってきたらおうちにはおばあちゃんが出迎えてくれる感じで大好きなおばあちゃん、こちゃん（私）からいう大きなおばあちゃんが、心臓悪いからよく入院していたのね。で、そこにお見舞いに行くやんか。で、そこで看護師さんっていうのを認識したのかな…。お見舞いに行ったのが幼稚園の時で、でもそこで看護師になりたいと思ったんじゃなくて入院してるおばあちゃんのご飯を食べてる姿とかを見てなんとなく、切なかったのを覚えてて…。

そこに看護師さんが来て、なんかあーだこーだお話しているのを見てこの人に今お世話になってるんやなあって漠然と思ってる…。後になんか小学校の時お花屋さんになりたいとかお菓子屋さんになりたいっていう小さな夢が文集とか書くときにも書いてたと思うから、実際中学校の時に進学する時に看護師さんに一番近道の衛生看護科っていうところを目指したのが中学校の時なのかな…。」

私「他の仕事に就きたいと思ったことはある？」

彼女「他の仕事はね、就きたいっていうか高校生の時にケンタッキーでバイトしたり、お友達のかまぼこ屋さんでバイトしたりで高校卒業して看護の専門学校に行くのに京都に出てて。その時も飲食店とかでもバイトしたし、小さい病院（？）いわゆる風邪引いたらかかるようなところ、まあそこでもバイトをしたりはしてた！ただ他の仕事に就きたいってことはまず思ったことはないかな！」

私「医療系の仕事って看護師の他にもお医者さんやったり薬剤師やったり色々あると思うけどなんでもその中でも看護師っていう仕事を選んだん？」

彼女「お医者さんになる程頭良くなかったのは事実だね。笑でもお医者さんになりたいと思ったんじゃないくて、言ってみたら患者さんの一番近くに居るのは看護師かなと思って。その手助けっていうかお世話というかができるかなと思ったのは、看護師いう職業やったからかな…それと、近くにその衛生看護科っていうのがあったのが大きいね。」

今働いている仕事

私「今はどういう仕事、まあ看護師は看護師だけど手術とかいろいろあると思うねんけどどんな仕事をしてるん？」

彼女「今は総合病院、大きな病院の手術室にいて、先生のオベの助手を主にしてるかな！具体的には手術室で、主治医の先生がいわゆるメスとか切るとかの仕事を先生としてるわ。あとは入院してる患者さんの全般のことを世話するのもちろんトイレとか手洗いとかっていう人の全般をサポート

することもしてるかな！手術が上手くいくようにサポートすることもあって、どっちもしてる感じ。基本的に若い看護師さんは手術の時には機械を渡すことのほうが多いから、そこそこ年齢いってると外のこととしてることのほうが多いけど、手術つてあれ取つてとかあれ出してとかで言われたら手伝ったりもしてる。」

私「入院してる人たちからナースコールとかそういうのがあつたりすると思うけど部屋つていうか呼び出しが同時になつた時とかつてどっちを優先して行くとかあるん？」

彼女「そういうのは重症度が高いっていうか、まあ用件によるけどトイレに行きたいとか、点滴が終わったとか、なんかとつて欲しいとか、その患者さんの訴えによるからそこを優先するんじゃないかな。用件を優先する、用件がまあ今だから優先度を考えて多分選択してるとどっちかつて言うとはら、どっちも急ぐパターンがあるからトイレでも待たせたらもれちゃうかもしれないし。点滴も終わつたらだめなんだから、空気が入るからどうしてもダメなときは自分じゃなくて人をお願いして他の看護師さんをお願いしてるかな。」

彼女の心の温かさ

私「めっちゃ話変わるけど、親戚同士で集まることつてなかなかコロナになつてからそんなになくなつたやん。で、その中でもたまになんか集まる機会つていうか、そんない機会じゃないけどその時にりんちゃんつてずっと誰にでも優しい感じがするねん。それはなんか意識してることとかある

ん？」

彼女「そんな風に映ってる？ ありがとう。でもみんな優しいと思うで。」

私「いやうん、そうやねんけど、みんな優しいんやけどりんちゃんはなんか違うっていうか……私にとつてりんちゃんってお姉ちゃんみたいな存在やねんな。やっぱ一人っ子やし。お母さんは遠くて年が離れてるやん。やっぱりなんか遠い感じがあるけど、私がちっちゃい頃からずっと関わってもらってるっていうか、遊んでもらったりとか色々してもらってる部分があるから、自分のお姉ちゃんの存在やったから特別な感じがしてるかもしれん。」

彼女「なるほどね。純粹にかわいいからじゃない？ ここちゃんが。あたしからしたら、誰かと比べた事はないけど誰かと比べたときにやっぱりともちゃん（私の母）の子供だからかわいっていうのがあるねんたぶん。笑 純粹に可愛いから可愛がるよね。優しいっていうのはちょっとわかんないけど意地悪をする必要ないし、だから純粹に可愛いから可愛がってるだけでって感じやと思う。」

私「親戚っていうとき、私の周りって大人が多くて、私と年齢が近い人ってなかなかおらんから苦手な人っていうか、年上やからこそ喋りにくい人がやっぱりおるんよ。親戚じゃなくて性格が苦手な人って多分おると思うんだけど、その人に私は私自身は拒否反応を出してしまうっていうか……と仲良くしてられるタイプじゃなくて。しかもその人とか自分より上の人になったら特にそういうところがあるねん。りんちゃんって意外とグイグイ行；；くやんか。親戚に対してっていうか……笑」

彼女「親戚の中でも大きいおじいちゃんおばあちゃんから言うのと姪っ子とかになるやんか。それで

も一番年下やねんで。だから堺じいちゃんばあちゃん（私の祖母・祖父）とかでも多分純粹にかわいがつてくれてると思うんよ。みんなこちゃんにすると同じように何言っても平気じゃないけど向こうも好意的に来てくれるから別に普通に接しているだけやと思う。こちゃん、人間だから合う合わないはあると思うよ。」

魅力的に思ったわけ

彼女「逆にさ、こちゃんはりんちゃんのどういうところを魅力的だなと思ってくれたのかなと思つてたんやけどどうなん？」

私「なんか色々自分やったり、私の身内っていうか家族が何かあつた時に一番先に相談するの人っていうのもあるし、そういうところで私の中でお母さんとかお父さんの次に頼りがいがある人やと思うからかなあ。自分の家族より先、親戚の中で一番頼りがいがあるのはすごい、私の中では魅力的っていうか惹かれたところやと思う。」

私が目指してるのは学校の先生やから、りんちゃんと全然職業は違うけど仕事を見てて仕事をする姿がすごいっていうか、やっぱり医療系の仕事やからこそその責任感があつたりというのは当たり前のことかもしれないへんねんけど、そういうので使命感というものを持つてしっかり仕事してるところが魅力的なところなんかなって思つたから。」

彼女「そんな風に見てもらえてるのはすごく嬉しい！ さっきの質問にあつたじゃん、ほかの仕事

をしたかったことある？ みたいな。そこにはいろんな仕事があつて、それはそれで大事なことだと思ふんだけど、自分に合うのはやっぱり看護師なのかなって思うからずっと続けてこれたんだと思ふ。今年で（看護師になつてから）31年目で、出産育児とかもあるから休んでるのもあるけど、でも大まかに数えてもそこだけをしてきたかな。嫌じゃないんだよね、仕事つて。やっぱり楽しい！」

### 仕事現場の事情

私「やっぱなんかよくドラマとかでもあると思うけど、医療ミスとかそういうのって自分がミスした時に先輩に多分怒られるだけで済まへんと思うんだけど、それでなんかやめたと思って思つたりしたことはある？」

彼女「確かにミスがゼロではないねん。でも患者さんの命に関わるようなミスは今までしてきてないかな。でも当然先輩に怒られるよ、若手の時は先輩に怒られることはあるし、でもそれつて怒られるじゃなくてしたらダメなことを注意されるような感じで。そういう関係で入れるからこそいいチームなのね。」

だから一人で何かを結局はしてることもあるんだけど、最終的には責任はチームになっちゃうから。あと同、じことを繰り返してたらミスがずっとミスのままやけど、次同じことせえへんかったらミスじゃない部分もあつて怒られていやになることはゼロではないけど、でも怒られるつていうか注意されることは当然自分が悪かつたこともあるし私が悪くないのにつていう時だったり…何が悪かつ

たんだらうという自己分析をするね。反省会というか、そこで次に繋がる何かを見つけてるかな。次同じことがあったときに同じことをしないためにはどうしたらいいのかっていうのは考える。だから辞めたいっていうのは今まで思ったかな？今夜勤してるから体しんどいはあるけど、やめたいなっていうのはないかな。仕事として今手術室で働いてて、もし手術がダメになったら病棟行けばいいとか老人ホーム施設に行けばいいとかっていうつぶしが利くっていうところがあつて。看護師としても働く場所ついているんなところあるから看護師を辞めたいって思ったことはないなあ。」

## 別れる時

私「もうこんな時間！？ほんま長い時間とつてくれてありがとう。やつぱりんちゃんに取材できてよかったわ。ありがとう。写真撮らなあかんねんけど撮つてもいい？」

彼女「こつちこそありがとう。こちちゃんがそんなこと思ってるって知らんかったし、いっぱいいろんな話できてよかった。なかなか話す機会ないやん。しかも二人きりでつて。すごい楽しかったしほんまにありがとう。」

取材することを心配して、追っかけて天王寺まで来ていた母と父に「取材終わった！」と連絡すると、りんちゃんが「もこちゃん（母）としようちゃん（父）にお礼だけ言いたいから一緒に行くわー！」とついてきてくれた。

少し喋ったあと写真だけ撮らせてもらって解散した。  
りんちゃん、本当にありがとう！！





## 個性的な人の裏には

聞き手 長尾寧々

### 取材の動機

今回私が取材相手に選んだのは、私の祖父である田神浩至さんだ。祖父は個性的な人だと私は思う。祖父は退職する2年前まで、東京の会社で働き、社長という肩書きを持っていた。色々な国や地方を回って、たくさんの人と接待していたことを私は覚えていて。たくさんの人と関係が生まれて、高くて美味しいものが祖父の家に送られてくる。それをお裾分けしてもらって美味しく私も食べさせてもらっている。

私知っている祖父は、決まった時間に起きて、ご飯を食べて、本や新聞を読んで、運動して、寝るといふ、私にとっては少し変わった人だ。祖父は毎日このような生活をしていて「飽きないのかな」と思っている。

しかし私は祖父のことについて浅くしか知らない。知っていることは何かと考えると、何も知らないということがわかる。祖父が何をしていたのか、どんな人生を歩んできたのか、苦労したことや後悔したこと、嬉しかったことは何かなど、知りたいことは小さい頃から疑問に思うことがたくさんあった。だからこの機会に祖父がどんな人生を歩んできたのか、これから何をしたいか、小さい頃からの疑問を解決していこうと思う。

取材の日程が決まるまで

部活の引退試合が終わり、1週間ほどの休みがあったので祖父母の家に泊まりに行った。祖父と引退試合はどうだったのか、最近何をしているのかなどたくさんのお話をして過ごした。

取材をする前日に祖父に「身近な魅力的な人にインタビュする」という課題があるためインタビュらせて欲しいと頼むと「ええよ」と言う返事もらった。あまり祖父とは真面目な話をしたことがなかったので、楽しみと緊張があった。私は次の日にどんな質問をするかメモをとって準備した。

### 取材概要

日時…2025年8月13日水曜日 12時54分～13時10分

場所…祖父の家のリビング

取材した方…田神浩至さん

自分との関係…母方の祖父

### 大学を選んだ理由

インタビュを始めた。私はまず、初めになぜ東京の大学に入ったのか、大学生活はどうだったのかという質問をした。祖父は元々大阪に住んでいたのに、東京の大学に行ったのか気になっていた。

私「初めていい？ じゃあまず、なんで水産大学を受験したん？」

祖父「もともと第一志望は水産大学ではなかったんよ。第一志望は防衛大学やってん。」

私「え、自衛隊になりたかったん？」

祖父「合格してオリエンテーションに行ってる。他の子は防衛大学校に行って何をするかっていう考えがしっかりあった。ある子は『国を守るとは、こういうことなんや』いうことを、言うわけだよ。こんなことを言う人がおるんか？！ っと思って、うちのめされた。笑わかりやすく言うと、こんな人がここにいて、こんなやつぱり自分の考えは甘いなと感じて、色々悩んだ。結果もう1回他の学校考えてみようかと言うことで」

私「へー」

祖父「18歳の話だから、結構そういう意味では、うちのめされたっていうのは、未だに、やっぱり引きずっていたかな。もしその秋に、そんな人と会わずに、そのまま防衛大に行っていたら、人生が全く違うものになっていた可能性はあるやろ。まあ72年間の人生から見たら、一番大きなターニングポイントかな。」

私「自衛隊じゃなかったら、船についての勉強がしたかったん？」

祖父「まあ、その流れの中で、なんか手につけるといいうことも考えて、資格として得られやすい、

水産大学に入ると、船を運転することができるといって国家資格を得られる単位が取得できて。そこから試験に合格したら資格が取れる大学やった。まあ、それが働く時に有利になるんじゃないかと言うふうに考えて水産大学に入った。」

私「大学生活はどうやった？」

祖父「学校大学の中に学生寮があつて、そこに1年生から入つた。部屋に1部屋8人でしたから、まあ結構うるさい先輩もいましたけども、楽しく勉強と部活でラグビーをしながら、過ごしました。」

私「大学卒業した後はすぐに就職した？」

祖父「もう1年間、専攻科っていう学科があつて。船の免許取るために1年かけて、まあそれで5年行つた。でも、最終的に自衛隊にちゃんと就職したら妻（祖母）とは会つてなかつたし、寧々（私）のおじいちゃんになることもなかつたかな。」

この話を聞くと人生何が起きるか分からないし、出会う人によつて人生が変わっていくということとを思うと、人生はとてもおもしろいと感じた。おじいちゃんももし防衛大学に進んでいたら、いま私はいないかもしれない。そして、これからの私の将来に繋がりそうな話を聞くことができた。自分の好きなことや自分にあつた場所を選ぶことが大切だと思つた。

社会人になって

ずっと気になっていたことである、どんな人生を歩んできたか、そして苦勞や喜びは何かなどを深く聞いてみた。祖父は苦勞や喜びなど様々な出来事があったはずなのに、一切顔に感情が出ていないと感じる。だからこの機会にどんなことがあったのか知りたい。

私「5年間勉強したあとどこに就職したん？」

祖父「当時『200カイリ問題』があつて、なかなか日本人の船を動かすということができなかつた。そういう仕事に日本人を雇うというのがなかなか難しい。そういう就職状況になつた。でもあ、そつちの方はだから諦めて、どっか働くところはないかということと株式会社Nっていう会社に入つて、水産物を輸入して売るといふ仕事を始めました。」

私「社会1年目の一番の思い出はある？」

祖父「大学で勉強したことは仕事には役に立たないかなというのが一番感じたことでしたかね。」

私「他にやりたい仕事はなかつた？」

祖父「えー、やりたかつたことか。まあとりあえず就職した会社で一生懸命頑張つた。まあ一つ、こう特徴的とか思い出して話できるのは、就職した直後は、その会社はあんまり経営状況が良くなくて、ひよつとしたら潰れるんじゃないかといふふうな会社だつた。まあそんな中で結構たくさ

んの人が辞めていたんだね。そうすると、辞めた人の仕事が、どんどんどんどん私の方へ来て、それを全部やらなアカんくなっちゃった。笑 そうしているうちに、まあやめるタイミングがなくて、とりあえず、今ある目の前の仕事を一生懸命やっていたら46年も働いた。」

私「その後社長になって、統括したけど、これまでの苦労とか喜びとかは何？」

祖父「まあ、当然仕事の中でいろんな人と話をする中で、自分と気が合う人もおるし、合わない人も当然おるよね。だから、そういうことで、いろいろ付き合っていく中で、まあまあ、世の中にはいろんな人がおるなということを知って、そういう経験できたということ。

あと、意外と人間の直感とは、別に色々話して、付き合っていくとその人が最初自分が思った人と違ってしまうことがあった。もうちょっとええ人だったんじゃないか、というふうに気づいて、付き合っていくけるなというふうに思っていたことは、結構あって。それは良かったことかな。」

私「逆に苦労したことは？」

祖父「まあ人と人とのつながりっていうか、そういうのたくさん見つけられたというのが、やっぱり、一番の苦労かな。余談にはなるけど私は結構会社のお金を使ったかな。10年、20年後に結果が出るような投資とかしたわ。笑」

祖父は誰とでもうまくいけるような人だと思っていたので意外だった。私は人見知りで人と仲良くなるのに時間がかかる方だ。祖父ですら、誰とでもうまくいくわけではないと知ったから、全てうま

くいこうとせず自分のペースで関係を築いていこうと思った。

これからの人生

今まで苦労してきた祖父はこれからの人生はどんな生活を過ごしていきたいか聞く。私は「これからまた働く」「何かに挑戦したい」という祖父はあまり想像できず、多分「ゆつくり本を読む」「運動を欠かさずする」などというのだろうと予想した。

私「じゃあ最後にこれからのじいちゃんの人生で何をしていきたいか。」

祖父「これからは、『これからの人生どうしよう』ということ考えていきたいなというふうに思っております。でもやっぱり健康を損なうと、やっぱり家族や周りの人に迷惑をおかけしてしまうので、健康だけは、維持しようっていうことで。笑 あとはボケたらダメなので、本を一生懸命読んで頭を使っていこうと思います。心身ともに健康を保ちたいと言うふうに考えております。」

私「相手してくれてありがとう」

祖父「こんなんでもいいんか？最後の質問をばあちゃんにもしてみてや」

祖母「いややわ。私そんな質問答えたくないわ！」

祖父と祖母の仲が良い会話で終わった。

やっぱり本を読んで運動するのかと思った。祖父らしくてよかったとほっこりしてしまった。いつでも健康に生きてほしいと思った。そしていつか祖父に今までの感謝を伝えられたらいいなと思う。

取材を終えて

私の知っている祖父もいたが、私の知らない祖父もいた。普段日常では喋ることのない会話で、こちない感じだったけど、祖父に対する印象が変わった。正直私は、ただただ特に考えず仕事をして毎日を過ごしていると思っていたけど、祖父にも苦手なことや、考えることがたくさんあると知れてなぜか嬉しかった。

また祖父の話を聞いて、何も知らないのに人の印象をつけるのは良くないと思った。人それぞれ感じることを考えることが違うということがわかったので、これからも身近にいる人を知って、人それぞれ価値観や考え方を尊重した関係を作りたい。

## 憧れの人への取材

聞き手 田中陽翔

### 取材の動機

「お父さんのいところ、甲子園に出てるよ」

以前、父からこう聞いていた。

「甲子園」――野球をしている中高生にとっては、特別な場所、「聖地」。

自分も中学で野球をしているが、身内にそんな選手がいると耳にして、少し憧れを抱いていた。

今回は取材が授業のテーマということで、頭に浮かんだのが、その父のいところ。今まで会ったことはなかったが、以前から、野球の経験談も含めていろいろと聞いてみたいと思っていたので、ちょうど良い機会。取材をお願いすることにした。

お名前は、山本千尋さん。現在N社に勤務しておられ、お住まいは東京都。父より2歳下で、高校は同じ大阪府立M高校のご出身。甲子園には198X年春の選抜大会に出場。

当時の高校野球は、大阪のPL学園が圧倒的な強さを誇っていて、特に桑田さん、清原さんの時代は、春夏5期連続甲子園出場で、まさに無双だったとのこと。お二人の名前は、当然野球をしている自分も知っていて、レジェンド。

そのレジェンド二人がいたPL学園と、千尋さんの高校は、大阪大会決勝戦で対戦。父の話では、やはり勝つことはできなかったが、スコアは0対1で惜敗。失点もキャッチャーのパスボールによるもので、被安打は3本のみ。安打数では4本で上回っていて、そのうちの1本が、千尋さんが桑田投手から打ったもの。

続く近畿大会では、1回しか勝てなかったが、このPL学園との決勝戦が評価されて、甲子園出場に至ったとのこと。

千尋さんの1学年下には、優秀なピッチャーと強打の4番バッターがいたとのことだが、公立高校で選手を集めている訳でもないのに、どうして大阪の激戦を勝ち抜いて甲子園に出場することができたのか。今回、その「人となり」とあわせて知りたいことだ。

取材依頼のLINEを送って日程が決まるまで

初対面のため、取材については、父からLINEで連絡をしてもらった。父と千尋さんが年賀状をやり取りする中で、自分が野球少年であるのは、ご存じいただいていたようだ。今回取材相手に選んだ動機のレポートと、「授業担当教員からの添え状」も含めて父に送ってもらうと、その日にLINEが

返ってきた。取材自体はOK。父にLINEを見せてもらおうと、「協力させていただきます」という非常に丁寧な内容であった。ただ、今従事しているプロジェクトの都合で、時間が確保できないため、リモートでも可能かどうかということであった。

東京で直接お会いして取材できないのは残念だったが、お話はぜひ聞きたいと思ったので、リモートでの可否を学校に確認することとした。登校時、総合学習の先生に確認すると「可」というお返事をいただいたので、改めて父に連絡してもらい、リモートでの日程が決まった。

#### 取材概要

日時…2025年8月8日 21時30分～22時10分

場所…双方の自宅（ZOOMを利用したオンライン）

取材した方…N株式会社 山本千尋さん

自分との関係…父の従弟（千尋さんの妹さんは、清教学園高等学校の出身）

当日インタビューが始まるまで

先方のお仕事の都合も考慮して、時間は21時30分を設定した。ZOOMの制約上、1回での接続は40分以内であるため、インタビューも同じ時間とした。

当日はスケジュールを前倒しし、その日の予定をすべて終え、インタビューに備えた。

父にも同席してもらったが、やはり初めてお会いするため少し緊張した。ただ、野球の話をいろいろと聞くことができるので、待ち遠しい気持ちの方がまさっていた。

若い、そして、とても優しい 千尋さん

予定の2分程前にZOOMを立ち上げ待機していると、千尋さんもすぐに参加。インタビューは、ほぼ予定通り21時30分に始まった。画面越しではあったが、父よりかなり若い印象。とても2歳下とは思えなかった。上着は白地にグレー系のチェック柄で、落ち着いた装いだった。

父との挨拶の後、自分の方から自己紹介をした際に、「今日は緊張せずに、何でも聞いてね」と優しいお気遣いの言葉をいただいた。人柄を感じ取ることができ、少し緊張がほぐれた。

その後、父から今回の取材の趣旨と、お聞きしたことはレポートとして学校に公開される旨を説明すると、こころよく了承いただいた。

その中で、千尋さんから、取組みの意義を非常に評価するお言葉があった。「こういうインタビューで、人から話を聞くことは、これから社会人になるに当たってとても必要なスキルですよね。」

責任が重いお仕事

いよいよ、自分の方からインタビューの開始。まず、今のお仕事について尋ねた。

父から、大体のことは聞いていたが、お忙しいなか貴重なお時間を取っていただいたので、自分自身でも相手のお立場をしっかりと把握しておいた方が良いと思ったからだ。

私「今日はお忙しいところ、ありがとうございます。野球のことを中心にいろいろとお伺いしたいと思いますが、よろしくお願いします。まず、今のお仕事について教えていただけないでしょうか。」

千尋さん「会社はN社で、以前は社内のネットワーク等のシステム開発に従事していたけど、今は来年1月から開始する料金システムに携わっています。かなり難航しているので、今回直接会えずにすみません。」

N社といえ、自分が今使っている携帯の会社。大きな会社と聞いていて、システムであれば影響が大きいので、責任も重いだろうなと感じた。

#### アメリカでの経験

同じく父から、アメリカでしばらく勤めておられたと聞いていたので、その時の経験について伺った。合わせて、これから自分も必要となる英語について、どう習得なさったのかお聞きした。

私「父からアメリカで勤めておられたと聞いていますが、その時のお話をお願いできればと思います。」

千尋さん「もともと2001年に会社の短期留学制度で、3カ月の予定で西海岸のカリフォルニア大学バークレー校に行ってたんですけども、1カ月後に同時多発テロがあったので。西海岸はそれほど大きな混乱はなかったのですが、会社の決定で退寮して帰国しました。その後、10年後の2011年に会社のカリフォルニア支店に配属されて、5年間シリコンバレーを中心に連携先を見つける仕事をしてきて、今所属している所に戻ってきました。」

私「英語を習得するのに、ご苦労なさいましたか。もし、アドバイスしていただけることがありますしたら。」

千尋さん「英語はやっている方が、自分の選択肢がすごく広がるというのはあるよね。ただ、日本語の能力もしっかりつけていかないと英語も伸びないし。」

あと海外に行ったらよくわかると思うんですけども、教室に日本人一人しかいないという形で日本代表になるんですよ。日本って、例えば政治どうなっているのとか、歴史どうなっているのとか、必ず聞かれるので、英語のスキルだけではなく、日本の歴史だとか、社会の知識だとかを身に付けていくとすごく楽しいし、活躍できると思います。海外志向でも日本のことはしっかり勉強していた方が可能性絶対広がるよ。自分も行く前に日本のことをもっと勉強しておけばよかったなと思った。」

「英語を伸ばすためには、日本語の能力もしっかりつけないといけない」「英語のスキルだけではなく、日本の社会についての知識も必要」という指摘は、これから勉強するに当たって大変参考になった。

野球を始めたきっかけ

ここから、自分が本題にしていた野球関連の質問を始めることにした。

まずは、始めたきっかけ。

私「ありがとうございます。次に野球のテーマに移らせていただいで、まず、始められたのはいつからで、きっかけを教えてくださいませんか。」

千尋さん「始めたのはたぶん6歳とか7歳とか、小学校入学前後。あの当時は今と違ってサッカーとかいろんなスポーツがなくて、やれるスポーツが野球に限られたところがあるのと、単なる遊びじゃなくて野球みたいなルールがあるものがなんか楽しそうだなあっていうことを感じて、野球を始めて。小学2年生のときに地元で少年野球チームができたので1期生で入れてもらって、そこから野球を本格的に始めたというのが経緯になります。」

私「最初は特別に野球が好きということでも、お父さんが勧めたということでもなかったんですね。」

千尋さん「平たく言うと、テレビでも野球中継がメインで、スポーツといえば野球みたいな感じがあって、そういう時代で限られたなかで自然発生的に始めたっていう感じですね。」

憧れていた野球選手

次に、聞いたのは憧れていた野球選手。自分自身歴代でどんな選手が好きだったのかを聞いてみたかった。

私「憧れていた野球選手はいらっしゃいますか。」

千尋さん「当時は、古いけどこの前亡くなった長島茂雄さんとか、あと王貞治さんとかそういう人たちがすごい活躍していて。でも私自身はあんまり誰かに憧れるっていうのがなかったような気がしますね。球団的には、やっぱりテレビで日々目にするので巨人ファンで、自然と応援してしまうという環境だったと思います。大人になってからは、やっぱり関西出身なので、タイガースとかソフトバンクとか、もともとソフトバンクは南海で大阪にあっただけですけど、アンチジャイアンツになりますね。」

私「今好きな選手とかいらっしゃいますか。」

千尋さん「やっぱり大谷選手は規格外で注目していますね。それから、今はもう選手じゃないですけどイチローさん。彼のプレーも好きですけど、今YouTubeとか見ていると、アマチュア野球にす

ごく貢献をされていて。高校に行つて指導するというコンテンツがあるんですけど、そこで語られる言葉がすごく本質を突いていて、イチローさんはすごく尊敬できるなと思います。」

### イチローさんの言葉

続けて、イチローさんの重みのある言葉を二つご紹介くださった。まず一つ目。

千尋さん「私、歴史とか思想とか好きなんですけど、イチローさんっているいろいろ思想持っていて、すごい言葉だなと思ったのがいくつかあって。そのうちの一つが、自分の出身高校の愛工大名電に戻つて後輩を指導するっていうコンテンツのなかで語られています。

愛工大名電って、やっぱりイチローさんとか、あとソフトバンクの工藤さんがいて有名な学校だから設備がすごいんですよ。一球一球ボールの速度だったり、打球の角度だったりとかを測つてデータ化して、すぐに選手にフィードバックできるっていうシステムが入っているんですね。それをあのイチローさんが見て、逆にそういうものじゃなくて『感性を大事にしないといけないよ』っていうふうに言ったんですね。

なぜかっていうと、あのデータって、全部をデータ化できているわけじゃなくて一部分だけを数値化していたりするので、『数値化してない大事なものがそれによって見落とされてる。そういうデータに頼りきった野球を若いうちからすべきじゃない』っていうふうに言ってたんですね。それって

すごい言葉で、確かにそうだなと思って。高校生みたいに感性を豊かにしないといけない時代は逆に邪魔になるっていう考えは、自分もすごく同意する部分で。野球以外にも生き方とかこれから何を大事にしていけないといけないのかという、ITの時代ですけどそうだなと思ったので、愛工大名電行っているときのコンテツ見たらいいなと思います。すごくアドバイスになります。」

次に二つ目の言葉として、以下の内容。

千尋さん「あと岐阜県に岐阜高校ってすごい進学校があつて、野球がそんなに強くない高校に行つた時のアドバイスでイチローさんが言つたのは、岐阜高校みたいに全国から集めてくるような学校じゃない場合、甲子園目指す時にどういう心持ちでやらないといけないのかというと、例えばパワーとか『強い学校と同じところで競つても勝てない』真似をするんじゃないかと、頭を使つてがっちりとした落ち着いた野球をすることによって自分たちの特徴が出る。『強い学校の真似をするんじゃないかと、頭で考えて自分たちの特徴を活かせ』と言つてたんですね。」

野球以外にも役立つすごく重い言葉だと思った。いろいろ見てもらつて、最初はなんか理解できないと思うんですけど、じんわりとこういうこと言つてたんだなって、たぶん生きて行く中で感じるころがあると思うので、お勧めなので見てもらつていいかなと思います。ごめんね。私の言葉じゃなくて申し訳ないですけど。」

自分も知っているイチローさん。その言葉を千尋さんがわかりやすく解説いただいて、とても参考になった。深く重い言葉で、自分でもまた動画を見てみて、野球以外にもこれからの生き方に役立てていきたいと思った。

### 基礎トレーニングの大切さ

野球をやっていると思うようにいかないことが多いのと、1年生の練習時に2度骨折して、年間の3分の1くらい休んでしまったので、練習での心がけをお聞きした。

私「練習の時に心がけた方がいいことを、教えていただければと思います。」

千尋さん「ちょっと漠然になるけど、細かいこともきちつとやるってことかな。例えば基礎トレーニングとか走るとか。ボールを使わない練習とかは、なんか怠けがちになるんですけど、そういうことを一つ一つ丁寧にトレーニングだとか練習とかしていくっていうことを心がけてきたような気がするんで。」

ビジネスの世界でも、神は細部に宿るってこともあるんですよ。だから細かいところをおろそかにすると、結局大きなことができないっていうことなんです。社会人になって、仕事とかも同じでそういう細かいところが身についたような気がするんです。ただ一流選手じゃないんで、大したこと言えないんですけど。そういうことを意識、心がけたような気がするね。」

私「ありがとうございます。僕も1年の時ケガでだいぶ休んでしまったので、これから基礎トレーニングをしっかりやっていきたいと思えます。」

前向きな心持・発言が大事

聞きたかった甲子園出場について伺った。

私「父から、大阪の激戦を勝ち抜いて甲子園に出場されたと聞いていますが、原動力、要因が何だったかをお伺いできればと思います。」

千尋さん「1年下に、すごくセンスのあったピッチャーのM君と4番のH君がいたことはやはり大きいね。H君は、中学の時に実際に対戦していて、私がピッチャーで軽々と柵越えのホームランを打たれました。慶応大学でもキャプテンで、六大学のベストナイン。その後、社会人になってからも大阪ガスの監督で、現在阪神の近本選手を率いて優勝していましたから、すごい活躍ですね。」

続けて、以下のご発言。

千尋さん「二人によって周りのメンバーが引き上げられ、全体がレベルアップしていたのは確かにあったと思うけど、甲子園とかそういう特別な機会になると、実力だけじゃなくて、そういう運氣み

たいなのも引き寄せるっていうことが大事で。常に前向きな心持とか発言とかかしていればそういうのが自然と入ってくるから、運つていうのも意識したほうがいいと思います。

陽翔さんも、清教学園、キリスト教の学校ですよ。だから科学的な機械的なところだけじゃなく、思想だとか宗教だとか考え方みたいなのところも、しっかりと身につけられる学校だと思うので、そういうのはしっかりと学んでいけばいいと思います。自分もキリスト教の大学だったんですけど、あまり宗教の勉強してなかったの。大人になったら、グローバルっていうか海外に出ようと思つたらアメリカとかもそうだけど、キリスト教の知識つてすごく重要だと思つので、しっかりと身につけた方が可能性広がるよ。

やっぱり世界の人と話をしようと思つたらそういう知識もないとね。今なんか、AIとかテクノロジーみたいなのが全面的に出てきているけど、根底はどういう考え方をしているのかとか、どういふ心の持ち方かみたいなのところも理解してないと上手くやっていけないと思う。宗教だとか、あと歴史ですよ。そういうのもしっかりと学んだらいいと思います。」

甲子園出場についてお聞きしたが、それに対するお答えだけでなく、物事に対する考え方にまで深く掘り下げていただいて、心に刻み込まれる内容だった。清教学園での学びが非常に有意義であることもわかった。

桑田・清原のPL学園との大阪大会決勝戦

最後に、レジェンド二人が率いたPL学園との大阪大会決勝戦について伺った。

私「大阪大会の決勝戦で、桑田さん・清原さんのPL学園との対戦が決まった時、チームの雰囲気、心意気はどうでしたか。」

千尋さん「二人は私の1学年下でしたが、1年生の時から甲子園のヒーローで、全然格が違うというのを自分たちでも意識していたので、逆にやってやろうという感じではなかったですね。ただやってみたら、意外とやれて。0対1の接戦で負けたんですけど。」

何でかという、さっきイチローさんが、『もつと落ち着いて自分たちの野球をやろう』という指導があったんですけど、当時私たちもそれができたのかな。PLの真似をしても、絶対勝てないの、『自分たちの野球をやろうよ』ということとそれを貫いて。負けましたが接戦に持ち込めたんだと思います。自分たちのやれることを全部出し切ろうという心持ちだった気がします。」

私「桑田投手からヒットを打ったと聞きましたが、イメージ通りの打球でしたか。」

千尋さん「桑田投手は、とにかくカーブがすごくて最初全く目がついていなくて、それを意識していたところ、ストレートがきたんですね。完全に振り遅れましたが、強く振り切ったことで、ライント前ヒットになりました。意識としてレフト方向だったんですが。」

取材を終えて

「もつと話を聞きたかった」取材を終えてまず感じたこと。

父の従弟で、リモートであったが、初めてお目にかかった。非常に丁寧で優しい話し方。画面越しからも、他者へ気配りをされるそのお人柄がよくわかった。

「一を聞いて十を語る」そんな言葉を作りたくなるくらい、知識も豊かで、一つの問いに対し、関連して多くのお話を聞くことができた。しかも、そのほとんどが実体験に基づくものなので説得力があり、お仕事に関することも含めて非常にわかりやすく、聞いている間に話に引き込まれた。

本質をとらえること。それを強く意識されている方。お話を伺いする中、次の言葉からもそう強く感じた。「英語を伸ばすためには、日本語の能力もしっかりつけなといけない」「野球の練習は基礎トレーニングを一つ一つ丁寧に心がけた」自らもこれから見習っていききたい。

今回、慣れ親しんでいる野球について、多くの質問をさせていただいた。お答えはそれに対してだけでなく、物事に対する考え方にまで深く掘り下げたものだった。そのなかで強調されていたのは、感性、思想、宗教といったことで、心の持ちようを大切にされているのが非常によくわかった。

「現代のAI時代の中で、キリスト教を学ぶ意義」清教学園に通っていることを踏まえた上でのお話。相手の立場に沿ったご配慮をここでも感じた。お聞きしたことも大変参考になり、今後の自身の生き方に役立てたいと思った。

「慧眼の士（けいがんのし）まさに、この表現がふさわしい方。

今回は、リモートではなく実際にお会いして、お話を伺いしたいと感じた。  
取材後改めて思った。「清教学園で学ぶことに感謝」。





和歌山県立  
図書館

和歌山県立  
図書館  
和歌山県立  
図書館

R300  
社会

R300  
文庫

196  
197  
198  
199  
200  
201  
202  
203  
204  
205  
206  
207  
208  
209  
210  
211  
212  
213  
214  
215  
216  
217  
218  
219  
220  
221  
222  
223  
224  
225  
226  
227  
228  
229  
230  
231  
232  
233  
234  
235  
236  
237  
238  
239  
240  
241  
242  
243  
244  
245  
246  
247  
248  
249  
250  
251  
252  
253  
254  
255  
256  
257  
258  
259  
260  
261  
262  
263  
264  
265  
266  
267  
268  
269  
270  
271  
272  
273  
274  
275  
276  
277  
278  
279  
280  
281  
282  
283  
284  
285  
286  
287  
288  
289  
290  
291  
292  
293  
294  
295  
296  
297  
298  
299  
300  
301  
302  
303  
304  
305  
306  
307  
308  
309  
310  
311  
312  
313  
314  
315  
316  
317  
318  
319  
320  
321  
322  
323  
324  
325  
326  
327  
328  
329  
330  
331  
332  
333  
334  
335  
336  
337  
338  
339  
340  
341  
342  
343  
344  
345  
346  
347  
348  
349  
350  
351  
352  
353  
354  
355  
356  
357  
358  
359  
360  
361  
362  
363  
364  
365  
366  
367  
368  
369  
370  
371  
372  
373  
374  
375  
376  
377  
378  
379  
380  
381  
382  
383  
384  
385  
386  
387  
388  
389  
390  
391  
392  
393  
394  
395  
396  
397  
398  
399  
400  
401  
402  
403  
404  
405  
406  
407  
408  
409  
410  
411  
412  
413  
414  
415  
416  
417  
418  
419  
420  
421  
422  
423  
424  
425  
426  
427  
428  
429  
430  
431  
432  
433  
434  
435  
436  
437  
438  
439  
440  
441  
442  
443  
444  
445  
446  
447  
448  
449  
450  
451  
452  
453  
454  
455  
456  
457  
458  
459  
460  
461  
462  
463  
464  
465  
466  
467  
468  
469  
470  
471  
472  
473  
474  
475  
476  
477  
478  
479  
480  
481  
482  
483  
484  
485  
486  
487  
488  
489  
490  
491  
492  
493  
494  
495  
496  
497  
498  
499  
500  
501  
502  
503  
504  
505  
506  
507  
508  
509  
510  
511  
512  
513  
514  
515  
516  
517  
518  
519  
520  
521  
522  
523  
524  
525  
526  
527  
528  
529  
530  
531  
532  
533  
534  
535  
536  
537  
538  
539  
540  
541  
542  
543  
544  
545  
546  
547  
548  
549  
550  
551  
552  
553  
554  
555  
556  
557  
558  
559  
560  
561  
562  
563  
564  
565  
566  
567  
568  
569  
570  
571  
572  
573  
574  
575  
576  
577  
578  
579  
580  
581  
582  
583  
584  
585  
586  
587  
588  
589  
590  
591  
592  
593  
594  
595  
596  
597  
598  
599  
600  
601  
602  
603  
604  
605  
606  
607  
608  
609  
610  
611  
612  
613  
614  
615  
616  
617  
618  
619  
620  
621  
622  
623  
624  
625  
626  
627  
628  
629  
630  
631  
632  
633  
634  
635  
636  
637  
638  
639  
640  
641  
642  
643  
644  
645  
646  
647  
648  
649  
650  
651  
652  
653  
654  
655  
656  
657  
658  
659  
660  
661  
662  
663  
664  
665  
666  
667  
668  
669  
670  
671  
672  
673  
674  
675  
676  
677  
678  
679  
680  
681  
682  
683  
684  
685  
686  
687  
688  
689  
690  
691  
692  
693  
694  
695  
696  
697  
698  
699  
700  
701  
702  
703  
704  
705  
706  
707  
708  
709  
710  
711  
712  
713  
714  
715  
716  
717  
718  
719  
720  
721  
722  
723  
724  
725  
726  
727  
728  
729  
730  
731  
732  
733  
734  
735  
736  
737  
738  
739  
740  
741  
742  
743  
744  
745  
746  
747  
748  
749  
750  
751  
752  
753  
754  
755  
756  
757  
758  
759  
760  
761  
762  
763  
764  
765  
766  
767  
768  
769  
770  
771  
772  
773  
774  
775  
776  
777  
778  
779  
780  
781  
782  
783  
784  
785  
786  
787  
788  
789  
790  
791  
792  
793  
794  
795  
796  
797  
798  
799  
800  
801  
802  
803  
804  
805  
806  
807  
808  
809  
810  
811  
812  
813  
814  
815  
816  
817  
818  
819  
820  
821  
822  
823  
824  
825  
826  
827  
828  
829  
830  
831  
832  
833  
834  
835  
836  
837  
838  
839  
840  
841  
842  
843  
844  
845  
846  
847  
848  
849  
850  
851  
852  
853  
854  
855  
856  
857  
858  
859  
860  
861  
862  
863  
864  
865  
866  
867  
868  
869  
870  
871  
872  
873  
874  
875  
876  
877  
878  
879  
880  
881  
882  
883  
884  
885  
886  
887  
888  
889  
890  
891  
892  
893  
894  
895  
896  
897  
898  
899  
900  
901  
902  
903  
904  
905  
906  
907  
908  
909  
910  
911  
912  
913  
914  
915  
916  
917  
918  
919  
920  
921  
922  
923  
924  
925  
926  
927  
928  
929  
930  
931  
932  
933  
934  
935  
936  
937  
938  
939  
940  
941  
942  
943  
944  
945  
946  
947  
948  
949  
950  
951  
952  
953  
954  
955  
956  
957  
958  
959  
960  
961  
962  
963  
964  
965  
966  
967  
968  
969  
970  
971  
972  
973  
974  
975  
976  
977  
978  
979  
980  
981  
982  
983  
984  
985  
986  
987  
988  
989  
990  
991  
992  
993  
994  
995  
996  
997  
998  
999  
1000

## 私と高校2年生の兄

聞き手 河中優莉

はじめに

今回私が魅力的に思う相手は、今高校2年生の兄だ。正直言って私は兄のことがあまり好きではない。みんなには「仲良いな」とか言われることが多いけれど、シスコンだし、追いかけて回されるし、虫を捕まえて投げってくるし喧嘩を打ってきたりなど基本的に私が嫌な行動しかしてこない。

私が小学校3年生の時の夏に、30匹以上のセミを虫かごいっぱい詰めて込み、蓋を開けて玄関の扉の前でそのセミを全部一気に投げってきたりもした。それは本当に怖く大号泣しまくった。そこから虫が大嫌いになった。その他にも私は虫が嫌いなので、兄は虫を慣れさせようとしみみずを投げつけてきたりクワガタを手の上に乗せて嘔まれたりと、私の驚いたり叫んだりする反応を面白がっている兄が本当に嫌いだった。

じゃあなぜ兄が魅力的に思うかという点、私と兄は生活をしている中でも綺麗なほどに真反対である。でもなぜか気の合うことが多い、口喧嘩は多いけど次の日にはもう普通に喋り笑っていたりなど不思議と安心できたり頼ったりもできる。

そこで私はなぜ嫌いなのにこうやって安心できたりするのか疑問に思ったので、今回私は兄を「魅

力的な人」に選んだ。

聞いてみたいこと話してみたいこと

私の兄は中学校から高校まででだいぶ成長した。おばあちゃんからも、中学生の頃は「精神年齢2歳じゃね」と言われていたり、中学生の頃はとてもヤンチャで学校の窓ガラスを割ったり、時計を割ったり、そこらへんの道で寝て12時くらいに学校に行ったり。結構変人だ。だが高校生になれば頭は悪いが意外とちゃんと習い事に行ったり、勉強にも励んでいる。今も行きたい大学に向けて頑張っている。

そこで私はなぜ高校になってからそんなに成長し、行きたい大学に向けてどのように、なぜ頑張っているのか気になったからだ。

### 取材概要

日時…2025年8月30日(木) 18時～18時30分

場所…自分の家

取材相手…河中翔さん

自分との関係…兄妹関係

取材まで

私は親の前で、兄を対象にして「魅力的な人に取材をする」というのがは少し恥ずかしく嫌だったので、私と兄が2人の時に言った。

私「学校の授業で『身近な魅力的な人に取材する』っていうやつがあつて、あんたにしたから」  
兄「え俺なん？？なんでそんな急に」

兄の質問に私は何も言わず、取材相手に渡す紙を渡しただけだった。

兄「まあ、とりまわかったわ」

そう言われ案外すんなり取材のことが決まった。兄は声的に少しいつもより喜んでいような気がした。

取材

私たち二人は真面目な話が苦手なので、学校から帰ってきりビングで2人でアイスを食べながら私は聞いた。

私「なんでお兄ちゃんってき、そんな中学と高校で性格が変わった、優しくなった？ みたいになつたん？」

兄「元から優しいわい！ フツーに思春期&反抗期なんもあつたし、よー親にも怒られてたからやる気がでんくなつてもーたんよ。あとそれと、将来の夢が見つかった？ からかな」

私「将来の夢なんやつたっけ？」

兄「会計事務所みたいなの？」

私「あー簿記（ぼき）使うやつか」

兄は高校で簿記（ぼき）というものを授業で習つたらしい。簿記（ぼき）とは日々の経営活動を記録・計算・整理をして、経営成績、財政状態を明らかにする状態のことだ。

私「なんで会計事務所になろうとしたん？」

兄「単純なことやな。笑 授業で習つて、テストで高得点取れたから自信ついただけや。あとは数学だけ得意やしな。俺は単純やから、逆にこういうの決まりやすいねん。いいやろ。あとはなー、税理士とかやったら俺がアホすぎて無理やけど、会計事務所はまだ頑張ればなれるし、なにより給料が高いやー！！」

私「なんかお兄ちゃんっぽいわ」

兄「俺こう見えて、意外と頑張ってるんやき！」

私「どんなんよ？ いつもお菓子食べてスマホゲームして夜遅くまで起きとるやんけ」

兄「うう。まあ定期テストの時はな！ いっぱい勉強してるでー?? 特に簿記とかいっつも90点台や！ しかも上のクラスにも上がったしその中でも8位くらいなんやぞ」

私はいつも怠けてる兄しかあまり見ないので、意外ときちんと将来の夢とかにも目を向けてるんだと思った。私にはまだはつきりとした将来の夢が決まっていなから、兄みたいにまっすぐ進んでいく感じが私は少し羨ましい、尊敬すると感じた。

私「でもさ、そう簡単に取りれるような仕事じゃないんやろ？ 絶対むずいやん」

兄「確かに俺の頭じゃちよつと厳しいかもしれんけど。その分やりがいも人一倍増えると思うし、難しいからこそみんなできへんから頼られまくりや。俺はそういうのがなんやかんやいうて一番嬉しいんかもしれん。」

私はその時「自分が思っているよりもこの人は将来のことをちゃんと考えているんだな。」と感じた。

兄「でも俺だつてなんでも順調つてわけじゃないで？ 知つての通り、高校2年生で英検三級も持つていないようなばかや。だから何回もおんなじこととして勉強するねん。ゆりみたいに、自分に合った勉強法がまだわからんからいろんなこと試して、絶賛頑張つてる途中や。でも点数落ちてたらもう病んでまうわ。」

兄が言つてるみたいに、私も兄が「点数落ちてた…」と落ち込むところをよくみていた。その時はまだ子供っぽいところがあり少しホツとする。でも、ポジティブなのかばかなのかわからないけれど兄は「また次がある！ 次頑張るから見返したるわ！」とポジティブに考えるところが尊敬する。

私は今まで「なんであんなににに対してでもポジティブでそこまでどうしてできるんだらう」と不思議に思つていた。

でも、今回の取材でそれが少しわかつたような気がしました。

まとめ

今回の取材を通して私は兄のことを前よりずっと知ることができた。ただの「普通にちよつとおかしいお兄ちゃん」ではなく「夢に向かって頑張っている兄」に少し傾いた気がした。

私はまだなになりたいかもわかりません。

趣味も得意なこともちろんとわかっていません。

でも今回の取材を通し、「何かやってみたいな」「いろんなことに挑戦して夢を見つけていきたいな」と思えるようになりました。

それに、夢が見つかったら、兄みたいに本気で頑張れるような格好いい人になりたい。そしていつか自分も「魅力的な人」として誰かに見てもらえるように頑張りたいと思いました。



ポジティブは人にわけられる

聞き手 原希空

自分の一番年の近い社会人

私は従姉妹の島尾果歩（しまおかほ）さんを取材相手に選んだ。その従姉妹は今年から社会人で、神奈川県でつい最近一人暮らしを始めた。そして去年の夏頃に株式会社日社への就職が決まって、営業をする人になったという。

私が従姉妹を取材相手に選んだ理由は、私にないものを持っているからだ。私にないものとは粘り強く努力をしたり、どんな時でも明るく人に接したりことができるところでそれを従姉妹は持っているから取材相手に選んだ。

正反対？！

私は飽き性で、あまり粘り強く一つの目標に向かって集中することができない人である。でも私の従姉妹は自分のしたいことや目標に向かってまっすぐ集中できる人で、ついこの前はバイトで貯めたお金で友達とアメリカに行っていた。その話を聞くととても楽しそうだった。

その話とは、従姉妹と友達が二人でアメリカに行くと「二人とも英語喋られへんくて、ホテルでも英語通じひんままフロントの人めっちゃ困らせてたわー。笑」なんて言っていた。それ以外にも話し

でもらったが、とても面白かった。大変なことがあっても結局楽しかったと言えるところがとても尊敬する部分である。自分もそんな風に自分で目標に向かって努力して従姉妹のように辛いことがあっても自分の納得のいくように過ごしていきたいと感じる。

さらに私の従姉妹にはドジな面もある。どんな所かというところ、この話は従姉妹の母親、つまり私の叔母さんに聞いた話なのだが、営業の仕事をする前にH社の工場で研修があったそうなのだが、その時製品にシールを貼る作業で従姉妹のミスで全国のH社の工場を止めたことがあったらしい。努力を重ねて自分のしたいことを貫き通すことができるような完璧に見える従姉妹でも全てが完璧ではないことに安心させられたポイントでもある。

アメリカの話や、その工場の話全てを面白い話に変換できるところにも私は魅力を感じる。私は従姉妹と会ったらずっと笑っている気がする。それぐらい一緒にいると、いろんな人を笑わせられるぐらいいろんな人に明るい雰囲気を与えられるようなユーモアセンスがあるところ、ポジティブな部分、粘り強く努力をすることができるとも魅力を感じる。私は従姉妹に取材をしようと思った。

取材依頼の連絡をしてから取材まで

私はもともと果歩さんとはLINEが繋がっていて、今までは「誕生日おめでとう」ぐらいしか言わないぐらいの連絡手段だったが、今回改めて取材依頼の連絡を送ると「なにそれ!!! 自分選んで

くれたの?! ありがとう!!」と、果歩さんらしい明るい返信が返ってきた。そんなに緊張しなくても大丈夫そうだと思って少し安心した。

### 取材概要

日時.. 2025年8月15日 20時30分~21時

場所.. 自宅

取材した方.. 株式会社H社 島尾果歩さん

自分との関係.. 約10歳差の従姉妹

インタビューが始まるまで

もともと果歩さんがこのお盆期間に大阪に帰省して、一緒にスイーツパラダイスに行こうねと話していたが行けなかったの、その代わりに取材前に少し喋ろうと言う話になって、果歩さんが私の家に到着したのは取材の予定より1時間ぐらい早かった。

果歩さんは取材の前に予定があったそうで、叔母さんも一緒に来てくれた。叔母さんと果歩さんは「スイーツパラダイス今年も行かれへんかったから、これ代わりねー!」と言ってサーティーワンでアイスケーキを買ってきてくれた。実はスイーツパラダイスの約束は2年前からずっと先延ばしだっ

た。そのアイスケーキをまずみんなで食べながら、果歩さんの神奈川に行ってから話の話をいつも通り面白く話してくれた。

アイスを食べる時とインタビューの時は、自分の妹と、叔母さんもいたので全員で爆笑してからインタビューに入るのは少しメリハリがつかなくて、変な感じでスタートしてしまった。最初から改めてどんな感じであればいいのか分からず、どんなふうにスタートすればいいのか分からなかった。そんなこんなで取材者の私が果歩さんにリードされる形で取材が始まった

学生の頃なにを目指していたのか

今は社会人として会社に就職して大人の世界で働いている果歩さんも、私と同じように生まれてから幼稚園生や学生として過ごしていたこともあると思うので、今の自分と照らし合わせたりすることができるようになるように学生の頃は何をを目指していたのかを尋ねることにした。

果歩さん「じゃあ始めよっかー」

私「はい！ お願いします。じゃあまず質問一つ目です。学生の頃はなにを目指していましたか？」

果歩さん「希空ぐらいの年齢の時やんね。」

私「そう！」

果歩さん「中学生の時って何やりたかったかな。でも公務員やりたいと思ってたで。なんかそれこそ、ともくん（私のお父さん）の仕事とか憧れで。だから結局は身近にいる人の仕事っていうのが憧れやったかな。」

私「やっぱり周りの人の影響って大きいんやね。」

果歩さん「そうやね。」

なんでH社の会社に就職したのか

学生の頃の夢と、今働いている会社とでは少し違うジャンルの仕事をしているなと思ったので、なんで今の会社で働いているのかを聞いてみることにした。

私「じゃあなんで今のH社に（面接に）行こうと思ったんですか。」

果歩さん「もともと営業やりたいっていうのもあったんやんか。で営業何しようかなって思った時にもっとITの営業のお仕事もあったり、あとは目に見えないものっていうのあるやん？」

私「アプリとか？」

果歩さん「なんでもそうかな。ITもそうやし、空気とかガスとかを売る営業もあるねんな。ガスとかの営業と違って、例えばガス売りますってなって、このガスがいいですよって売るのもいいけど、それって実際は目に見えるものじゃないからさ、お客さんにこれどうですかこれはすごい良いが

スなんです、って言ってもあんまりお客さんに響かへんやん？ だけどH社の冷蔵庫例えば売りますって言ったら、みんなが使うもんやんか。ガス一つでも確かにみんなを幸せにできるのかもしれないけど、冷蔵庫が壊れたとか、洗濯機とか家電製品とかが変われば、お客さんとかみんな周りの人たちの生活を豊かにできるなって思ってる。だからH社の営業したいなって思って入った感じかな。」

この話を聞いている感じだと、こんなに深い理由があってH社に入った！という深い意味はなさそうな感じだった。でも営業をしたかったという自分の理想とは当てはまる仕事ができているそう

#### 自分のモチベーションの保ち方

今の二つの質問をして、私が考えたのは自分の大きな目標や理想の姿に、現実の自分を近づけていくと、きつと挫折をすることや諦めたりしなければならぬこともあったと思う。そこで自分の思うようにいかなかった時、落ち込んだ時はどんなふうに対処をしているのかが気になったのでモチベーションの保ち方を聞いてみた。

私「次は、私がずっと見ている範囲の果歩ちゃんは結構明るいポジティブな面が多いなって思ってるんやけど。例えばそれこそ面接とかだって、どうしても行きたいところがあったけど行けなかった

な、とか自分の思い通りにいかなかったなって思うこととか、落ち込んだりする時とかがあったと思うねん。そう言う時はどういうふうにもチベーションを保っていましたか。」

果歩さん「すごいな。面接みたい(笑) それこそH社の面接でそれ聞かれてん。面接の時に落ち込んだ時何しますか、って言われて。その面接の時言ったことなんやけど、そもそも普段落ち込むことってあんまりないんよね。そりゃさ、落ち込むことはあるけど楽観的に考える時の方が多いいんやんか。けどもし落ち込んだ時って何をするかって考えたら、趣味かなって思ってた。

例えば、果歩K・P・O・P好きやんか。だからK・P・O・Pの音楽聴いて踊られへんのにひとりで踊ったりするんよ。踊ってる時間って自分がやっていて楽しいことをしてる訳やから、落ち込んでいることを忘れる時間やし。そんなんして楽しんでるかな。落ち込んでる時はそうやって落ち込んでることを忘れるようにしてる。」

私「なるほど。」

私は落ち込んだからこうしていこう、など深く考えてしまうことが自分はいくどそうじゃなくて、落ち込んでいることを忘れられる時間を作るといいう工夫や考え方がやっぱり私とは少し違ってポジティブに生きているなど改めて感じた点だった。

果歩さん「それをH社の面接の時に言ったら、面接官が『K・P・O・Pですか』って言ってる。果歩

が好きなグループはあんまり定番って感じじゃなくて、一般的に知られてないからさ。面接官の人に『私BLACK PINKとかTWICEとかしか知らなくて』って言われて。果歩が『○○○○って言うグループで』って言ったら『初めて聞きましたちょっと家帰ったら見てみますね。』みたいな。『ぜひ見てみてくださいいいセンスがいい方には刺さります！センスがいい方にはね』って言ったよ  
(笑)

私「それで受かっているのがほんまにすごいと思う(笑)でもその他でも自分の良いところかを伝えるのがうまくいったから受かったんやろうね。」

果歩さん「そうやね〜。」

そんな感じで、初対面の人にもどんどん積極的に自分の良い所が相手に変に悪く伝わらずに良い風に伝わるように話せる性格がとても気になったので、本題とは全然関係ないけれどMBTIを聞いてみた。MBTIとは、個人の性格を理解するための心理テストのようなもので、そのテストが終わったら全部で16のタイプ中の1つに分類されるものである。

番外編・MBTI・

私「全然関係ないんやけど、果歩ちゃんのMBTIってなに？」

果歩さん「ENFPかな。」

私「え！一緒！」

私の妹と叔母さん「ええ！」

果歩さん「ほらやっぱり果歩、希空と似てると思ったもん。」

この時、私は今まで似ているところもあるけど少し違う考え方の2人だと思っていたから、同じMBTIでもびっくりした。ちなみに、ENFPの特徴を簡単に説明すると自由奔放で好奇心旺盛、情熱的で社交的、共感力が高く人とのつながりを重視する性格タイプだそう。

自分から見た自分の第一印象ってどんな印象？

その面接の話やMBTIを聞いて自分が自分のことをどう思っているのかが気になったので聞いてみた。

私「仕切り直して次は、自分のことをどんな風に思いますか？」

果歩さん「どんな風に？」

私「そう。」

果歩さん「面白い人間？ かな（笑）なんかでも器用な人間ではないねん。だからすごい努力するタイプかなと思うかな。努力で今まで成功とかに導いてきたなと思う部分が多いかなって思うし。だ

から努力できる人かな。

今までの人生の中で印象に残っている大きな後悔はあるのか

話は少し変わるが、努力で成功に導いてくるというのは、その過程で失敗や後悔したこともあるかなと思ったので、自分の今までの人生の中で大きな後悔があるのかを聞いてみた。

私「じゃあ印象に残っている後悔したことはありませんか？」

果歩さん「大きい後悔かー。振り返ってみたら全部後悔に思うことあるけどなー。なんかでも結局すべてが成功やったんちゃうかなって思うかな。多分その時その時では後悔してんねんけど結局、それで結果オーライやったんかなって思ってる。なんかだから、高校受験も落ちたりとかその時に、あーこの時にこうすれば良かったな、とか思うことあるけど、結果その高校行つて友達には恵まれたしなー。」

私「さっきも言ってたみたいに、その時は後悔してたけど今になってめっちゃ大きい後悔とかはないって感じ？」

果歩さん「そうやね。だからなんやろ、そこで失敗してその道を選んでよかったなって思うことが多いから、後悔という大きな後悔はないかな。」

## 20代前半の果歩さんの理想

私「じゃあ自分のこれからの理想ってありますか？」

果歩さん「とりあえず仕事に慣れてお金持ちになるかな。(笑) そういう言い方をしたらめっちゃ抽象的でなんか嫌に聞こえるな。(笑)

今直近の理想は、希空と晴(私の妹)を神奈川に連れて行って旅行に連れて行ってあげたいかな。自分で使えるお金を一旦稼いで、希空と晴を神奈川に連れて行って、一回観光させてあげたいなっていうのがまじの直近の理想かな。

将来とかはお金持ちになりたいとかしかないかも。(笑) まだ先輩にも会ってないから、全然会社のことかわからんなー。でも長い目で見た時の今後の将来的な理想はキャリアアップかな。今営業って男社会やねんな。だから今神奈川の営業所に40人ぐらいおるけど、女性って3人しかおらへんねん。しかも27歳の方と31歳の方と果歩しかおらんくて。それ以外全員が男の社会やねんな。

だからまだまだなんて言うのかな、泥臭いつていうか、男社会で、営業の職業って。だから今、会社自体にそうやって管理職として役職がある人、例えば部長とか支店長とかっていう人に女の人一人もまだいないねんな。だから今後は自分がそうやって部長とか、女性が人をまとめていく人間になつて行きたいなあっていう風に思うかな。今後自分が、女性がまだできてないこと、女性目線で会社を見て行きたいなっていう感じかな。」

取材を終えて

私は今回、家族のように身近な存在だった果歩さんに取材ができて、普段喋る時には聞かないような話まで自分でお題を考えて聞いてみるということをして、自分の中で考えていくにつれて、この人には知らない所にこんなにもたくさん魅力があるんだなど再認識した。

いつもあんなに一緒に爆笑したりして話す果歩さんでも、いざ学校社会から出て本当の色んな世代の人がいる大きな社会に出て自立が必然的に求められると、自然と最初は漠然としたものでも目標や自分の理想は出来上がっていくものなんだなと思った。だから、私は今の頃から少しずつ目標や自分の理想像を決めたりしてやっていると将来に役立つのかなとも思った。

取材を通して、果歩さんの周りから（少なくとも私から）の印象と、自分で思う自分の印象が一致していて、自分で思う自分の印象が、ネガティブじゃなくてポジティブという自己肯定感が高い部分にもさらに魅力を感じた。さらに、家に着いた時から帰る時まで笑顔をたやさず盛り上げようとしてくれた果歩さんに自分が惹かれた理由はやっぱりポジティブな部分だったなと実感した。また、その場の一人がポジティブだと周りの人にまで、ポジティブで明るい雰囲気は伝染していくんだなと思った。時には後悔することやネガティブに考えることも大切な時はあるけれど、もつと自分が1番楽しく生きていく！ぐらいの勢いで少し楽観的に考えてみるのも良いことだなと思った。

私も誰かに魅力的だなと思ってもらえるように、周りの人に明るい気持ちを分けられるように、日頃からポジティブに明るく過ごしていこうと思った。





## 僕と先生の思い出

聞き手 金田勇氣

今回取材をするのは、私が小学4年生だった時の担任、西浦先生だ。その先生は、自分の通っていた小学校に10年以上勤めていたベテラン先生で、その小学校のこととても理解しているし、生徒みんなと仲良くできる力を持っている。ただそれよりも突出すべき魅力がある。それは、指導力がずば抜けていることだ。それにはとても熱意があるように見えた。

そんな先生を代表する事がある。それがクラスみんなが授業中喋っていたら、先生の一言で静かになったり、休み時間は先生と生徒が話していたこともあったし、さらには昼休みには一緒に鬼ごっこをした事があった。小学6年生の時には自分のクラブの顧問でいろいろな物を作ったりした。これは全部先生の魅力だ。

ただそれよりも自分の印象に残っている事がある。それは、自分が小学4年生の時、某塾に入塾する前だったので、学校の勉強でわからないところもあった。ただ、そんな私に対して、よくわかるように教えてくれる事が多かった。何回も教えられるうちに、その時からかはわからないが、私の将来の夢に、今までは一切考えなかった「小学校の教師」という道が見え始めた。「自分が教師になって、古巣の学校に行つて、生徒を育て上げたい」これが私の目標だった。ただ、私が卒業してから1年後、西浦先生は別の学校に行ってしまった。だからもう会えないだろうと思っていたが、こ

の総合学習の授業を機に、もう1度先生に会って、改めて感謝と質問をしていきたいと思った。

自分はさまざまな質問をしたいと思うが、その中でも絶対に聞いておきたい質問がある。それは「なぜ先生になろうと思ったか」と、あともう一つ「この私の通っていた小学校にどんな思いがあったか」だ。なぜなら自分は小学校時代そのような質問を全くしていないからだ。まず「なぜ先生になろうと思った」を質問する理由は自分の憧れの人がどのようにして先生になろうと思ったきっかけを知りたいからだ。そして、「この私の通っていた小学校にどんな思いがあったか」を聞きたい理由は10年以上勤めていた小学校にもたくさんのおい出や感じた事があると思ったからだ。

取材に至るまで

夏休み前、母に「この取材、西浦先生にしたい」と言ってから3日後くらいに、母の方から電話をして西浦先生と話を付けてくれていた。なので自分は電話もせず久々の対面となった。

取材概要

日時…2025年8月9日 11時～11時30分

場所…和歌山県 I市I市民図書館

取材相手…西浦伊津さん

自分との関係・自分が小学校4年生の時の担任

取材を行うまで

母が車で図書館まで送ってくれ、私が緊張からかトイレに行って出た後、母は西浦先生と話していた。久々に見た西浦先生は昔と変わらない姿だった。

その後母は「買い物して待っとくわ、終わったら教えて」と言いながら車で行ってしまった。そんな背中を見ながら私と先生はエレベーターで4階まで上がり、図書館で取材をスタートさせようとしたが、iPadが不具合を起こし、急遽スマホで録音を余儀なくされたまま取材をスタートした。

気になる動機

私「じゃあまずその、小学校の先生になろうとした動機を教えてください。」

先生「一番最初は父親が小学校の先生だったんです。それでなんか子供のこととか、同僚の先生の話とかをきいてて楽しそうというのありましたね。家に先生や子供が遊びに来て、先生いいな思ってたからです。」

私「その先生たちと違って、なんか当時深い関わりと違ってあったんですか？」

先生「子供の時から父親の先生とよく遊びに連れてってもらったりとか、交流はありました。大きくなってからも。だからその先生がまだしてたら一緒になっとうれしかったこともあります。」

私「じゃあ次の質問で、この十年間ぐらい小学校に行って正直に言ってどんな思いがありましたか？」

先生「とっても良かったし最初の2、3年っていうのは慣れるのに必死で、地域の子ども周りもななかかわらなかつたけど、これだけいたら学校のことを地域のこと、それからおうちの人のことっていうのもすごい知り合いになってよかつたし十年以上いれて良かったです。」

私「じゃあその次の質問で、先生はたくさんさんの生徒を持つたと思うんですけど、自分の子供に対する思いとかでどんな感じだったんですか？生徒たちにはその、自分の先生の子供どんな感じ接していたとか、ちゃんとあつたんですか？」

先生「自分の子供になつたらまた違うけど、でもやっぱり学校でいろんな子供を見てる分、寛大にはなれました。いろんな気持ちがあるし、いろんな思いもあるやろな。自分の子供にも、子供の気持ちにはつきり分らないけどちょっと余裕を持って見てたかなって思います。」

私「その子供はどんな仕事についているんですか？」

先生「大学は理系と文系に分かれていて、男の子2人だったけど違ったんです。でも入った会社は同じだったんです。兄弟が仲良くて、ずーっと一緒だった。まあ今でも男の子やけど仲がいい」

私「じゃあ意図的に片方がこの会社行つたから自分も行こうみたいな・・・」

先生「弟の方が大学とかお兄ちゃんの行つてる大学に行きたいってなつて、でも、お兄ちゃんは理系・文系くらい変えろよって言われるがままにお兄ちゃんについていったかな」

先生「企業はまあいろんな企業があつたんやけどまあ良かったからって弟の方が言ってますね。」

ここまでの話を聞いてきて、先生の意外な一面が見えたような気がしながら次の質問に移った。

### 勉強法

私「先生になる前にどんな感じで勉強してきましたか？」

先生「採用が少ない時期だったんで苦労しました。採用されるまでに講師になって、中学校とかいろんな学校へ3カ月間とかの時もあつたし、半年の時もあつたし1年の時があつていろんな学校へ回りました、で何回も試験を受けました。」

私「この試験に受かったのがM小学校みたいなの」

先生「もう小学校で採用なって、まあ今まで小学校ちよつと順番に回ってきました。」

私「じゃあM小学校は何番目の小学校なんですか？」

先生「正式になってからはね、あんまり行けなくてH小学校で採用になってそれから異動になってS小学校、C小学校、M小学校の四つです。」

私「おー、なら採用されてから何年やってきたんですか？」

先生「採用されてからじゃね、30ちよつと。34年35年」

私「そのうちの10年はM小学校か」

私「結構十年間って珍しくないですかね？」

先生「そう最近では珍しいですね。自分の父親は同じ学校に13、14年とか。あとまた違う学校行っただけどまた戻ってとか。だからすごいやろ」

私「すごい結構」

私「じゃあ次にあの毎年新学年になった時どんな気持ちでやってるのかっていう教えてください」

先生「1年1年、やっぱりリセットされるっていうか切り替えられるから、一個の持ちあがりとかもあるけど、一年しかないから絶対ちゃんとしようと思って。で、また一年経ったらまた最初からっていうのがあるからすごい気持ちの切り替えはできるかな。新しい気持ちで、毎年毎年4月ってすごいドキドキやし、どんな子が入ってくるっていうのがワクワク。一年間で終わり頃とかはしんどいなあと思って、もう私が好きだったら頑張ろうって切り替えができる。」

私「なるほどじゃあその毎年毎年なんか色んな生徒見てるんですけど思うんですけどそれで印象に残る生徒とかってどういう特徴があるんですか？」

先生「めっちゃ可愛い子と、あの気持ちが良い子とすごい大変な子。例えば、喧嘩とかして止められへんし、トイレいっぱい止めたし、やられたことあるし」

私「そんなことあったんですか」

先生「ある。M小学校ではないかな。すごい子供の喧嘩を見れたし、先生に対しても来る子はおる

から、まあ名前は残る。忘れられへん。」

私「結構大変だったんですよね？」

先生「そうやな」

私「じゃああの、毎年その先生になってどんなことを心がけてきたとかそういう自由にしてたからあるんですか？」

先生「子供が楽しく、一緒に過ごしたいなあっていうのもあるし、子供が楽しく来てくれたら嬉しいなあっていうのはずっとある。だから、怒ることは怒るけど基本、怒らないようにはしています。」

私「怒る時って結構よほど、そのやり過ぎて名前を覚えるくらい……」

先生「それはそうやけど、傷つけるとか、気持ちに傷つける、そんなときはめっちゃ怒ったことがあります。引きずったこととか」

私「やばいっすね。じゃあ、その教師によって大変なことか良かったことを教えてください。」

先生「子ども思いがあるから、それがうまくかみ合わない時つめっちゃしんどかったかなあ。まあイーブンにしたいけど、それもやっぱりあわへんかなっていうこともある。」

私「先生の都合とかもありますし、例えば夏休みの宿題をなくして欲しいとか。笑」

先生「笑でも結局『勉強わかったー』とか、これで嬉しいとか言ってくれた時が一番うれしいです。」

私「あー確かに」

先生「それですごい顔つき変わるし」

私「なるほどねー。じゃあ次はやり残した事はありませんか？」

先生「もうちよつと、こんなことしたらよかったかなって言うのがあるって言ったらあるけど。でもまあもうないで」

私「あと何年なんですか。定年退職まで？」

先生「行けるんやったらあと4年。今S小学校で非常勤やから、ほんまに一日、午前中だけで支援学級の先生の手伝いだから。すごいまあ、それはそれで支援学級って思うので思い出が全然今までと違うから、勉強あかんこととはでも寂しいっていうのはある。」

私「そこはどんな子がいるんですか支援学級？」

先生「いま先生が手伝いをしているのは勉強がスツと入らない、わかりにくい、じゃあ今までみたくに変わって教えるとか、こういう風にしたらいのが通じないから違う教材を用意してあげないとか。今までとは違うことはいっぱいあるし、友達との関係を助けてあげないとみたいなものはある。」

私「じゃあそのさつき言った話なんですけど、その子に対してわかった時、他の生徒が嬉しいってなった時より嬉しいんじゃないですか？」

先生「そうそう。だからその子一人とか二人とか、そんな人数やけど『わかったー』とか『これこれ』とか身についた時の嬉しいとか喜びはある。だから今まで支援学級を担当したことなかったから

勉強不足やな笑」

先生の過去がよくわかる質問だった。やっぱり学校には色々な人がいるなど改めて実感した。

先生という役目を終えて

私「笑」じゃあ次、その先生と言う役目を終えて、今どんな気持ちなんですか？」

先生「ちよつと寂しいですね。ほつとしてるっていうのもあるけど、無事今まで30数年、まあなんとかできてきて良かった。無事終わったってことと、まだもつとなんかできたんちゃうんてのもあるけど、とりあえずほつと」

私「じゃあそれ終わって今のやりたいこと言ってく下さい」

先生「ほつとしたから、自分が今までできなかったことや、して欲しかったことを今度は自分が助ける方になりたいとか。自分にできることをもつと手伝いたい。ボランティアとかしたいしそう思いますが、いいですか？」

私「その、先生はできれば教師を定年までしたいつもりですか？」

先生「できるだけ今の立場だったらそのまま定年までしたいです。」

私「でもし今教師を終えたとして今やりたいことってあるんですか？」

先生「また違うことを今までできなかったことをしたいです。まあ旅行もしたいし、いろんな友達

とボランティアとか趣味の習い事をしたいです。」

内心驚きつつも、また先生の意外な性格を知れて良かったと思いつつながら最後の質問に移った。

### 教師の魅力

私「その言い忘れてたんですけど、教師の魅力とかがあってあるんですか？」

先生「教師の魅力は人との出会いです。まあ子供もあるし、まあ子供の親もあるし、地域の人もあるし。後からの思い出るのがそれがすごい魅力かなって思います」

私「その30年の中で1番印象に残った思い出って何ですか？」

先生「みんながサブライズしてくれたときは印象に残ってるし、わつとさせられたとか、びっくりしたとか印象に残った」

私「あーねまあこんなくらいかな」

先生「これで終わり？」

私「うん。じゃあこれで終わります」

先生「ありがとうございます」

## 取材を終えて

今回取材を終えてわかったことは、先生は何年もしているとさまざまなことや経験があつて、また1歩自分の夢に近づけた気がした。最後に先生に「写真いいですか？」と聞いて「OK」と返事をもらったので、写真を撮ると2年前は全然追いつけなかつた身長が今ではすっかり同じくらいになつていて、また大人の階段をふめた気がした。



## 憧れの先輩

聞き手 遠藤はな

私には高校一年生にとっても魅力的な先輩がいる。中学一年生から女子バレーボール部に入部している轟杏奈先輩だ。

今年の3月に中学校を卒業してしまったが、セッターというポジションをやっていて、今でもバレーボール部には所属している。セッターの役割はレシーブからボールが返された瞬間に、相手のブロッカーの動きやスパイカーの得意な位置など瞬時に判断してスパイカーが打ちやすいトスを上げるというチームの攻撃を組み立てる上で重要な役割だ。杏奈先輩がチームを勝利に導く姿がとてもカッコよくて、私は尊敬と憧れの気持ちでいっぱいだった。

毎週火曜日は大体外練で筋トレや長距離、坂ダッシュなど体力作りをメインとした練習で長距離嫌だな、また筋トレかと思っていたけど、杏奈先輩はアウト練習でも真面目に取り組んでいてとても努力家だなと思ったし、だからあんな正確で打ちやすいトスをあげられるんだなとも思った。

期末テストが終わって自分が課題居残りや期末の追試で部活に行けない時落ち込んでいたら「部活来てなかったよな、どうしたん？」と杏奈先輩から一件のLINEが来た。「課題居残り」と追試で行けませんでした。」と返した。この時は残っている課題が多すぎてほぼ諦めていたけど、杏奈先輩から「課題居残り終わらせやー頑張って!!」とLINEが来たときは、心から頑張ろうと思えたし二つ離れ

た後輩にも優しく厳しくアドバイスしてくれる杏奈先輩が私の目標になっていた。

杏奈先輩は前文でも書いた通り、高校一年生で私は中学生なので会うことが少ない。なので、LINEで私から「杏奈先輩！総合学習の授業に『身近な魅力的な人に取材する』課題があるんですけど、もし迷惑じゃなかったら取材してもいいですか？」と送ったところ、「杏奈でよければお願いします！」と返ってきた。取材して迷惑じゃないかな、と緊張していたので杏奈先輩からLINEが来た時とても嬉しかった。

#### 取材概要

日時…2025年8月18日15:00～19:00

場所…天王寺フードコート

取材した方…轟杏奈さん

自分との関係…部活の先輩

取材が始まるまで

待ち合わせは天王寺駅。JR線の乗り換えを間違えそうになってちょっと焦った。天王寺駅に着くと、改札を出たところで杏奈先輩が待っていてくれた。おそらくプライベート

で会うのは初めてだ。私が挨拶をすると先輩は「やっほー！」と笑顔で挨拶してくれた。それからちよつと遊んで、天王寺のフードコートに到着し席に着いた。

私「今日はわざわざ取材受けてくれてありがとうございます！ 本当は渡すように先生から言われているんですけど、先生からの添え状や、先輩を取材相手に選んだ動機のレポートとか忘れちゃって」  
先輩「あそうなん！ 全然大丈夫やで。笑」

内心めっちゃ焦っていたけど、優しく対応してくれて取材を始めることができた。が、この時  
JBLの文字起こし機能を使えなかったので、私はこの後苦労することになる。

#### 入部動機

私「最初に、杏奈先輩はなんでバレー部に入ろうと思ったんですか？」

杏奈先輩は中1の初めから高校1年生まで続けていたので、単純にどうして入部をしたのか気になったので、まずその経歴をきいてみた。

先輩「結構幼稚な答えやねんけどー、バスケットボールってやるためにゴールいるやん？ テニス

はコートいるやん。やけどバレーボールってバレーボールあれば遊べるやんか。やから、みんなであいわいして遊びたくてバレー部はいつてん笑」

杏奈先輩はめっちゃトス綺麗やし、もつとうまくなりたかったからとか結構しつかりした答えが返ってくるのかなーっておもっていたら、みんなで遊びたかったから！と聞いて無邪気で単純な杏奈先輩の新しい一面を見た気がした。

私「そうなんですか！あと杏奈先輩ってキャプテンだったじゃないですか。なんでキャプテンやってみようかなーっておもったんですか？」

先輩「えっとー、普通にチームまとめんのが好きやって、杏奈が指示してみんなができるようになったら嬉しいやん？やからキャプテンやった。笑キャプテンやってしんどかったこともあったけど、やり甲斐もあつたし後悔はしてない！」

部活のみんなのために一生懸命なのがさすがキャプテンだなんて思った。

私「わかる気します。笑やっぱ元々出来なかったことが、自分が指示してできるようになってくれたら嬉しいですよ！杏奈先輩がキャプテンやってしんどかったことって何ですか？」

先輩「やっぱり指示出してもみんなが聞いてくれなかったり、『キャプテンやからして』とかいろいろ言われたこととか、絶対休んだらあかんっていう使命感とかかな？」

私「そうですね。キャプテンだから全部一人でやるっていう考え方じゃなくて、他の人もキャプテン任せにならずにカバーするっていう考え方がやっぱり大切ですよ。」

先輩「うん。やっぱりキャプテンって一年のこと引つ張らなあかんし、また新入生入ってきたらその子達もひっぱって行かなあかんから最初のうちはしんどいと思う。みんなでカバーしていったら絶対良いチームなると思うから応援してる！」

私「ありがとうございます！ みんなにも伝えときますね。杏奈先輩ってなんでセッターやろ！ っ  
ておもったんですか？」

2年ではセッターは1人しかいないし、1年生はノーセッターっていう話で進んであまりみんな行きたくないポジションなんかなくておもったから聞こうと思った。

先輩「杏奈はもととスパイカーなりたかってんけど、憧れの先輩がセッターやあって杏奈もやってみよってなった！ あとセッターって一番ボールに触るし関わるやん。やからかなー」

私「そうですね！ 私も元々っていうか今もなんですけど、リベロやりたくて。笑けど身長た

かいからスパイカーの方がいいって、言われてから諦めています。笑」

先輩「えーそうやったんや！リベロかっこいいよな。笑」

私「はい！セッターももちろんかっこいいんですけど、スパイク思いつきり打って決まるよりも落ちるなって思ったボールをあげた方が歓声沸くしとれたらめっちゃ嬉しいんですよ！」

先輩「めっちゃわかるわー。笑 杏奈もトスあげてナイスストスって言われたらめっちゃ嬉しい！」

私「わかります！急に話変わっちゃうんですけど、杏奈先輩がバレーやってきて悔しいって思ったことありますか？」

先輩「えーと最近やったら同級生に小学校からバレーやってるめっちゃトス上手い子おるねんけどその子とセッターのポジション争いしたとき悔しかったかなー」

私「スポーツやってたらみんな悔しいっておもうことありますよね！そこも含めてスポーツの面白さやおもいます。笑」

ブーブーブー

電話の着信音がなった。

私「すみません。ちょっとお母さんから電話かかってきたんでますね！」

先輩は声が入らないようにグットポーズしてくれた

私「もしもし、いま取材中やねんけどどうしたん？」

お母さん「どうしたんっていうかもう19時過ぎやけどどこおるん？」

私「え！もうそんな時間なん！」

私は急いでスマホの時計を見た

体感1時間くらいだったから、4時間くらい話してたって知ってびっくりした。

お母さん「もう遅いし、先輩にも迷惑かかるからはよかえってきーや」

私「わかったわかった、じゃあね」

お母さん「か」

電話を切ったら丁度お母さんが話そうとしてるのが被ってしまった。何を言いたかったのか気になるけど、杏奈先輩との取材のほうが大切だから気にしなかった。

先輩「もーそろそろ帰った方がいい感じ？」

私「いや私はまだいけます！」

先輩「電話の音漏れてたでー。はよ帰らな怒られるな。笑」

私「聞こえてたんですか！恥ずかしいです。笑」

こうして最後まで先輩にリードしてもらって、無事に取材は終わった。憧れの先輩と遊べたり、先輩のことをたくさん知れた気がして嬉しかった。改札で別れた後電車に乗りながら「LINEを送った。

私「今日はありがとうございました！取材関係なしに普通に楽しんじゃってました。笑また遊びましょー！」

先輩「こちらこそありがとうございます！めっちゃ喋ってて楽しくて、時間あっという間やった！絶対またあそぼなー!!」

私「嬉しいです！また誘いますねー！」

やっぱり取材を通して杏奈先輩は私には出来ないこと、持っていないことがあるから魅力的に感じるんだなとわかった。私は杏奈先輩みたいに勉強と部活の両立ができるようにこれから頑張ろうと思えた。

終わり

## 大好きなおじいちゃん

聞き手 香月漢琴

○おじいちゃん

今回私が取材しようと思った人は、私のおじいちゃん（神井真）だ。

私のおじいちゃんはとても努力家だ。学生である私よりも自主的にたくさん勉強したり、運動をしたり、本当に尊敬できる、自慢のおじいちゃんだ。

おじいちゃんは、運動、勉強、どちらも大好きだ。運動に関しては、少し前まで家で筋トレをしていた。今でも犬の散歩に行ったり、一人で買い物に行ったりなどして、体を動かしている。勉強に関しては、今でも毎週習字教室に通っていたり、家では英語の勉強を自分でしたり、新聞を読み込んだりなど、たくさん勉強をしている。

そんなおじいちゃんは、実は清教学園の元教師だ。教科は体育担当の先生で、サッカー部顧問だった。当時一緒に働いていた先生たちによると、おじいちゃんにはとてもお世話になったと言っているのを見て、いい先生だったのだなと思った。

私は週に一回おじいちゃんに会いに行っているが、いつも会いに家に入ったらリビングにはいない。自分の部屋で勉強をしている。私が入って物音を立てたらリビングに来る。絶対にいつも、

「こんにちは〜」と言って、リビングに入ってくる。その後「今日の着ている服カッコええやん」や、「今日部活あったんか？」などと、たくさん私に話してくれる。

いつもおじいちゃんはとても優しい。会う日には毎回御飯と一緒に食べているのだが、その時にもたくさん話をしてくれる。世間話であったり、教師時代の話だったり、色々だ。けれど、厳しく私に注意してくる時もある。定期テストの成績があまり良くなかった時、勉強をせずスマホを見ていた時、怒られたことは何度もある。怒られても、「それでも漢琴は頑張っているからな。おじいちゃん嬉しいわ」などと、褒めてくれる。とても優しい。

そんな努力家でとても優しいおじいちゃんはどんな人生を送ってきたのか、私はふと知りたくなった。よくおじいちゃんが小さい頃にあった面白エピソードなどを聞くことはあるが、今の私と同じ年齢の頃はどんな生活や人生を送っていたのか、おじいちゃんの若い頃の話聞いてみることにした。

### ○取材概要

日時 2025年8月16日土曜日 14時30分〜15時15分

場所 テレビ電話

取材相手 神井真さん

自分との関係 祖父

○取材スタート

自分「まず、おじいちゃんはなぜ教師になろうと思ったのですか。」

祖父「えーっと、確か学生の時に教師に『神井、お前は体育の教師目指したらどうだ』って言われて、なるほどなーと思って、確かに自分は運動も好きやったし人も好きやったから教師っていう仕事に魅力を感じたのがきっかけかな。」

確かに、おじいちゃんは人と関わるのが好きだし、運動も大好きだから納得できるなと私は思った。

自分「じゃあ次、今までどんな人生を送ってきましたか。」

祖父「自分は学生時代、家族がキリスト教やったからよく教会に通ってたけど、正直あんまり好きじゃなくて。教会とは離れて、神なんかとは関わりたくないと思ってた。なんか自分でも今こんなこと言ってるのが不思議やな。笑」

自分「今おじいちゃん毎週のように教会に通ってるのに、そんな時なんかあったん」

祖父「うん。まあな。お父さんが牧師しててん。それでよく教会に行くようになった。子供の時は教会学校、CSキャンプ、修養会、バザー、イースター、クリスマスとかで一年中教会と共にある生活。そんな環境で育ったから自分の信仰も育っていったんかな。」

自分「なるほどね。そんな生活やったんや。」

私はそこまでおじいちゃんが小さい頃からキリスト教と関わりがあったなんて知りもしなかったの  
で、とても驚いた。

祖父「中学の時のことやねんけど、お父さんが転勤すると同時に引越ししなあかん時があつてん。  
その時に教会の人たちがお見送りの讚美歌を歌ってくれて、あれはほんまに感動したなあ。」

自分「それは感動やね」

祖父「けどある時、思春期つてのがきてしまったな。親が牧師やからつていい子にしとくのが辛く  
なったり、教会の生活が重荷に感じてしまったりして徐々に離れていった。自分は自分なりに何にも  
縛られずに自由に生きていきたいって思って。そこからほんまに大学では勉強もせず、バイトして  
お金貯めては旅行に行く。の繰り返しやったわ。笑」

おじいちゃんそんな生活をしていた時があつたなんて、私は意外すぎて何も言葉が出なかった。本  
当に驚いた。

自分「それでそこからはどうしてたん」

祖父「ある日、普通にバイトして帰ってご飯食べてる時に、さっき言ったお見送りの讚美歌がラジオから流れてきて、なんか知らんけど涙出てきてん。その時はなんで涙出てきたんかわからんかったけど、後から考えたら、多分子供の頃を思い出して、今の無責任でいい加減な自分が情けななって嫌になったんやと思うわ。」

自分「そんな事があつたんや。なんか映画のワンシーンみたいで感動するな。」

祖父「そうやる。笑 そんな事があつて、またもう一回教会に行こうってなって通い始めてん。久しぶりに行った時は改めて教会の安心感が感じられて、やっぱり自分の居場所はどこだなって思えたな。その教会で出会ったのが、おばあちゃんやねんで。」

自分「え！！ そうやつたん！！！」

初めておじいちゃんとおばあちゃんの出会い話を聞き、なんだか新鮮で、これが運命の出会いかと思えた。

祖父「おばあちゃんと結婚して、子供も生まれて、今では孫も生まれて幸せや。」

○おじいちゃんの教師時代

自分「では最後に、教師をしていて教師になってよかったなと思えた瞬間や、教師を辞めたいと思った瞬間などありますか。」

祖父「1番よかったなと思える瞬間はやっぱり卒業式かな。色々なことを乗り越えてしつかり成長した生徒が嬉しそうに卒業していくのをみたらとても嬉しくて泣いたなあ。」

自分「逆に辞めたいと思ったことは？」

祖父「そりゃ何回もあるよ。教師は人と関わる仕事やから、自分の考え方とは違う人もおるわけやからな。揉めたり悩んだりする事が何回もあったで。そんな時に校長先生に『教師は人と関わる仕事です。悩むことも多いと思うけど、逃げずに人を好きになつてください。』と言われてから頑張れるようになったな。」

私も友達関係で自分の考えとは違う人が多くて、難しいなと感じたり嫌だなと感じることもあるので、もっと人を好きになって人と上手く関われるようになりたいなと思った。

○残りの人生

自分「では最後に、残りの人生をどのように過ごしたいですか。」

祖父「学生時代にあんまり勉強してこなかったから、これからもっといろんなことを知りたいなと思つてます。本を読んだり、調べたりして学びたいなと思つてる。もう歳やから、できるだけ長生きできるように健康な生活送りたいなと思つてる。あとは、死ぬまでにはもう一回体力鍛えて富士山登りたいな。笑 ホノルルマラソンも走りたいな。笑」

なんでも諦めずに頑張つてきたおじいちゃんならいつかその夢が叶う日がきつと来ると私は信じている。

○取材を終えて、私は。

おじいちゃんの取材を終えて、おじいちゃんの様々な意外な面や、おじいちゃんらしい面などたくさん見えた。やはり、人は誰でも挫けたり、落ち込んだりする事がある。それらを終えた上で成長していく。前に進む事ができる。祖父の取材からそのようなことを学ぶ事ができた。

私はこれからの人生、いろいろの嬉しい事があれば、苦しかったり悲しいこともあると思う。けれど、それらを頑張つて私は乗り越えていきたいと思う。乗り越えたらその先にはいい事が待っていると私は信じている。

○おまけ おじいちゃんの教師時代物語

祖父「教師時代はいろんな事があつたよ。例えば焦つたことといえば、昔降誕劇の聖歌隊は本物のキャンドル持つてな。ある生徒が楽譜に火が燃え移つてえらいことになつたわ。笑笑つたことと  
いえば、修学旅行でお風呂にバスタオルを巻いて入つてきた生徒がいたから取るように注意したら、  
その下まだ服着たままやつてん。笑その他にもサッカーの引退試合で負けてみんな泣いてるのをみ  
て自分も泣いて。一緒になつて青春してたなあ。」

幸せそうに思い出話するおじいちゃんの顔を見て、私はとても微笑ましかつた。これからも笑つ  
ていてほしいなど私は心から思った。





## 私のお母さん

聞き手 平山由美

### 話上手の母

私には、とても話すのが好きな母がいる。

いつも母は市役所の公務員の仕事から、家に帰ってくると私に話しかけてくる。「今日は学校で何したん？」「今日疲れたわ〜」などたわいもない会話から始まるが、結局は話が盛り上がってしま

い、いつの間にか母は夜ご飯を作り終わっていたりする。時間を見ると、あつという間に30分経っている時がほとんどだ。

話すのが好きなかなと私が思う場面は他にもある。

母はよくランチやママ会、飲み会に行く。多い時は1か月に3回は行っていたりする。最低でも1か月に1回は行っていると思う。飲み会から帰ってきた時には、よく父に飲み会であったことを、いつ話が終わるのかなと思うくらいノンストップで話している。でも、その内容は面白くて私はとても好きだ。

その中でも、私が母との会話でいつも印象的に残っているものがある。

私は、よく「7って数字はなんでラッキーって事になったのだろうか」や、「名字ってどんな由来でその名字になったのだろう」など、何故そうなったのだろうかと考えてしまう癖がある。この前、

先ほどの名字の話を母に話すと「確かになく、なんでやろうな」とまず返してくるが、5秒ほど経ったかと思えばすぐに「でも、私も市役所で働いている時によくいろんな人の名字見るけど、結構珍しい名字見るわ」と話を広げてくれる。

私が「え、どんな名字あるん？」と聞くと、母は「ん、今はパツと出てこんな」とは言いつつも、いつの間にかスマホの連絡先のところから調べ上げ、「そういや昔書店で働いてたって言ってたやん、その時に上古代（かみこだい）さんとかおったわ」と返してきた。「え、上古代って名前に入ってるのかっこええな」と私が言うと、母は「そうやんなあ」「あと他にも…」という感じでこの会話には家に帰るまで続いた。

こういうところを見ていると、やはり母は話を広げてくれるのも含めて、話すのが上手いなと思う。

私はそんな話するのが好きな母に、今回取材することを決めた。

今回の取材で、母はどこから話題を広げる材料である知識を得たのか、母がいつも話を広げる際に考えていることなどを聞きたいと思いました。

理由は、母と話している時によく感じる事なのだが、母が話を広げてくれる時は大体、母の経験談や知識の話が出てくる。特に母の知識が、話が盛り上がる要因だと思ったので、母はどこで主に知識を得ているのかを聞きたいなと思った。

そして経験についても、母はなんでも興味がちよつとでも湧いたら、積極的に取り組むタイプなので、何かチャレンジしたことがあれば、それも聞きたいなど思った。

取材を始めるまで

母が取材のことを知ったのは、夏休み前に、母が私の夏休みの課題一覧表を見たときだ。

母はその時「この取材ってやつは何？」と聞いてきて、私は「なんか身近な人に取材するやつ」と、本当は課題のタイトルに入っていたはずの「魅力的な人」を母に言うのが恥ずかしくて、誤魔化しながら伝えた。

その後、取材をする日程はもとも決めていたが、いざ取材すると決めていた日になっても、恥ずかしくて取材すると言えなかった。そして、課題の期限ギリギリになってようやく言い出せたので、夜ご飯や風呂を済ませた後に私の部屋で取材を始めた。

母は、寝る前のゆっくりタイムの時だったので、「え〜」という感じではあったが、取材を受けてくれた。

取材概要

日時… 2025年8月26日 9時15分〜9時30分

場所… 自宅

取材した方…平山恵子さん

自分との関係性…母親

知らなかった母の性格

私は改めて取材するとなると恥ずかしくなり、気持ちを落ち着かせてから取材を始めた。まずは取材することの感覚を掴むため、簡単な質問からしていこうと思った。

私「え、話すのは好きですか？ 笑」

母「喋るの？ そやなあ、相手によりけりやけど、まあ喋ってる相手が楽しい事言ってくれたら、興味あることはなるべく沢山聞きたいなって風には思うかな」

私「ちっちゃい時から？」

母「ちっちゃい時はね、めっちゃめっちゃ無口やった気がする。」

母「小学校1年生の時とか、ほんまに何も喋れへんかったと思う。どっちかって言うと、なんか自分1人で遊ぶとか、考えるとか本読むとか、そんなの方が好きやったかな。」

私は今も昔も母は明るい性格だと思っていたため、とても驚いた。

母「でも、小学校2年生くらいの時にこの自分は嫌やなと思って、ちょっと変えたいなって思って、変えたっていうのがあるかな。」

母「それから学級委員やってみようとか、友達も近所の仲良い子とぼつか遊んでたけど、6、7人とか大勢で週に1回集まる会とかに誘ってもらったら行ったりとか、外遊びとかするのにもなるべく遊ぼうと思ってやるようになったっていうのはあったかな。」

母「なんであかんと思ったのかは覚えてないけど、あんまりそういう自分が好きじゃなかったのかもしれないね。」

私「好きじゃないって思うの早い笑」

私「小学2年生か」

母「どっちかと言うと、そういう人間になりたいなと思ったんかな？」

母が自分の性格を変えようと小さいながらに思い、実際に実行したことが本当にすごいと思った。そして、母の小学1年生の頃と、私がたまにする行動が同じで、親子なんだなと改めて感じた。

母の底知れぬ知識の情報源

私「なんか話す時さ、経験的なこういうことあったとかさ、なんかこういうの見たとか、あったけ

どき、どういふところから情報を主に得てるとかあったりするん？」

母「ん、今はまあ調べようと思つたらスマホ1台で調べられるけど、昔の話で言うると、やっぱり本探して、読んでみようかという。」

母「そういうふうを意識的にしたかな、何かわからんかって思つたりした事を、ただそれを調べるだけじゃなく、なんでそんな事が、そういう風な名前になったかとか、もともと気になつてたこととは違う事も、その周辺の事も知つたら面白いなっていうふうな。」

それを聞いて、なんとなく家に本が溢れかえっている理由がわかつた気がした。

そして、他にもどこから知識を得ているのか気になつていたところで、母がタイピングよく話してくれた。

母「学校で多分社会の先生とか、歴史のこととか、凄い上手に教えてくれる先生が小学校、中学校の時に居てはって。その先生の話とか聞いてたら、1人の人物がただ単に、それこそ長篠の戦いで勝ちましたっていうだけが歴史で勉強するし、試験で解かなあかん事やつたりするけど、その人がどんな生い立ちで、どんな風な人になつていったんやつて言うような、そういう事まで教えてもらつてると、物凄く興味も湧くし、その時代の背景もガツて浮き彫りになる感じがするから。なんか興味のあることがあつたら、出来るだけ広げたり、掘つたりとかするのは面白い事やし、それを知つてる

と、ちよつとした豆知識とかで、人がこんな興味あるって言った時、それに、その興味ある事だけじゃなく、そういえばって言うので、なんかお互いに話してて、盛り上がれるかなってことを加えられるかなっていう。

そういうのは、好きやからなんかもしれへんし、今まで経験してきた事の中で、相手と楽しく会話できるタネになりやすいついていう風に、経験則で思ってるようなところも、あるんかもしれへんね。」

本好きの母が好きな本

私「何か本とか、どういうのとか何かよく読んでみたいいな。」

母「高校くらいまでの間に読んでた本はほとんどが、小説やったかな。夏休みとかは名作100選とか文庫の本であつたりとかするから、それを何冊読めるかとかやってみたいとか。休み時間も学生位ときには割と、友達と遊ぶばかりじゃなくて気になった本はもう休み時間でも読みたいから、読むみたいいな。あのくらの時期に、古典も興味があつて、『枕草子』とか『徒然草』とか、現代語訳の対訳つきの原文を読んで、すごい気に入って何冊もシリーズで買ったたりして、興味深くて面白かつたかな。」

あの知識量の母が子供の頃に読んでいた本を知って、私も読んでみたいなと思った。が、それと同

時に「母は人生のうちで何冊本を読んでいるんだ…」とも思った。

膨大な量の情報に向き合ってきた人

私「なんかさ、いつも、お母ちゃんに気になる事とか私聞いてるけど、そう言う時に言ってくれる説明ってどこから知った情報なん?。」

母「なんやろうなく、基本的には学校の勉強じゃない?。」

母「小学校、中学校で勉強した事って、割としっかり覚えてたりするから。」

母「覚えてるって言っても、学校の先生みたいに覚えてる訳じゃなくて、興味のあることを覚えてるって感じ?。」

母「その時の記憶と共に覚えてる感じ。先生言っはったなっことも、割と中学校位までの記憶ってしっかりしててんな。で、高校から先って言うとおんまりそのエピソードと一緒に言う感じじゃないから、学校の勉強難しくなっていくから。そんなによもやま話みたいになしてくれはる先生も少なくなるし。勉強する時間が増えるけれども、余計なことって感じのことが少なくなるからあんな記憶に定着してないなあって思ったりするけど。」

その時にいろいろ広げてやったことは、この面白いなあとか思ったら、歴史の本、教科書読むだけじゃなくて、例えば歴史関係の小説とかもいっぱい読んでみて、『あ、そう言う風な考え方あるんや』とか。小説っていうのはやっぱりフィクションやから、ほんまのことばっかりではないけれど

も、ノンフィクションを元にして書かれてる小説とかもあるから、作者の考え方みたいなのを、そこに乗つけられてるやん？ それが面白いし、そうすると嘘も含まれてるかもしれないけれども。

例えば人間ってどういうものって言うようなことについては、作者が思ってる人間ってこういう本質を持つてるとか、そういうのにすごい共感するっていうのはあつたりするやん？ 由美かつて、本読んでたらさあ、自分と同じこと考えてるなあって作者が考えてたり、主人公とか登場人物が考えることに共感する、そんなふうによく考えることもできるんやなあって知つたりすることができる。そういうようなのをいっぱい積み重ねていったら、いろいろな知識になつて降り積もつていく感じがある。

で、由美がこんなふう疑問に思うつていうことを、お母さんも疑問に思つた経験が同じようにあるからさあ。そしたらそれについて先に考えてるわけやん？ 先にそういうことに疑問に思つた経験を持つてるわけやから、答えを持つてるか持つてへんか別として、気持ちとか何を今わからへんと思つてんのかつて言う事は、すぐ共感できたりするから。そしたら、こういう風な時にわからへんけど、調べ方としたらこういうこと調べたらいいんじゃないとか。誰々さんにこんなこと聞いてみたら知つてはるんちゃうとか。お母さんでわかるんやつたらこういうの調べてみてあげようかなあ、と思つてちよつと調べてみるとか。そういうことができるつていう感じかな。だから手間に思わずに、自分の興味のおもむくままに、ちよつと調べてみる、ちよつとだけ深掘りする。

ただ単にニュースで流れてくるのを『あゝそうなんや。』つて思うのだけやつたらあんまり定着せ

えへんけど。そうじゃなくて、その中で言っただけのことって、ほんまはどうなんかなと思って、こ  
う言っただけのは、この人がこう言っただけであって、本当にそうなんかどうか、別の考え方と  
ないのかとか、そういうふう調べてみる。1個の考え方があっても、それが絶対に正しいことじゃ  
なくて、『この人はこう考える』で一旦置いておく。自分はどうか考えるのかわかってところになつたら、そ  
のと同じ考え方なのか、それともほんまは周辺の状況とか言うのを見たら違う考え方なのか、いろ  
いろ考えていくうちに自分の考えができてくるって感じ？ そういうのが大事なんちゃうかなあ、と  
かは思ってるかな。

それこそ氷山の一角だけ見ただけで、そうやって思い込むのは危険やなんていうのは長いこと生き  
てきてわかるようになってきたから。若いときにはそういうふうになかなか思えなかったけど、自分  
が1番正しいし、今インスピレーションで感じたこととか、何か魅力的な人が喋ってることであつた  
ら正しいって思ったりとか、そういう風な失敗もいっぱいしてきてるから。それだけではないはずや  
ろうっていう、良い意味での疑いつていうの。自分の考えはどうしたらいいんやろうって思うために  
やっぱり何かの事があつたら考えるって言う癖をつけていったら、いろんな人と話しても話せる  
ようになってくるかなって感じ。相手に興味を持ってへんかったら話されへんと思うねん。

自分が喋りたいことだけ喋つとつても相手は楽しくないと思うし、自分もほんまの意味では楽し  
くないと思うから。相手に対する興味をどういうふうによく持つていくか、相手がこうなんちゃうか  
と思つたら、どういう風に話向けたらもつとその話を聞き出せるのかなあって考えることであつたり

とか。自分の話を楽しく聞いてもらうためには、この人がどういうことを楽しいと思うかって言うようなことを。ずっとそればかり考えてるわけじゃないけど、そういう風な考えで喋っていいのかなあって思うのは大事なんかなあと思ってるかな。」

母が世の中の溢れかえる情報に対して、鵜呑みにせず、しっかりと向き合っているということが聞いていて分かったし、母なりの向き合い方とその情報を話すときに、話す相手についての考え方が凄く参考になったと思った。

何歳でもチャレンジはできる

私「じゃあ最後で、なんか絵の賞とか取ってるやん？」

母「うん。」

私「そういう感じで、何かチャレンジしたことってあるん？」

母「絵の賞以外の話でってこと？」

私「うん」

母「んゝ何やろうな。まあ、最近で言ったら、この仕事（市役所の職員）に就いてからまだ5年目やけど、その前に試験あったやろ。その試験を受ける時つてもうお母さん45歳やん？ その時に改めて中学生高校生の国語とか数学とかを、勉強し直さなあかんかったから、やった事はあるし、多分

その時の方が点数良かったと思うけど。で、それを学び直さなあかんて思ったときに、いろんな参考書買ってみたり。ネットのそういう対策の、オンラインでのテストやったんやけど、2分以内に1問答えなあかんて言うカテゴリーの中でやる勉強とか色々してんね。仕事しながらやったし、楽ではないなあって思ったけど、でもやってみるって事は別に結果がどうであれ、自分には何か残るはずと違ってやったかなあって思って、うん。」

私「ありがとう笑」

母「はい笑」

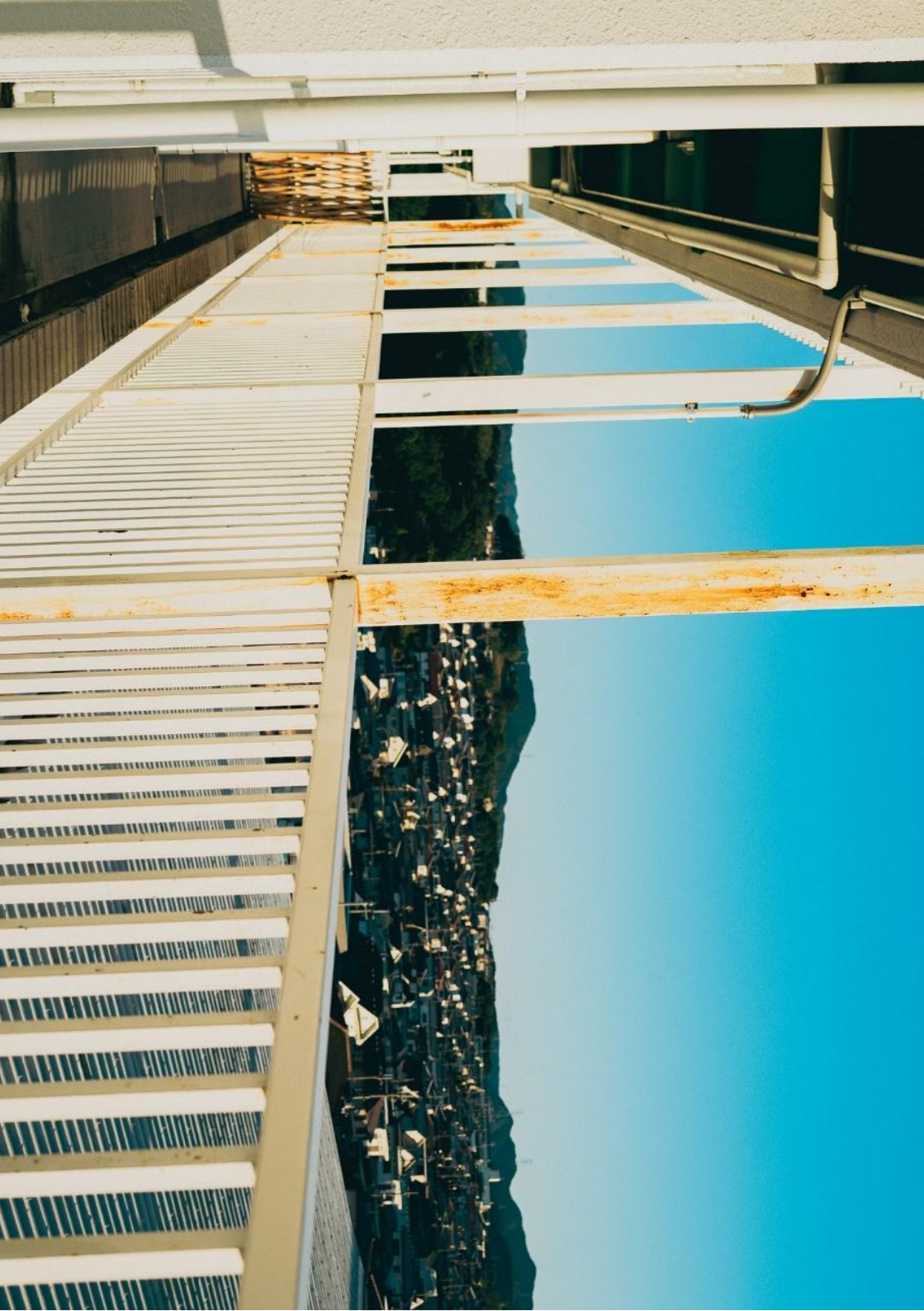
取材を終えて

取材をしてみても、今の話上手で知識人の母があるのは、小さい時から積み重ねてきた努力や、自分で考えて行動するという、当たり前前のことでも難しいことを母が人生のうちでしてきたからだと感じた。

私も母みたいに、沢山経験を積み重ねて、自分の人生を生きて行きたいなと思った。

そしてこのように文字にしてみても、母は私の質問に対してどれも沢山話を広げて話してくれたなと、やっぱり話すのが好きなんだと、改めて感じた。





あとがき 語りが生まれるとき

授業担当 山崎勇氣

高校生の頃、ある冬の日の夕食後だったと思う。自宅のコタツでミカンを食べていたときに、なぜだか母の高校時代の恋愛話になった。

別に大それたドラマがあったわけではないし、とくべつ面白い話だったわけでもない。ただ母は、自分がフォークソング部に所属してギターを弾いていたことと、「そんなときな、付き合ってた人がおっくん」とだけ語った。私はといえは、「ふうん」と適当な相槌を打ったりして、それ以上は追及しなかった。

BGM代わりにつけたテレビのバラエティ番組では、タレントが下らないことを喋って大げさに笑っていた。その後、今日にいたるまで、母の恋愛話が話題になったことは一度もない。

\* \* \*

地元の茨木市に、長く続く模型店があった。好々爺然とした店主の親父が、いつもカウンターの座っている。私は何か買っていくというよりも、その親父と喋りたくて、学校をサボっては店に通った。

彼はあまり自分の過去を話さず、もっぱら模型製作技術の話題が多かったのだが、ある時、戦中・戦後の思い出を語ってくれたことがあった。近所の茨木高校が、外壁を真っ黒なペンキで塗りつぶし、屋上に高射砲陣地を築いていたのを見たこと。戦後何もモノがない中、有り合わせの木材を使い、飛行機や艦船の模型を作ったこと。スポーツカー好きの客が親の介護のために愛車を売却し、それに泣かされたこと。

その話をして以降、彼が自分の過去を語る機会はなかった。私も進学や就職で忙しくなり、住む場所も変わって、もうあまり、模型店に顔を出すこともなくなった。

何年か経ったあと、彼が店を畳んだことを風のうわさで知った。

\*\*\*

あの時の感覚を、いまでもたまに思い出す。

長崎県の離島で生まれ、十八歳までを島で暮らし、大阪の看護学校に進学した母。見知らぬ街で、新たな人々と出会い、子を生み育てた母。彼女にも、私と同じく高校時代があり、付き合う相手があった。

戦後に小さな模型店を開業し、地元の模型愛好家の人生を見届けてきた、店主の親父。創業六十年の節目で、高齢を理由に店を閉じた店主の親父。彼は長い年月をひとところ働いて、街の人々と関わりながら、最後は仕事人生に幕を下ろした。

なにも特別なドラマなどなく、偉業もなさず、ただ自分の人生を送る人々。誰もが、どこまでも普通で、ありふれた人生を送っている。

たったそれだけのことに気が付いた時、目の前にいる人々がまるで違う人物のように見えはじめた。

たまに挨拶する近所のおばちゃんにも。苦手だった数学科の教員にも。散歩中に会う、丸い眉毛をしたよその家の柴犬にも。どのような相手であっても、いまこの瞬間、私という存在の目前に立ち現れるまでに、その人にしか語り得ない、ありふれた人生があった。

彼らが自分のことを語る。私はその語りを聞き、彼らが生きた年月に思いを馳せる。たったそれだけのことで、自分の中で何かが変わった気がした。何もない自分にも、何かを語ることができそうな気がした。

何が変わったのかはわからない。あの頃の私に、何が語れたのかもわからない。ただそれは、「何者かでありたい」「何者かにならなければ」と必死になり、やりたいことを探し、難しい本を読んでもがいていた当時の私を、少しだけ救ったような気がするのだ。

ときに、この作品集がどのような経緯で発行されたのかを記しておく。

本稿は、清教学園中学校76期 2025年度 中学2年「総合的な学習の時間」における成果物をまとめた作品集である。授業の名称は「身近にいる魅力的な人に取材する…お互いがはみだしていく経験」。その名称の通り、「魅力的な人」を生徒自身が検討し、その人物の魅力に迫る取材を実施し、記録に書き起す、という趣旨だ。授業を始めて2025年度で3年目となった。

授業は次の三つの局面に分けることができる。最初に、取材相手を決め、動機を検討する1学期（8回）。次に、実際に取材し文字に起こす夏休み期間。そして最後に、推敲しながら原稿を完成させていく2学期（5回）。いずれの局面でも、黙して執筆する時間と、生徒どうしが互いの原稿について議論する時間を交互に取り入れた。

指導に関して、担当教員である山崎・南との間で、事前に取り決めたことがあった。それは、我々教員が作品の「よさ」を方向づけないことだった。たとえば今回、取材相手の選定や、取材内容の検討について、教員による助言は極力避けた。また、生徒が書いた原稿については、草稿・完成稿のいずれにも、添削指導を行っていない。その理由は、生徒が「じぶん自身の言葉で語る」ことを重視したからだ。

文章を書けない。作文が苦手である。こういった生徒が多く存在する状況は、中学3年で自らテーマを決め、卒業論文を執筆する清教学園中学校において、長年の指導上の課題だった。だが、生徒の苦手意識の根底にあるのは、単に作文のスキルや能力の問題ではなくむしろ、自由に書いて表現できない、じぶん自身の言葉で語ることができない、学校の作文授業の設計に課題があると感じていた。

この実感が、「教員による指導を極力避け、テーマも自由に書かせて、生徒どうしの相互評価に任せる」ことを是とした、本実践の在り方を方向づけた。論理的文章を書く前に、まずは作文に書き慣れ、じぶん自身の言葉で語るトレーニングの一環である。

作品集完成は、ひとえに生徒が「魅力的であるとはどういうことか」というたいへんな問いに、果敢に挑んだ結果だ。生徒どうしの議論では、相手の原稿に対して、次のようなツツコミが常に飛び交った。

「あなたはなぜ、その取材相手を選んだのか」

「あなたにとって、その取材相手は一体何なのか」

「あなたが語るその人の魅力は、本当にその人自身の人格に迫るものなのか」

社会ではともすれば、役に立つか立たないか、優秀かそうでないかで人が評価される。学力競争の荒波に採まれる本校においても、その傾向は同様にある。しかし1学期の授業を通じて、「魅力」という言葉を基準に取材相手を検討した生徒は、役立つか、優秀か、という評価基準を次第に捨て去っていった。そして学期の最後には、「よくわからないけど、魅力的としか言いようがなく、自分にとって大切な存在なのだ」という、元も子もない結論に至った。

夏休みの取材では、その「よくわからない魅力」に迫るわけだが、それが成功しているか否かは、それぞれの生徒作品を読んで判断して頂きたい。

本実践で参考にした先達の授業実践を挙げる。深谷による実践「カキナーレ」（注1）は、本校の一連の作文カリキュラム構築において、重要な先行実践例となった。テーマ、文体、分量、虚実を問わず、ペンネームによる生徒どうしの相互評価を重視するユニークな取り組みは、現在の中学生にも十分通用している。

また、細川が実践し、牲川がまとめた、早稲田本庄高等学院『日本語表現総合』（二〇〇〇年度）での授業（注2）は、今回の取り組みで直接参考にした。魅力的に感じる人物の検討と取材、生徒どうしの議論を通じて、「わたしを語る言葉」を求めていく当時の高校生たちの様子は、暗闇の中で新たな授業実践に取り組みようとする我々の希望だった。先立つ二つの授業実践者に感謝申し上げたい。

ほかに本実践に強い影響を与えた書籍として、松村による『はみだしの人類学』（注3）も挙げられる。同著は「わたし」と他者との間にある差異を受け容れ、互いに「わたし」の輪郭からはみだしあい、つながり、変容しながらともに生きる方法を示した。生徒にとつては取材相手はもちろん、互いの原稿に意見し合うクラスメイトもまた「わたし」とは異なる他者だったはずだ。授業で彼らは「はみだしあう」経験ができたのだろうか。他者と関わり合う人生のどこかで、ふと、この授業のことを思い出してくれたら嬉しいと思う。

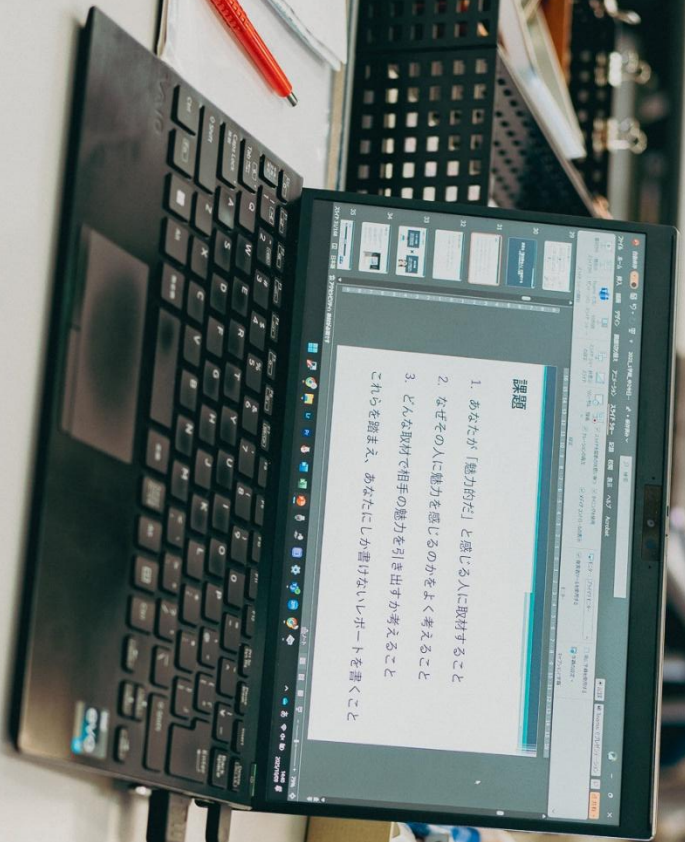
作品集発行も今年で3年目となる。ありがたいことに、これまで学外の方からも多くの反響を頂いてきた。その中で、社会学や教育学、組織経営に関する書籍を数多く刊行しておられる勅使川原真衣氏（注4）からは、「149人×2×無限…の人と人のあいだの話は、いつまでも読み続けたいと思うものでした。教育ってこういうことなのだろうと咀嚼中です。」とコメント頂いた。氏は著作の多くで、能力主義的価値観と教育・社会の在りようとの関連に切り込んでいる。それは図書館教育や論文執筆の授業も含む、私自身の教育実践全体の根底に流れる観点でもある。それ故に、コメントはこの授業と社会との関連を想起させた。ただ、勅使川原のコメントを読んだから私は、授業中に不思議な感覚を覚えるようになった。生徒が静かにキーボードを叩く様子を眺めていると、だんだん自分が「社会」のなかに埋没していくような感じがするのだ。家族、友人、先輩後輩、習い事の師、近所の隣人、駄菓子屋の店主…と、私の知らない無数の人々の人生が、生徒との間のエピソードが、目の前を通り過ぎていく。この世界で生きる人々の魅力、それを想う生徒の語りの中で、やがて私の授業者としての役割は遠景になる。ただそこに在る人々の関係性に埋もれて、自らの存在感が失われるように。それは、この手の授業の在り方としては成功といえるのだろうか。

（注1）深谷純一（2021）『カキナレ…若者の本音ノートを読む』東方出版 ほか

（注2）性川波都季・細川英雄（2004）『わたしを語る言葉を求めて…表現することへの希望』三省堂

（注3）松村圭一郎（2020）『はみだしの人類学…ともに生きる方法』NHK出版

（注4）勅使川原真衣『能力』の生きづらさをほぐす』どく社、『これくらいできないと困るのはきみだよ？』東洋館 ほか



### 課題

1. あなたが「魅力的だ」と感じる人に取付すること
  2. なぜその人に魅力を感じるのかをよく考えること
  3. どんな取付で相手の魅力を引き出すか考えること
- これらの題を踏まえ、あなたにしか書けないレポートを書くこと

あとがき はみだす・はみだされる経験

授業担当 南百合絵

この授業を始めるときはいつも、うまくいくかどうか、不安が大きい。みんなが本気になってくれないと成立しない授業だからだ。でも、そんな心配は杞憂だった。

この授業を始めて3年目。76期生は、先輩たちの作品集2冊に助けられて、この授業に取り組んだ。

みんなが本気になってくれないと、単なる「大変でめんどうな課題」で終わってしまう授業に、76期生も本気で取り組んでくれた。自分と取材相手の素が見える語り、それを素直に作品としてまとめてくれたなあと、しみじみ思う。それには、先輩たちが作品として残してくれた「背中」が大きく影響している。先輩の作品集を読むことで、みんなはそこにある先輩たちの本気を感じ取ってくれた。この授業的に言うと、まずは先輩たちがみんなに「はみ出し」た。

76期生の作品集を作るにあたって、あらためてみんなの作品を読んで、なんとも言えない気持ちになった。みんなの「今」が、ここに冷凍保存されている。未完成の作品もあるし、取材の文字起こし原稿から大幅にカットしてまとめてしまい、個人的には残念だと思う作品もあるが、「これが私の原稿です」と提出してくれたそれぞれの作品には、なんとも言えない味がある。「今」のあなたにしか書けない作品だ。この作品を読んで、みんなの違う顔が見えて、ますますみんながいとおしくなった。

自分としては、うまくいかなかった、とか、ほかの子の作品と比べて自分の作品はよくない、とか思うかもしれないが、この授業に参加したこと、クラスメイトと同じ場を共有し、自身で「あーでもない」「こーでもない」と考えた経験も、「はみ出し」たひとつの経験である。いまは、それがなにか、どういつ

た経験かなんてわからないかもしれないし、もしかするとずっとわからないかもしれない。でも、中2のこのときに、クラスメイトと、インタビュ―相手と、教員と、対面で、文章で、向かい合って語り合ったという経験は、あなたを形作るなにかになってくれるのではないかと思っている。

この授業を通して、みんなが私に「はみ出し」で、もしかすると私もみんなに少し「はみ出し」た？かもしれない。

来年には、みんなの作品も先輩の作品として、77期生に「はみ出し」てくれるだろう。

生徒作品集 2025

清教学園中学校 76 期 中学 2 年「総合的な学習の時間」生徒作品

## 語りが生まれるとき

- 清教学園中学校 76 期 2 年「魅力的な人に取材する」作品集 -



本書は第三者への共有が可能です。PDFがアップロードされている URL をご利用下さい。  
本書に収録されなかった全ての生徒作品は、クラス別に製本され、清教学園図書館に収蔵  
されています。また、授業実践の詳細は別途資料にまとめています。併せてご参照下さい。

---

2026 年 5 月 28 日 発行

著 者：清教学園中学校 76 期 2 年

編 者：山崎勇氣・南百合絵

写 真：清教学園中学校 76 期 2 年有志・山崎勇氣

発行所：清教学園中・高等学校

〒586-8585 大阪府河内長野市末広町 623

TEL 0721-62-6828

<http://www.seikyo.ed.jp/>

印刷・製本：株式会社 シンカ・コミュニケーションズ

---



本書はクリエイティブ・コモンズ・ライセンスを採用しています。原作者のクレジット  
(著者、編者)を表示し、なおかつ作品を改変しないことを条件に、非営利目的での利用  
(転載、コピー、共有)が行えます。ご不明な点は清教学園までお問い合わせください。